

41814

教科書文庫

4
810
41-1927
20000 39909

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

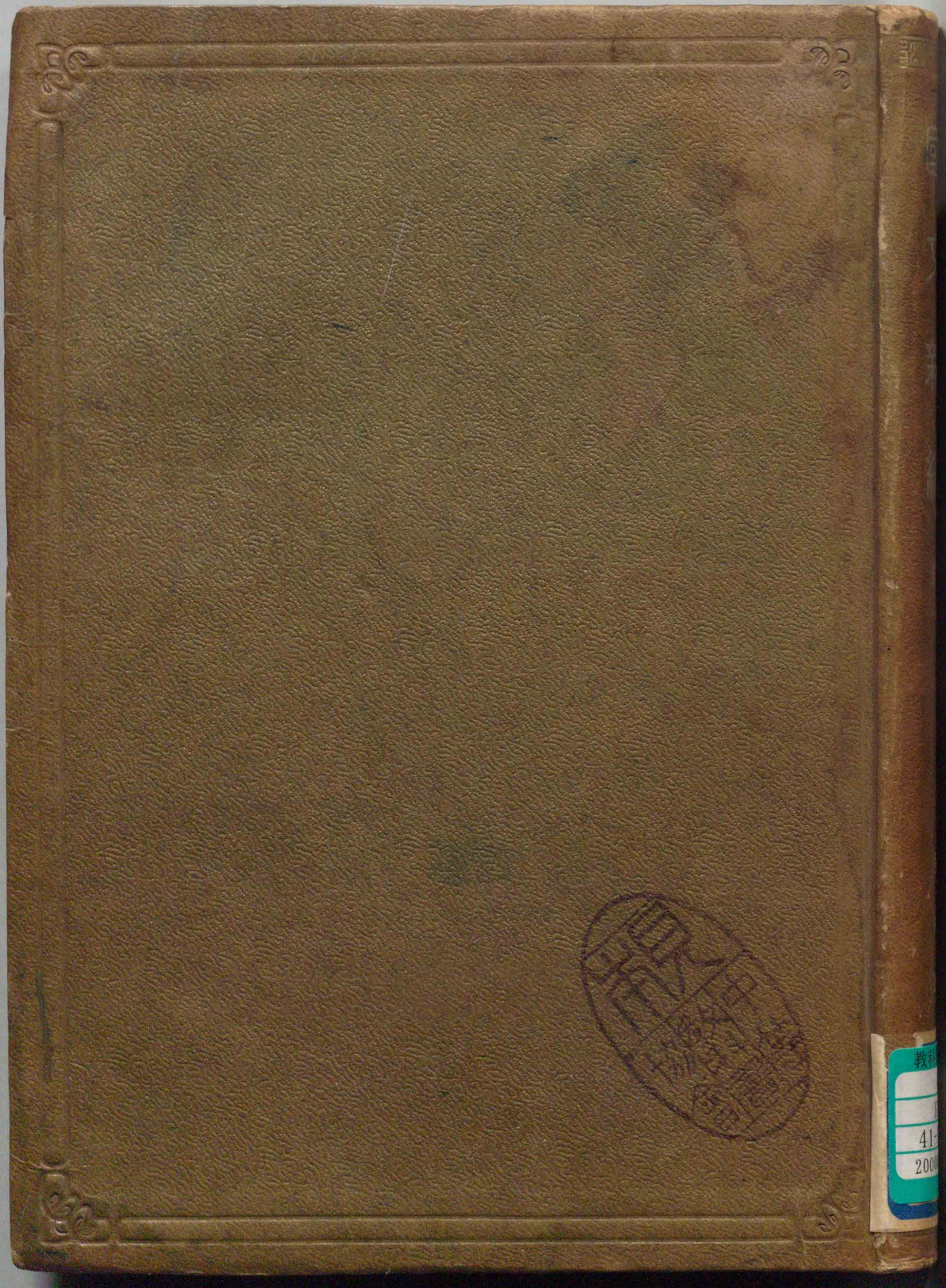
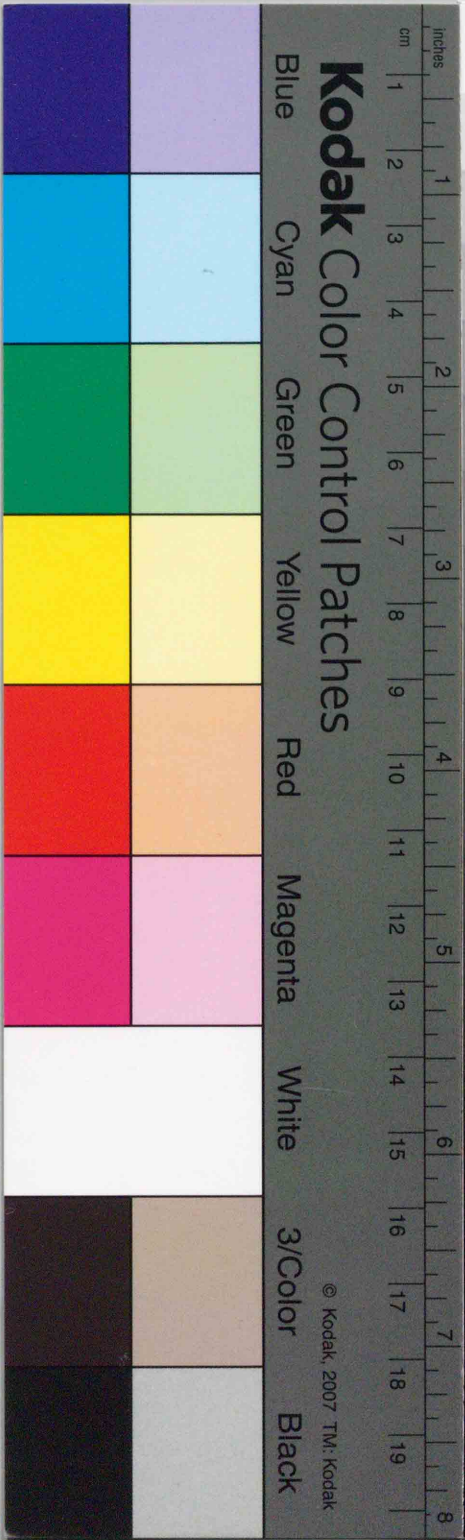


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科
41-
2000



資料室

教科書文庫
4
810
41-1927
2000039909

275.9
Ka9

日 四 十 月 二 年 二 和 昭
文 部 省 檢 定 濟
中 學 校 國 語 科 用

國
文
新
編
卷
一

東京高等師範學校教授垣内松三編

(第一學年用)

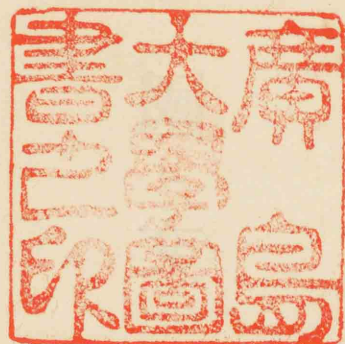
広島大学図書

2000039909



社 會 式 株

田 神 ・ 院 書 治 明 ・ 京 東



一 縦に學年を貫き横に學期に互りて特に全篇の組織に留意せり。

一 教材の選擇に關しては作品の本質と學習の態度とを考慮せり。

一 原作の更改は教科書としての用意に出づ原作者の諒恕を乞ふ。

目次

一	島崎藤村	小さな旅人
二	二葉亭四迷	犬ころ
三	久米正雄	競漕
四	五十嵐力	苺
五	芥川龍之介	トロッコ
六		鮎
七	島木赤彦	詩二篇
八	高濱虚子	静寂
九	長塚節	蛙
一〇	藤森成吉	大地の匂(友へ)
一一	鈴木三重吉	小鳥の巢

六 一〇 三三 三三 三三 五五 五五 七六 八二

一二	窪田空穂	露營
一三	北原白秋	お祭
一四	若山牧水	草鞋の旅
一五	坂本四方太	川霧
一六	大類伸	水の都
一七	吉田絃二郎	千年川のほとり
一八	姉崎嘲風	汝の母
一九	蘆田恵之助	大道を行く
二〇	吉村冬彦	凌霄花
二一	グェスト	記念の家
二二	森鷗外	安井息軒
二三	夏目漱石	二百十日
二四	永井荷風	リヨンの郊外

九二 100 103 114 115 119 120 124 124 141 144 149 154 164 171 186

二五	正岡子規	箱根山	一九〇
二六	河東碧梧桐	子規の絶筆	一九一
二七	千家元麿	鳩	一九五
二八	鈴木鼓村	自然の音楽	二〇二
二九	河上肇	鍵の國と障子の國	二〇三
三〇	中村正直	否の一語	二〇九
三一		ことわざ	二二一
三二	長與善郎	三人の時計	二二四
三三	大町桂月	修養二題	二二五
三四	國木田獨步	非凡なる凡人	二二五
三五	(インツプ物語)	インツプより	二六五
三六	石川啄木	短歌抄	二七〇
		毬	二七〇

三七	土岐哀果	炎天	二七二
三八	五十嵐力	至情	二七四
三九	沼波瓊音	伊勢參宮	二七八
四〇	徳富蘆花	一月の日記	二八三
四一	正木不如丘	兎狩	二八六
四二	(趣味の傳説)	三太郎風	二九二
四三	澁川玄耳	湖山長者	三〇三
四四	島崎藤村	國引	三〇九
四五	(世界お伽噺)	日の出る前	三一一
四六		世界一の大豪傑	三二七
四七	(官報)	海底	三三九
附録		御詞	三三九
		話釋	三三九

島崎藤村
名は春樹。明治
學院出身。
文學者。

心に聴いた聲

一 小さな旅人

島崎藤村

名もない草が路ばたの石のわきに咲いて居ました。そこを通りかゝりますと、

「今日は、あなたはなぜそんなに急いで居るのですか。」とその草が聲をかけました。

「私ですか。私は貧しいものですから、読みたい本も思ふやうには手に入りません。でも私はいろいろ本を讀んでお友達に後れたくないと思ふのです。私はあつちの人の生涯にも、こつちの人の生涯にも、精神の旅をして見たいと思ふのです。私は小さな旅人です。それでかうして急いで居るのです。」

「精神の旅」

「小さな旅人」



「讀まうとさへ
思へば」

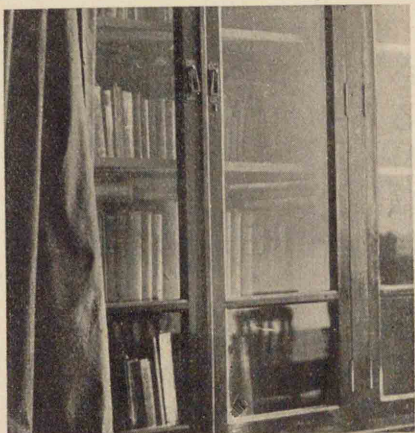
と答へました。

「まあ、この石の上に腰をかけて見て下さい。讀まうとさへ思へば、本はこの石の上にもありますよ。わたしも名もない草ですが、あなたのやうな人に讀んで貰ひたいと思つて、かうして小さな本をひろげて居りますよ。」とその草は言ひました。

ある日、私は私の學校の圖書館の二階へ上つて見ました。私は本棚の間を見て廻りました。本と本とが澤山向かひあつて並んで居ました。誰も手に觸れたことのないやうな本

鉛筆を削る音

書籍の墓地



が塵埃の間から顔を出して居るのもありました。そこでは高い聲で話をするものもありませんでしたから、そこいらは森として居ました。たまに聞えて来るものは鉛筆を削る音ぐらゐのものでした。

そこは書籍の墓地でした。いろいろな本を書いた人達が、その静かなところで眠つて居ました。私はさういふお墓の並んで居るところへ行つて、そこに眠つて居る人達の名前をあちらこちらと読んで歩きました。あるお墓の前に立止つて眺め入つて居た時でした。不思議

「お墓といふのは何か

「活きかへり活きかへりする」力

議にも此方ですこし眼をさましかけましたら、そこに眠つて居ると思つた人が、お墓から起上つて來ました。そのお墓の方から青々とした麥畑の中に鳴く雲雀の聲がして來たり、廣々とした野原のあたりから若い百姓の唄が聞えて來たりした時は、私もびつくりしました。

その時になつて、そんなお墓に眠つて居ると思つた人達が、私達の胸に活きかへり活きかへりする時のあることを知りました。(をさなものがたり)

山路來て何やらゆかしすみれ草

芭蕉

二葉亭四迷

本名は長谷川辰之助。文學者。明治四十二年歿、年四十八。

終の一節と照らし合はせて

讀め

うすら寒い春雨の夜

二 犬ころ

二葉亭四迷

嬉しいにつけ、悲しいにつけて憶ひ出すのは、親のこと、それにポチの事だ。

忘れもせぬ、祖母の亡くなつた翌々年の、春雨のしとく、と降る、薄ら寒い或夜のことであつた。私は例の通り、宵の口から寐てしまつたが、ふと目をさますと、遠くでかすかにきやんく〜といふやうな聲がする。不思議に思つて、耳を澄ましてゐると、次第に大きく高くなつて、遂には確かに門前に聞える。疑もなく、小狗の啼聲だ。時々咽喉でも締められる様にけた、ましく、きやんく〜と啼立てる。其の聲尻がやがて

「小狗の啼聲」

かぼそく悲しげになつて、めいるやうに遠い〜處へ消えて行く。と思へば、忽ち又近くで堪へきれぬやうに啼出して、くんく〜と鼻をならすやうな時もあり、ぎやおと欠まきをするやうな時もある。

私は元來動物好で、わけても犬は大好だから、近所の犬は大抵知つてゐる。けれども、こんなかぼそい、いたいけな聲で啼くのは、一匹も無い筈だから、不思議に思つて、そつと夜着の中から首を出すと、

母と子供

「どうしたの。寐られないのかえ。」
と母が寝返りを打つて、こちらを向いた。私は此の返答をさし措いて、

「あれは白ぢやないねえ、阿母さん。もつと小さい狗の聲だねえ。どうしたんだらう。」

「棄狗さ。」

「棄狗つて、なあに。」

「棄狗つて、誰かが棄てていつたのさ。」

私はしばらく考へて、

「誰が棄てていつたんだらう。」

「大方何處かの……何處かの入さ。」

何處かの人が狗を棄てていつたと、私は二三度繰返して見たが分らない。

「どうして棄てていつたんだらう。」

母は「うるさいよ。」ともいはないで、何處までも相手になり、其の意味を説明してくれて、「もう晚いから黙つておやすみ。」と優しく言つて、彼方を向いてしまった。



私も亦夜着を被つた。狗は門前を去つたのか、啼聲が稍遠くなる。寐られぬ儘に、私は夜着の中で、今聞いた母の説明を繰返しく味つて見た。

まづ何處かの飼犬が縁の下で兒を生んだとする。小さなむくくしたのが重なり合つて首を擡げて、みいくと乳房を探してゐる處へ、親犬が餘所から歸つて來て、そのそばへ

どさりと横になり、片端から抱へ込んでべろ／＼舐めると、小さいから舌の先で他愛もなくころ／＼と轉がされる。轉がされては大騒して起返り、又よち／＼と這ひよつて、ぼつちりと黒い鼻面で、お腹を探り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探り當てて、あわててちうと吸附いて、兩手で揉立て／＼吸ひだすと、甘い温かな乳汁がどく／＼と出て來て、咽喉へ流れ込み、胸を下つて何とも言へずおいしい。と、腋の下からまだ乳首にありつかぬ兄弟が、鼻面で割込んで來る。取られまいとして、産毛の生えた腕を突張り、大騒をやつてみるが、と／＼取られてしまひ、又そこを尋ねて、他の乳首に吸附く。其の中にお腹も一杯になり、親の肌で身體が温まつて、融

けさうな好い心持になり、ついうと／＼となると、く／＼んだ乳首が脱けさうになる。夢心地にもあわてて、又吸附いて、一しきり吸立てるが、直ぐに又たわいなくうと／＼となつて、乳首が遂に口を脱ける。脱けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向正體がない。

其の時忽ち暗闇からもじや／＼と毛の生えた、節くれ立つた大きな腕がぬつと出て、正體なく寐入つて居る處をむづと引摺み、宙につるす。驚いて目をばつちり明き、いたいけな聲で悲鳴をあげながら、四足を張つて藻搔く中に、頭から何かで包まれたやうで、眞暗になる。窮屈で息が詰りさうだから、出ようとするが、出られない。しばらく藻搔いて居る中

に、ふと足搔が自由になると、領元を撮まれて、高いく處からどさりと落された。うろくとしてそこらを見廻すけれど、何だか變な寂しい眞暗な處で、誰も居ない。茫然としてゐると、雨に打たれて、見る間に濡れしよぼたれ、怖ろしく寒くなる。身慄一つして、くんくんと親を呼んで見るが、何處からも出て來ない。途方に暮れて、よちく這出し、雨の夜半を唯一ひとり、温かな親の乳房を慕つて、悲しげに啼廻る聲が、先刻一度門前へ來て、又何處へかさまよつていつたやうだつたが、それが何時か又戻つて來て、何處をどう潜り込んだのか、今は啼聲が正しく玄關先に聞える。

「阿母さん、阿母さん、門の中へ這入つて來たやうだよ。」

と、私がか居た、まらないやうな氣になつて又母に言ひかけると、母は氣の無ささうな聲で、

「さうだね。」

「出て見ようか。」

「出て見ないでも好いよ。寒いぢやないかね。」

「だつて、あら、あんなに啼いてゐる。」

と、をりから聞える絶入りさうな啼聲に、私は我知らずむつきり起きあがつたが、何だか一人ではこはいやうな氣がして、

「よう、阿母さん、行つて見よう、よう。」

「本當に仕様がなない兒だねえ。」

風にゆらく雪
洞の火

と、口小言を言ひく、母もしぶく、起きて、雪洞を點けて起
きあがつたから、私も其の後に跟いて、玄關と云つても、つい
次の間だが、玄關へ出た。

母が履脱へ降りて、格子戸の掛金を外し、がらりと雨戸を
繰ると、颯と夜風が吹きこんで、雪洞の火がちらくと靡く。
其の時小さな鞠のやうなものが、つと軒下を跳び退いたや
うだつたが、やがて雪洞の火先が立直つて、一道の光がさつ
と戸外の闇を破り、雨水の處々に溜つた地面を、一筋細長く
照らし出した處を見ると、つい其處に、生後まだ一箇月も經
たぬ、むくくと太つた、赤ちやけた犬ころが、小指程の尻尾
をちぎれさうに掉立てて、此方を見上げてゐる。なりは私が

青貝のやうな
眼

寢て居て想像したよりも大きかつたが、果して全身雨に濡
れしよぼたれて、泥だらけになり、だらりと垂れた、割合に大
きい耳から、雫を滴らせ、ぼつちりと兩の眼を青貝のやうに
並べて光らせてゐる。

「おやく、まあ可愛らしい。」

と母もつい言つてしまつた。況や私は犬好だ。ちつとして見
ては居られない。母の袖の下から首を出して、ちよつくと
呼んで見た。

すると左程怖れた様子もなく、ちよくと側へ来て、流
石に少し平べつたくなりながら、頭を撫でてやる私の手を、
下からぐいぐい推上げるやうにして、べろくと舐廻し、手

をくれるつもりなのか、頻りに圓い前足を舉げて、ばた／＼
やつてゐたが、果はやはりと痛まぬ程に小指を咬む。

私は可愛くて可愛くてたまらない。母の面を見上げなが
ら、少し鼻聲を出して、

「阿母さん、何か遣つて。」

「遣るのも好いけれど、居附いてしまふと仕方がないから
ねえ。」

と、口では拒むやうな事を言ひながら、それでも臺所へ行つ
て、缺椀に冷飯を盛つて、何かの汁を掛けて来て下さつた。

早速履脱へ引入れて之を當てがふと、小狗は一寸香を嗅
いで、すぐ旨さうに、まづびちやく／＼と舐めだしたが、汁が鼻

「切りに小言を
言ひながら」

の孔へ入ると見えて、時々くしん／＼と小さな嚏くしゃみをする。忽
ち汁を舐めつくして、今度は飯に掛つた。他に争ふ兄弟もな
いのに、切りに小言を言ひながら、がつ／＼と食べたが、
飯は未だ食べなれぬかして、兎角上顎に引附く。首を掉つて
見るが、そんな事ではなかく、取れない。果は前足で口の端
を引搔くやうな眞似をして、大藻搔くに藻搔く。

此の隙に、私は母と談判を始めて、今晚一晚泊めて遣つて。
と、雪洞を持つた手にぶらさがる。母は一寸澁つたが、もうか
うなつては仕方がない。阿父さんに叱られるけれど、「と言ひ
ながら、詰り棧俵法師を捜して来て、履脱の隅に敷いて遣つ
た。それは好かつたが、其の晩一晚啼きとほされて、私は些と

「ポチと云ふ名

も知らなかつたが、お蔭で母は父に小言を言はれたさうな。犬嫌の父は、泊めたその夜を啼明されると、うんざりしてしまつて、翌日は是非逐出すと言出したから、私は小狗を抱いて逃廻つて、どうしても放さなかつた。父は困つた顔をしてゐたが、しかしそれも一時の事で、そのうちに小狗も獨寢に慣れて、夜も啼かなくなる、逐出す筈のものに何時しかポチといふ名まで附いて、姿が見えぬと、父までが一緒に捜すやうになつてしまつた。で、どうせそれは蜘蛛の巣だらけではあつたらうけれど、兎も角も雨露を凌ぐに足りる縁の下の菰の上で、旨くはなくとも朝夕二度の汗飯に事缺かず、まづ無事にのんびりと育つたのであつた。(平凡)

三 競 漕

久米 正雄

久米正雄
文學者。東京
帝國大學文科
大學出身。
美しく晴れた
日

競漕の日は來た。

空は朝から美しく晴れわたつた。学校の小使が朝早くやつて來て、合宿所の前に樺色の大きな旗を立てた。それがひどく晴れがましく見えた。午後になると、晴れたまゝに風が吹いて來て、應援船の旗をはたくと鳴らした。コースにはかなり荒い波が立つた。併し愈、競漕が始らうといふ頃になつたら、珍しい夕風が來た。

選手は皆長命寺の中の櫻餅屋の座敷で、樺色のユニフォームを着た。それが久野には何だか身がしまつたやうに感

コース
水路。
Course

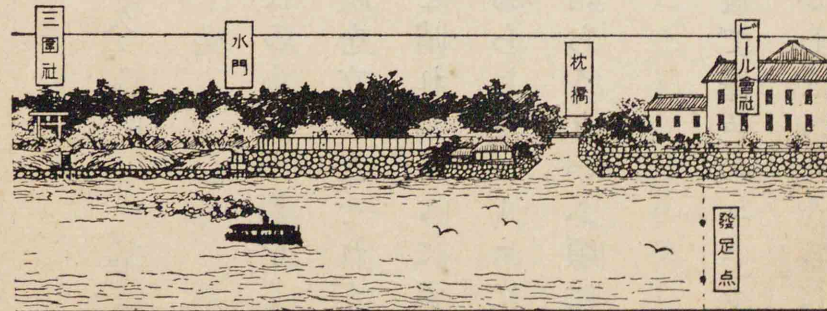
「珍しい夕風」
長命寺
東京市本所區
向島須崎町に
ある天台宗の
寺。

ユニフォーム
Uniform
運動服。

スプラッシュ
Splash
オールが
利かない
で水烟を
あげるこ
と。
一寸した陰影

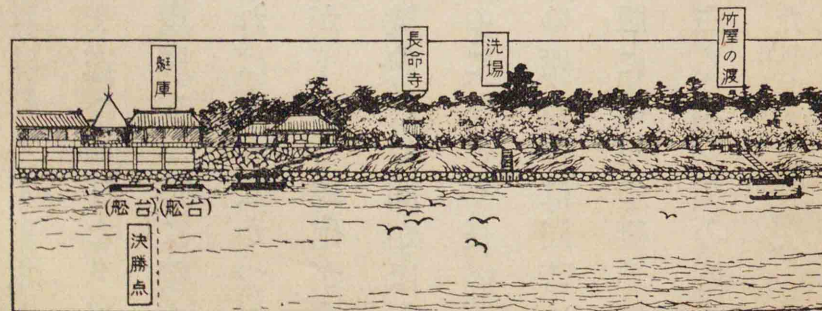
ぜられた。四時十五分前にはそこを出た。土手では観衆が一種の尊敬と好奇の念を持つて、此の樺色の衣服を着た選手達に道をあけた。

味方の短艇がまづ拍手に送られて臺船を離れた。窪田等はいつもより緩やかな調子で漕出した。そして三十本ほど試漕をした。その時三番の水原が、どうした加減か大きなスプラッシュを一つした。皆の顔に一寸した陰影があらはれた。



競漕路

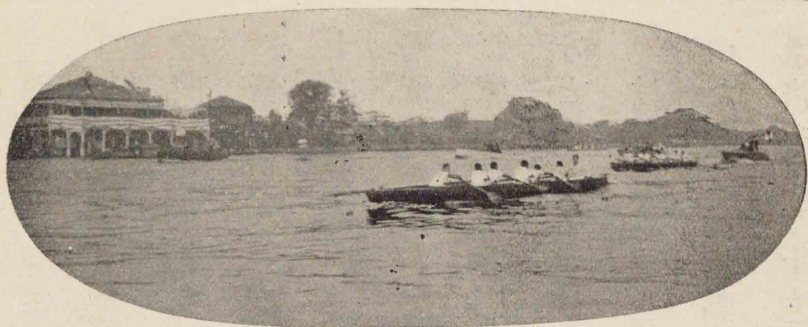
「競漕になつてからしないやうに、今の中さんざやつとくさ。」と、久野は咄嗟の間に悲觀してゐる水原を元氣づけた。皆はもう一度やり直し。の氣味で二十本ほど漕いで、審判艇の差出す綱に繋留した。續いて紫の敵艇も繋がれた。艇庫と土手と應援船とから「樺あ」「紫い」などといふ聲が錯綜して起つた。審判艇は二つの艇を曳いて發足點へ向かつた。艇は發足點の赤い浮標に着いた。水路を見渡すと、風は全く凩いでゐる。



見取圖

オール
櫂

白く光る水路



競

漕

のではなかつた。それは絶えず東北から吹いて来て、艇首を左へ曲げた。久野はそれを直す爲に、幾度も二番に軽く櫂すゐを入れさせなければならなかつた。其の中用意の命が下つた。號砲が鳴りわたつた。用意と號砲との間がほんの一瞬間であつたのに、ひどく長いやうに思はれた。二つの艇の櫂は同時に水に入つた。久野の眼には、敵の艇と自分の艇との前方に白く光つてゐる水路の外、何もなかつた。

シート
座席

久野の艇はどうも滑り出しがよくなかつた。こいつはいけない。皆慌てたな。」と、整調窪田と久野は同時に思つた。敵艇を見ると、確かに一二シートはこつちより出てゐるらしい。「ゆつくり。」と窪田が叫んだ。久野は更に大きな聲で、もう一度其の言葉を全艇に傳へた。皆調子がやつと合ひだした。此の時、競漕中敵の艇を彌次るので有名であつた紫の舵手が、敵艇を抜くこと約半艇身。」と叫んだ。久野は忽ち其の後を受けて、「嘘だぞ。」と怒鳴つた。今まで黙つてゐた久野は、一度その言葉云つてしまふと、急に口の緊りが解けたやうな氣がして、恐ろしく雄辯になつた。其の中に紫の三番が大きなスプラッシュをした。水烟が鮮かにはつと騰つた。久野は機を得

たと言はぬばかりに、「やつたぞ、あんな大きなスプラッシュを。」と叫んだ。それを見た者、見ぬ者も、皆其の言葉に元氣づいた。敵の艇は久野に彌次られて沈黙してしまつた。やつと二つの艇は並んだ。そして水門前で、味方は約半艇身先んじた。紫の舵手はそれでも、「向はもうへたばつたぞ。」などと云つた。久野も、なあと、こつちが出てゐるぞ。」と應酬した。併し心持には、ちつともそんな言葉戦ひをしさうな餘裕がなかつた。

水門まで來かゝると、久野は「さあ水門だ。」と敵に先んじて叫んだ。いかなる舵手でも云ふにきまつてゐる場所の指示を、敵艇の機先を制して云ふのも一つの戦術であつた。早く云つた方が、晩く云つた艇より先に其の場所に届いた譯だからである。後れ馳せに敵は水門で特別な力漕を十本した。それでまた艇は並んでしまつた。後から追附かれると、何だかずつと追抜かれたやうな氣がするのである。味方の艇は何だかいつもより船脚が遅いやうであつた。でも、暫くすると、味方の艇が又じり〜と抜きだした。久野は、「此の調子で。」と叫んだ。敵は沈黙してゐた。そして渡場での力漕十本は、もう此方に對して効力がなかつた。窪田は半眼で其の力漕を見やりながら、やつと安心してピッチをあげだした。

洗場では半艇身以上先んじてゐた。併し此處での半艇身ばかりの差では、敵のラストヘビーが利けば、何の役にも立たない。久野は「あと一分だ。もう死んでもいゝぞ。」などと激励

ピッチ

調子。

pitch

ラストヘビー

最後の力漕。

Last Heavy

「あと一分」

した。此の「あと一分」といふ練習中に用ひなれた言葉が、何よりも選手を元氣づけた。一分間なら、いくらへたばつても漕げる筈なのである。

皆は疲れて來た。すると、不思議に艇がよく出だした。味方の艇は疲れて來ると、各個人の癖がとれて、全體としての調子が揃ふのである。協力は此の時始めて平均した。そして整調の權につれて、各は機械的に身體を前後に動かした。

敵のラストも實によく出た。併しこれを見て氣遣つてゐる間に、味方の方のヘビーも非常によく利いた。多年の老練で、整調のピッチがぐんぐん上つた。もう十本。決勝點に入るまでは、随分長く感ぜられた。久野はひよつとして、もうウイ

ウイニング
決勝點

ニングへ入つても、審判の鐵砲が發火しないのぢやないかと思つた。其の瞬間に號砲は響いた。漕ぎやめて、艇内にとつと身を伏せた。久野は此の時始めて嵐のやうな喝采が水上に鳴響いてゐるのを聞いた。これは決勝點に近づく時から盛んに鳴つてゐたのであるが、久野の耳には入らなかつたのである。

「どつちが勝つたんだ。」と、二番が苦しい息の中から情無い聲を出した。

「安心し給へ、僕等だ。」と久野は答へた。

そして審判所には樺色の旗が掲げられた。

觀衆の喝采は續いてゐる。(學生時代)

「安心し給へ僕等だ」

「どつちが勝つたんだ」

五十嵐力
文學博士。早
稲田大學教
授。國文學者。
初夏の頃

四 苺

五十嵐 力

初夏と梅雨を思ふと、直ぐに私の心を躍らせるものがあります。

苺です。私は苺なしに春から夏に越えることが出来ません。

水菓子の類の中で、私に取つて苺ほどおいしいものはありません。で、其の培養には一番に骨を折ります。他の草木に一度か二度やる寒肥を、苺に三度からやるのもその爲です。五月から六月にわたる苺の盛の二十日間許は、私に取つて實に舌の御正月です。同時に腹の御正月でもあり、目の御

舌の御正月
腹の御正月
目の御正月

頭の御正月

正月でもあり、頭の御正月でもありません。朝早く起きて雨戸を一枚繰る、寝巻のまゝ直ぐに跳びだして、跣足で朝露を踏んで、苺畠に行く時の心持。莖の長い濃緑の厚い葉が、銀のやうな朝露に光つて、其の間に眞紅の珠が見え隠れに連つて居るのを見た時の心持。脚は膝まで、手は二の腕まで、葉末の露にひたして、圓々した紅玉を草の枝から目籠に移す時の心持。一つの房に眞紅のから桃色、桃色のから白と、尖頭になるほど段々小さくなつて、行儀よく鈴生りになつて居る其の中から、小さい若いのを勞りつゝ、本生りの大きい眞赤なのを摘取る時の心持。摘みをはつて、目籠に山になつた紅玉を携へ、朝日に照らされて、足をすゝいで家に入る時の心持。

光る朝露
眞紅の珠

綺麗に洗つて、大きな古伊萬里の皿に盛つて、食卓に安置して、家内揃つて舌鼓を打つ時の心持。あゝ何といひませう。

苺は澤山取れます

が、一々砂糖をつけて食べることは、とても經濟上私共の能くする所でありません。それ故、大抵は鹽をぶつけて食べます。それでも非常に結構です。一週に一度位は破格に砂糖を添へます。一倍うまく感じます。稀には砂糖の外に牛乳を添へます。



如 苺

「咽喉から佛」

實に咽喉から佛になるやうに感じます。かういふ場合に子供等は「頭が策になりさうだ」といつて喜びます。何の事だか知りませんが、私の郷里では非常にうまい物を食べた時に「頭が策になる」といふのです。

餘つた時にはジャムを拵へます。ゼリーも拵へます。又苺酒なども造ります。そして或はパンにつけて賞味し、或は夏時分の飲料に致します。

私の苺畠は八疊間の三四倍もありませう。それで一春に、水菓子屋から買へば、かれこれ十圓ぐらゐに値する紅玉が取れます。其の外に一昨年などは、春は其の畦の間に、甲州馬鈴薯を作つて二斗以上も取りました。秋は練馬をつくつて

練馬
練馬大根。

坪内先生
坪内逍遙。作
者の恩師。
「片手に軽々と
下げて来た」
苗

相撲取の腕のやうなのを百本以上も取りました。春の紅玉は其の副産物として、夏の茶褐玉と秋の雪白根とを與へて呉れるのです。

うまい話ばかりして、つい其の出處を言ふのを忘れて居ましたが、私の苺は六年前に大久保の坪内先生から戴いて、片手に軽々と提げて来た、その苗が蕃殖して、今日の隆運を來したのであります。(半農生活)

ほろ／＼と手をこぼれたるいちごかな 子規

薔薇散るやいちご食ひたき八つさがり

同

トロッコ

Truck
運搬車。

芥川龍之介
文學者。東京
帝國大學文科
大學出身。
小田原
神奈川縣足柄
下郡。
熱海
静岡縣田方
郡。

走るトロッコ

五 トロッコ

芥川龍之介

小田原熱海間に、輕便鐵道敷設の工事が始つたのは、良平の八つの年だつた。良平は毎日村外れへ、その工事を見物に行つた。工事を——といった所が、唯トロッコで土を運搬する、——それが面白さに見に行つたのである。

トロッコの上には土工が二人、土を積んだ後に佇んでゐる。トロッコは山を下るのだから、人手を借りずに走つて來る。煽るやうに車臺が動いたり、土工の半纏の裾がひらついたり、細い線路がしなつたり、——良平はそんな景色を眺めながら、土工になりたいと思ふ事がある。せめては一度でも、

土工と一緒にトロッコに乗りたいたいと思ふ事もある。トロッコは村外れの平地へ來ると、自然と其處に止つてしまふ。と同時に、土工たちは身輕にトロッコを跳び降りるが早い。その線路の終點へ車の土をぶちまける。それから今度はトロッコを押し、もと來た山の方へ登り始める。

良平はその時乗れないまでも、押す事さへ出來たらと思ふのである。

二月初旬、良平は二つ下の弟や、弟と同じ年の隣の子供と、トロッコの置いてある村外れへ行つた。トロッコは泥だらけになつた儘、薄明るい中に並んでゐる。が、その外は何處を見ても、土工たちの姿は見えなかつた。三人は恐るゝ一

ごろりと動いた音

番端にあるトロッコを押した。トロッコは三人の力が揃ふと、突然ごろりと車輪をまはした。良平はこの音にひやりとした。しかし二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかつた。ごろり、ごろり、——トロッコはさういふ音と共に、三人の手に押されながら、そろゝ線路を登つて行つた。

その中にかれこれ十間程來ると、線路の勾配が急になり出した。トロッコも三人の力では、いくら押しても動かなくなつた。どうかすれば、車と一緒に押戻されさうにもなる事がある。良平はもう好いと思つたから、年下の二人に合圖をした。

「さあ、乗らう。」

兩側に分れる
やうに見える
風景

彼等は一度に手をはなすと、トロッコの上へ跳び乗つた。トロッコは最初徐かに、それから見る／＼勢よく、一息に線路を下り出した。その途端突當りの風景は、忽ち兩側に分れるやうに、ずん／＼目の前へ展開して来る。顔にあたる薄暮の風、足の下に躍るトロッコの動搖、良平は殆ど有頂天になつた。

しかしトロッコは、二三分の後、もと／＼の終點に止つてゐた。

「さあ、もう一度押すぢやあ。」

良平は年下の二人と一緒に、又トロッコを押上げにかゝつた。が、まだ車輪も動かない中に、突然彼等の後には、誰かの

突然……足音

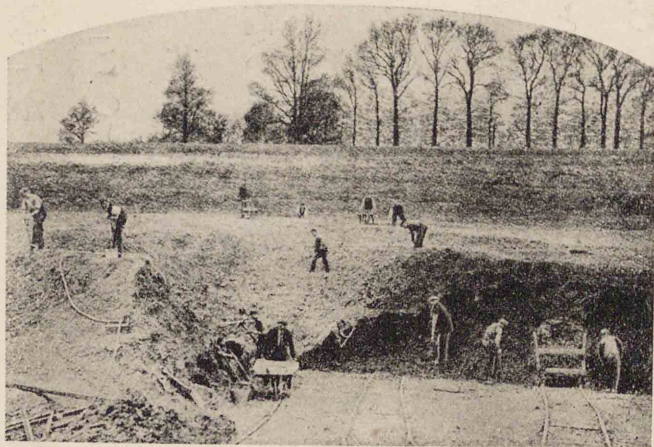
足音が聞え出した。のみならず、それは聞え出したと思ふと、急にかういふ怒鳴聲に變つた。

「この野郎！誰に斷つてトロに觸つた。」

其處には古い印半纏に、季節外れの麥稈帽を被つた、背の高い土工が佇んでゐる。

その姿が目にはひつた時、良平は年下の二人と一緒に、もう五六間も逃出してゐた。——それぎり良平は使の歸に、人氣のない工事場のトロッコを見ても、二度と乗つて見ようと思つた事はない。唯その時の土工の姿は、今でも良平の頭の何處かにはつきりした記憶を残してゐる。薄明りの中に、灰めいた、小さい黄色い麥稈帽——しかしその記憶さへも

年毎に色彩は薄れるらしい。



親み易さうな
土工

だつた。良平は彼等を見た時から、何だか親み易いやうな氣

がした。——この人たちならば叱らない。——彼はさう思ひながら、トロッコの側へ駈けて行つた。

「をぢさん、押してやらうか？」

その中の一人、——縞のシャツを着てゐる男は、俯向うつむきにトロッコを押した儘、思つた通り快い返事をした。

「お、押してくれよう。」

良平は二人の間にはひると、力一杯押し始めた。

「われはなか／＼力があるな。」

他の一人、——耳に巻煙草を挟んだ男も、かう良平を褒めてくれた。

その中に線路の勾配は、だん／＼樂になり始めた。もう押

さなくともよい。――良平は今にも云はれるかと内心気がかりでならなかつたが、若い二人の土工は、前よりも腰を起したぎり、黙々と車を押續けてゐた。良平はとう／＼こらへ切れずに、怯づく／＼こんなことを尋ねて見た。

「何時までも押してゐていゝ？」

「いゝとも。」

二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ。」と思つた。

五六町餘おし續けたら、線路はもう一度急勾配になつた。其處には兩側の蜜柑畑に、黄色い實がいくつも日を受けてゐる。

「登り路の方がいゝ、何時までも押させてくれるから。――良平はそんな事を考へながら、全身でトロッコを押すやうにした。

蜜柑畑を登りつめると、急に線路は下りになつた。縞のシヤツを着てゐる男は、良平に「やい、乗れ。」と云つた。良平は直ぐに跳び乗つた。トロッコは三人が乗移ると同時に、蜜柑畑の匂を煽りながら、ひた／＼に線路を走り出した。押すよりも乗る方がずつといゝ。――良平は羽織に風を孕ませながら、當前の事を考へた。往きに押す處が多ければ、返りに又乗る處が多い。――さうも考へたりした。

竹藪のある處へ來ると、トロッコは靜かに走るのを止め

「やい、乗れ」

「蜜柑畑の匂」

「竹藪」

た。三人は又前のやうに、重いトロッコを押始めた。竹藪は何時か雑木林になつた。爪先上りの處々には、赤錆の線路も見えない程、落葉のたまつてゐる場處もあつた。その路をやつと登り切つたら、今度は高い崖の向に、廣々と薄ら寒い海が開けた。と同時に、良平の頭には餘り遠く來すぎた事が急にはつきりと感ぜられた。

三人は又トロッコに乗つた。車は海を右にしながら、雑木の枝の下を走つて行つた。しかし良平はさつきのやうに面白い氣持にはなれなかつた。もう歸つてくれ、ばい、――彼はさうも念じて見たが、行くところまで行きつかなければ、トロッコも彼等も歸れない事は、勿論彼にもわかり切つ

てゐた。

その次に車の止つたのは、切崩された山を背負つてゐる藁屋根の茶店の前だつた。二人の土工はその店へはひると、乳呑兒をおぶつた上さんを話相手に、悠々と茶などを飲始めた。良平は一人いらくしなから、トロッコのまはりをまはつて見た。トロッコには巖乗な車臺の板に、跳ねかへつた泥が乾いてゐた。

暫くの後、茶店を出て來しなに、巻煙草を耳に挟んだ男は、(その時はもう挟んでゐなかつたが)トロッコの側にある良平に、新聞紙に包んだ駄菓子をくれた。良平は冷淡に「有りがたう」と云つたが、直ぐに冷淡にしては相手にすまないと思

ひ直した。彼はその冷淡さを取繕ふやうに菓子の一つを口へ入れた。菓子には新聞紙にあつたらしい石油の匂がしみついてゐた。

三人はトロッコを押しながら緩い傾斜を登つて行つた。良平は車に手をかけてゐても、心は外の事を考へてゐた。

その坂を向へ下り切ると、又同じやうな茶店があつた。土工たちがその中へはひつた後、良平はトロッコに腰をかけた。梅に、西日の光が消えかゝつてゐる。もう日が暮れる。——彼はさう考へると、ぼんやり腰かけてもゐられなかつた。トロッコの車輪を蹴て見たり、一人では動かないのを承知し

消えかゝる西
日の光

ながら、うん／＼それを押して見たり、——そんな事に氣持を紛らせてゐた。

ところが、土工たちは出て來ると、車の上の枕木に手をかけながら、無造作に彼にかう云つた。

「われはもう歸んな。おれたちは今日は向泊だから。」

「あんまり歸が遅くなると、われの家でも心配するぞら。」

良平は一瞬間呆氣にとられた。もう彼此暗くなる事、去年の暮、母と岩村まで來たが、今日の途はその三四倍ある事、それを今からたつた一人歩いて歸らなければならぬ事、——さういふ事が一時にわかつたのである。良平は殆ど泣きさうになつた。が、泣いても仕方がないと思つた。泣いてゐる

岩村
神奈川県足柄
下郡。
遠い歸路

場合ではないとも思つた。彼は若い二人の土工に、取つて附けたやうに御辭儀をすると、どん／＼線路傳ひに走り出した。

良平は少時無我夢中に線路の側を走り續けた。その中に懷の菓子包が邪魔になる事に氣がついたから、それを路端へ抛り出すついでに、板草履も其處へ脱捨ててしまつた。すると薄い足袋の裏へぢかに小石が喰込んだが、足だけは遙かに軽くなつた。彼は左に海を感じながら、急な坂路を駆け登つた。時々涙がこみ上げて來ると、自然に顔が歪んで來る。——それは無理に我慢しても、鼻だけは絶えずくう／＼鳴つた。

「海を感じながら……」

夕焼の消行く
山の空
日金山
箱根山脈の一
峯。

竹藪の側を駈抜けると、夕焼のした日金山（がねやま）の空も、もう火照が消えかゝつてゐた。良平は愈氣が氣でなかつた。往きと返りと變るせぬか、景色の違ふのも不安だつた。すると今度は着物までも汗の濡通つたのが氣になつたから、やはり必死に駈續けたなり、羽織を路端へ脱いで捨てた。

蜜柑畑に來る頃には、あたりは暗くなる一方だつた。命さへ助れば、——良平はさう思ひながら、這つても躓いても走つて行つた。

やつと遠い夕闇の中に、村外れの工事場が見えた時、良平は一思ひに泣きたくなつた。しかしその時もべそはかいたが、とう／＼泣かずに駈續けた。

「村外れの工事場」

彼の村へはひつて見ると、もう兩側の家々には電燈の光がさし合つてゐた。良平はその電燈の光に頭から汗の湯氣の立つのが、彼自身にもはつきりわかつた。井戸端に水を汲んでゐる女衆や、畑から歸つて来る男衆は、良平が喘ぎ々走るのを見ては、「おいどうしたね？」などと聲をかけたが、彼は無言の儘、雜貨店だの床屋だの、明るい家の前を走り過ぎた。

彼の家の門口へ駈込んだ時、良平はとうとう大聲にわつと泣出さずにはゐられなかつた。その泣聲は彼のまはりへ、一時に父や母を集らせた。殊に母は何とか云ひながら、良平の體を抱へるやうにしたが、良平は手足を藻掻きながら、啜

り上げ々泣續けた。その聲が餘り激しかつたせゐるか、近所の女衆も三四人、薄暗い門口へ集つて來た。父母は勿論、その人たちは口々に彼の泣く譯を尋ねた。しかし彼は何と云はれても泣立てるより外に仕方がなかつた。あの遠い路を駈通して來た今までの心細さを振返ると、いくら大聲に泣續けても足りない氣持に迫られた。

彼はどうかすると、今でも何の理由もなしに、その時の彼を思ひ出す事がある。全然何の理由もないのに。――塵勞に疲れた彼の前には、今でもやはりその時のやうに、薄暗い藪や坂のある路が、ほそくと一すぢ斷續してゐる。(春服)

六 鮎

鮎は小さい時は海の中で育ち、春の彼岸頃から川へ上り始めて、夏の初頃には、一日増しに大きくなり、身體も肥えつつ川上へ上つて行き、眞夏にぐつと上流へ行く。そして少し寒くなるまで、砂や石の間で餌を探しては食べて居る。そのころ、雨が降りつき、大水でもあると、下流へ流されて行くが、秋口には卵を産むため海へ下るのである。上流の方に澤山鮎が居れば、秋になつて川下で澤山に獲れる。夏に水が涸れて上流へ上れない時は、秋になつても鮎の獲れる量は少い。



鮎の壽命は先づ一年を普通とし、稀には二年生きるもの

もある。鮎の種類は一種しかないが、池か湖水かに棲んで、海へ一度も下ることのないものは、形が小さい。琵琶湖の小鮎はその一例である。鹿兒島縣の池田湖にも同様な小鮎が居る。これ等は大きな川で育たないために、肥えることが出来ず、せいと二三寸位にしかならない。之に反して、長い川を上

流まで上る鮎には、一尺程になるものがある。概して長い川

に居るものほど味もよい。

鮎はすべて暑さ寒さの極端な所には居ない。鮎の好むのは、暑い季節に冷えた水の中を泳ぐことである。そして暑い地方へ行くに随つて、卵を産む時期が遅れる。臺灣邊では十二月から一月頃に卵を産み、宮崎縣邊では十月か十一月頃、關東地方では九月半ば頃である。同様に川へ上り始める時期も、九州邊では二月頃であるが、關東地方は三月末の頃である。

此の魚に就いて興味の深いことは、これが日本帝國の領域内では殆ど何處にでも居るが、他の國の領地内に於ては全く見ることの出来ないことである。即ち日本帝國と鮎と

は非常に縁が深く、例へば日本領と呼ばれるところには、朝鮮にも琉球にも臺灣にも居るが、尙日本と關係の深い滿洲邊に於ても、少しばかりではあるが、之を見るのである。蓋し我が國の水質や氣候等が、鮎の分布に適して居るからであらう。

鮎の特徴は、所謂水あかといつて、砂利や岩の表面に生えてゐる硅藻を、口で擦り落して食ふ事である。それ故漁夫は鮎の齒型があると云つて、鮎が水あかを取つた跡を見ては、そこに棲んでゐる鮎の大きさを判断したりする。かく食物を擦り落して食ふのは鮎だけであつて、そのため鮎は口の具合が他の魚と違つて出來て居る。鮎のうるかと稱して食

岩上鎌吉
東京帝國大學
教授。理學博
士。

用に供される鮎のはらわたに、砂の交つてゐることなども、
そんな關係からである。此の魚は大きくなると、最早動物質
のものは一切食べず、植物質の物ばかりを食べるが、此の鮎
は鮭・鱒・公魚・白魚などの鮎に近似した魚類と、鮎との非常に
違ふ所である。随つて鮎はいくら繁殖しても、生存上他の魚
類と衝突する事が無い譯である。(岸上鎌吉の文による)

とび鮎のそこに雲ゆく流かな

鬼貫

一むれの鮎眼を過ぎぬ水の色

子規

七 詩二篇

島木 赤彦

石工

島木赤彦
本名は久保田
俊彦。歌人。
大正十五年三
月歿、年五十
一。

「かつちんく」石を鑿る、

眼鏡をかけて石をきる、

眼もとを据ゑて石をきる、

汗を流して石をきる、

かつちんく石をきる。

石より豎い鑿の尖

鍬の尖から生
れる光

一尺掘りや、
一尺明るい。
二尺掘りや、
二尺明るい。
不思議なことぢや。
掘つた明りは
何所から生れる。
わたしの鍬の
尖から生れる。
不思議なことぢや。

鑿より強い腕さきで、
かつちんくく石をきる。
かつちんくく日が暮れて、
火花が見える鑿の尖、
鑿の手もとは暗くても、
かつちんくく石をきる。

土掘れ

土掘れ、

土掘れ。

汗出して掘れ、

一心になつて掘れ。(赤彦童謡集)

石工の鑿ひやしたる清水かな

燕村

高濱虚子
名は清。俳人。

八 静 寂

高 濱 虚 子

寢床を出て、楊枝をつかひながら、湖水の見える部屋に往つて見る。朝日が部屋一面にはひつて居る。湖水と思はれる邊は雲ばかりで、何も見えぬ。富士の頂上から雲海を見下したのと似た景色だ。部屋の下は東谷になつて居るので、我が眼より、稍高く、稍低く、無数の杉の梢が、鉾のやうに突つ立つてゐる。左手には、北谷の向に當る峯が、鋸の齒のやうな杉を背にならべて、湖の方に流れて居る。空氣が清い上にも清いので、近景の杉の梢も、遠景の杉の森も、新鮮な色をしてゐる。さうして、その間を、薄い霞が流れて居る。非常に静かだ。自分

霞の中の杉の梢

「自分の呼吸」

小鳥の聲を聴
け



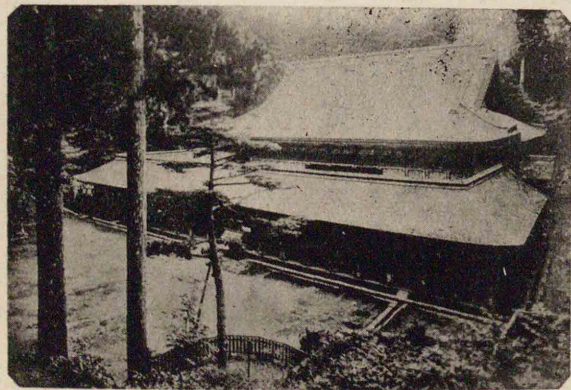
比叡山頂四明嶽より琵琶湖を望む

の呼吸の外、浮世の物音は何も聞えぬ。

たゞ此の天地をわが物顔に啼
轉つてゐるのは、小鳥の聲だ。何と
いふ可愛い聲であらう。名がわか
らぬのが残念だ。その杉の梢で、
一羽啼いてゐる。彼方の杉の梢で、
他の一羽が答へてゐる。また遙か
向の谷深く、他の一羽が應じてゐ
る。よく耳を澄ますと、なほ二三羽
の聲がどこかで聞えるやうだ。ま
た其の小鳥の合奏を破るやうに、他の聲の小鳥が、突然その

縦糸の小鳥
横糸の小鳥

間に高音を張る。前の小鳥ほど優しい聲ではないが、又凜々
しい所があつて、其の音の空山に響く趣が何とも云へぬ。こ
れも名のわからぬのが残念だ。そ
れも一羽ではない、三羽、四羽と聞
くうちに、だんく殖えてくる。前
の小鳥が縦糸なら、此の小鳥は横
糸のやうに、互に錯綜して、能く調
和を保つところが面白い。突然け
んくくとけたましい音が谷を
横ぎる。此方の谷にも響けば、彼方
の峯にも響く。昨日聞いた雉子の聲よりも稍急調だ。多分山



比叡山延暦寺根本中堂

絹を裂く聲

鳥でもあらうか。前の二つの小鳥で織成した美しい絹を、
たゞ一聲で引裂いたかと疑はれる。

「絹におかれた
緋」

暫くして、その聲は谷の底の底峯の奥の奥に浸みこんで
しまつて、そのあとは元のとほり静かになる。眞先にその静
けさを破るものは鶯の聲だ。絹におかれた緋のやうに美し
い。一つの緋が置かれると、又縦糸を織つて、前の小鳥が啼く。
又横糸を織つて、次の小鳥が啼く。緋が啼く、縦糸が啼く、横糸
が啼く。此の美しい絹を、又山鳥の聲が破るのかと思ひなが
ら、待設けて居ると、不思議な聲が別に起る。それは麓の里の
池で聴く蛙の聲に能く似てゐて、谷の神社の鰐口が口をあ
けて呟くのかとも疑はれる。他の鳥の聲々が皆高調で、晴々

不平らしい聲

深く見えて來
る谷

とした中に、ひとり低調で、不平らしい音を出すのが面白い。
友は「啄木鳥だらう。」といひ、他の者は「山鳩だらう。」と云つた。
琵琶湖の上には、まだ漠々とした白雲が漂うてゐる。杉の
梢を流れる霞は、少しづつ薄らいで來て、だんぐと谷が深
く見えてくる。(叡山詣)

○

島 木 赤 彦

しら雲の下りゐしづめる谿あひの向にさびしかつこう
の聲

山にして遠すそ原に鳴く鳥の聲のきこゆるこのあした
かも

長塚節
文學者、大正
四年歿、年三
十七。
空からさうし
て土から動く
春

九 蛙

長 塚 節

春は空から、さうして土から微かに動く。毎日のやうに、西から埃を捲いて来る疾風が、どうかすると、はたと止つて、空際にはふわ〜とした綿のやうな白い雲が、ほつかりと暖い日光を浴びようとして、僅かに立騰つたといふやうに、動きもしないで、ちつととして居ることがある。水に近い濕つた土が、暖い日光を思ふ存分吸うて、其の勢附いた土の微かな刺戟を根に感ぜしめるので、田圃の榛の木の地味な蕾は、目にたゝぬ間に少しづつ伸びて、ひら〜と動き易くなる。其の刺戟から、蛙はまだ蟄居の状態に在りながら、稀にはそつ

「暖い日光」

蟄居の蛙

ちでも、こつちでも、く〜と鳴出すことがある。

空から射す日の光は、そろ〜と熱度を増して、土はそれを幾らでも吸うて止まぬ。土は凡てを段々と刺戟して、堀の邊には、蘆や、とだ芝や、其の他の草が空と相映じて、すつきりと其の首をもたげる。軟かさに満たされた空気を、更に鈍くするやうに、榛の木の花はひら〜と動きながら、煤のやうな花粉を撒散らして居る。蛙は假死の状態から離れて、軟かな草の上に手を突いては、驚いたやうな様子をして、空を仰いで見る。さうして彼等は慌てたやうに聲を放つて、其の長い睡眠から復活したことを、空に向かつて告げる。遠く聴く時は、彼等の騒がしい聲は、只空にのみ響いて快げである。

軟かい空気

眠覺めた蛙

「空に向かつて告げる」

彼等は更に春の到つたことを、地上の一切の生物に向かつて告げる。草や木が心づいて其の活力を存分に發揮するのを見ないうちは、鳴くことを止めまいと努める。田圃の榛の木は疾くに花を捨てて、自分が先に嫩葉の姿になつて見せる。黄色味を含んだ嫩葉が、爽かて且朗かな朝日を浴びて、快い光を保ちながら、蒼い空の下に、まだためらつて居る周囲の林を見る、岬のやうな形に偃つて居



る水田を抱へて、周囲の林は漸く其の本性のまに、勝手に白つぼいのや、赤つぼいのや、黄色つぼいのや、種々に茂つて、それが氣が附いた時に、急いで一つの深い緑に成るのである。雑木林の其處ら此處らに散在して居る開墾地の麥も、すつと首を出して、蠶豆の花も可憐な黒い瞳を聚めて、羞づかしさうに葉の間からこつそりと四方を覗く。雑木林の間には、又芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ。其の麥や芒の下に居を求める雲雀が、時々空を占めて、春が深けたと喚びかける。さうすると、其の同族の聲のみが空間を支配して居るべき筈だと思つて居る蛙は、雲雀の轉る聲を壓し去らうとして、互の身體を飛越え、鳴立てるので、小勢な雲雀

はすつとおりて、麥や芒の根に潜んでしまふ。さうして蛙の鳴かぬ日中にのみ之を仰げば、眩さに堪へぬやうに、其の身を遙かに煌めく日の光の中に没して、其の小さな喉の拗切れるまでは、劇しく鳴かうとするのである。蛙はいよゝゝますゝゝ鳴き矜つて、櫛の木やうな大きな常緑樹の古葉をも、一時にからりと落させねば止まないとする。

此の時凡ての樹木や、それから冬季の間はぐつたりと地に附いて居た凡ての雑草が、瓜立ちして只空へゝゝと暖かな光を求めて止まぬ。土がそれをぢつと曳きとめて放さない。それで一切の草木は土と直角の度を保つて居る。冬季の間は土と平行することを好んで居た人も、鐵の針が磁石に

吸はれる如く、土に直立して、各自に手に農具を執る。紺の股引を藁で括つて、皆田を耕し始める。水が欲しいと人が思ふ時、蛙は一齊に、裂けるかと思ふ程、喉の袋を膨脹させて、身を撼かしながら、殊更に鳴立てる。白い絛絲しほとのやうな雨は、水が田に満ちるまでは注ぎに注ぐ。鳴くべき時に鳴くためにのみ生れて來た蛙は、荊株を引つ返しゝ働いて居る人々の周圍から、足下から逼つて、敏捷に其の手を働かせゝと促して止まぬ。蛙がびつたりと聲を呑む時には、日中の暖かさに人もぐつたりとなつて、田圃の短い草にごろりと横になる。

更に蛙は、ひつそりと靜かな夜になると、如何に自分の聲

が遠く且遙かに響くかを矜るものの如く、力を極めて鳴く。雨戸を閉ぢる時、蛙の聲は滅切り遠く隔つて、それがぐつたりと疲れた耳を撲つて、百姓の凡てを安らかな眠に誘ふのである。熟睡することによつて、百姓は皆短い時間に肉體の消耗を恢復する。

彼等が雨戸の隙間から射す夜明の白い光に驚いて、蒲團を蹴つて外に出ると、今更のやうに耳に迫る蛙の聲に其の覺醒を促されて、井戸端の冷たい水に、全く朝の元氣を喚びかへすのである。草木は遠く遙かに響けと鳴く其の聲に揺られつゝ、夜の中に成長する。櫟や檜や其の他の雜木は、蛙が鳴けば鳴く程、さうしてそれが鳴止む季節までは、幾らでも

繁茂することを繼續しようとする。其處には、毛蟲や其の他のあさましい損害が、或は有るにしても、しとくと屢、梢を打つ雨が空の蒼さを移したかと思ふやうに、力強い深い緑が地上を掩うて、爽かな涼しい蔭を作るのである。(土)

○

長 塚 節

榛ハシの木の花さきしかば土ごもり蛙は啼くもあたゝかき

日は

すがくし檜がわか葉に天響あまひびき聲ひゞかせて鳴く蛙か

も

藤森成吉
文學者。東京
帝國大學文科
大學出身。
だるさうに泳
ぐ金魚

一〇 大地の匂(友へ)

藤森 成吉

郷里もなか／＼暑い。日中に、金魚が大きな尾をゆら／＼と揺りながら、肥えた腹を、さもだるさうに横に振つて、水の中をよろめいてゐる所などを見ると、たまらなく暑い。併し、夕ぐれになると、さすがに涼しい。

廣い田一面の緑がたそがれて行くと、百姓の家の赤い火がちら／＼とその上にともつて、涼しい風がまだ脊の低い稲の頭を軽く揺り始める。

何か黒いものが畦のうへに佇んで、時々踊るやうに動くものがある。なんだらうと思つて近寄つて見たら、黒犬が、畦

躍るやうな影

に涼んでゐた蝦蟆を追つかけて、田の中へ跳び込んだあとを、驚きながら見てゐるのだつた。

田舎の町へ歸つて、再び粗い、併しあまい高原の空氣を吸つてゐる。

家の裏へ出ると、高粱のがつしりした葉がある。なめらかな芋の葉がある。擧め面したやうな胡瓜の葉がある。葱ののんきさうな葉がある。露がほろり／＼と、生命あるものやうに轉び落ちる。青い匂が一杯に満ちてゐる。

中でも僕の好きなのは南瓜だ。南瓜は「田園」の象徴だ。

太い莖は、半分木化して茶色になつてゐる。逞しい蔓の腕

「粗い、併しあ
まじ空氣」

「木化して……」

髓をめぐる水
の音

「我が親しい南
瓜」

はきりゝと支への木に捲きついてゐる。葉の軸は太い頸を
まつすぐに仰向け、その上に大きな葉が悠然と休んでゐる。
黄いろい花はほのかな光澤を含んで、淡い香を吐く。

もう葉蔭には露が乾いたが、耳を押しあてれば、その髓を
湧きめぐる水の音が聞えさうだ。かうして我が親しい南瓜
は、無言で次第に大きくなつてゆく。

「長い黄金の棒」

冷たい洗盤の水から、ふと顔をあげると、繁つた葡萄の葉
のうしろに、きら〜と一すぢの光が走つた。と、燦として長
い黄金の棒が輝く。僕はしばらくその光にくるめいた。

それは、今山を離れた太陽を受けて、葡萄の樹に掛渡した

「眩しさうな眼
つき」

乾物竿が、一度に照りはじめたのだ。その竿の上に、まだ粒の
こまかい葡萄の房が、下からの反射をうけて、透明な緑玉の
やうに澄渡つてゐる。黒い點が飛んだかと思ふと、雀の子が
一羽その房の上にとまつた。そして眩しさうな眼つきをし
て、ちよいと首をかしげた。胸毛が金色に光つてゐる。

田舎の朝の空氣は全くいゝ。その空氣の中で毎朝深呼吸
をすると、肺のどん底まで匂ふかと思ふ。

顫へる羽音

ぶん〜と顫へる羽の音がひゅ〜くので、見上げると、屋根
の明り取の硝子の裏に、黄いろい一匹の蜂がしきりに頭を
ぶつゝけて居る。

静かに空を映してゐる硝子

激しく羽を振るため、羽はまるで無数の薄い點が群り飛んでゐるやうに見える。そのほそい身體は張裂けるばかり緊張してゐる。そして、もう眼がくらんでしまつたやうに、無暗やたらに頭を硝子へぶつゝけて、その上の青い空へ飛出ようと、もがきあせつてゐる。併し冷たい硝子は、色も動かさずに、静かに大空の蒼を映して、蜂の前に立つてゐる。

蜂は、硝子の存在を認めずに、たゞ青い空の存在だけを知つて、それへ向かつて飛ぼうと努力してゐる。蜂は欺かれてゐる。いや、彼自ら欺いてゐるのだ。

「無知な努力——いつまで経つても無効だ。可憐な腹を立ててゐる蜂よ。(天地の匂)」

無知な努力——いつまで経つても無効だ。可憐な腹を立ててゐる蜂よ。(天地の匂)

鈴木三重吉

東京帝國大學
文科大學出
身。文學者。

一 小鳥の巢

鈴木三重吉

「來馴れた燕」

夕方門口に出て見ると、今年もいつの間にか屋根裏の巢に燕が來てゐた。いつあの屋根裏に附けた巢で、幾年來馴れた燕か。

毎年、裏の榎の枯葉がはら／＼と倉の屋根を越えて庭に散敷く頃になると、もう彼等はいつの間にか残らずゐなくなつて、寂しくかゝる巢に冬が來る。私は祖母の炬燵に寝せられる。門の小鳥は、ずつと南の方の遠い國へ、親子みんなで、いくつも海を渡つて歸つたのだと祖母がいふ。私はそれきりで、去つた燕を忘れてしまふ。

「祖母の炬燵」

その中に正月もすむ。狐につまゝれぬ呪に、白いげんげの花を一つ袂に入れて、舊城の原に土筆を摘んで暮して、四月も盡きる。祖母は毎年手すさびに、方膳の蓋ほどの藁わら畚ごごに數へるばかり蠶を飼ふ。祖母に言ひつけられて、その僅かの蠶のために、裏の無花果の木の下や、垣根の隅に自然に生えてゐる桑の若葉を摘みに行く。そのついでに、隠居所のはづれから、裏の濠を覗いて見ると、雨上りのあとに殖えた薄黒い水に、小さな青い藻が一面に出て漂ひ浮いてゐる。茨の花がところ／＼向の堤の青草の中に灰白く見える。さうした五月が來ると、忘れられてゐた屋根裏の小鳥が、いつしか去年の古巢に歸つて來るのである。

灰白の茨の花

去年の古巢

二羽の燕

翌日門口へ出て見ると、歸つて來た燕は、壊れかけてゐる去年の古巢の脇へ、もう一つ巢を附けようとして、頻りに忙しく働いてゐる。二羽が代る／＼飛出して、しばらく置いて、射るやうに歸つて來ては、絲にでもつかまり下つたやうな恰好をして、古巢のぢき側の椽たるきへ、何か口で一寸くつ附けると、また直ぐに追ひかけるやうに飛んで行く。ちつちと叫んで翔り出すと、もうどこへ反れたか影も見えない。

すると、もう一つが、ついと日の當るうちを斜に切つて歸り着いたと見ると、びたりと小屋根に泥土が垂落ちる。燕は少しづつ泥を銜へて來ては、それをくつ附けるのであつた。この次には先の分ぶんが歸るのだと待受けてゐると、なぜだか

足元をしやく
ふ如く……

前のに後れま
いとする如く
……

今度は少し間がある。と、一寸ほかの事を考へてゐるうちに、燕はふいと足元をしやくうて巢に飛附く。髪の毛のやうなものゝを銜へて來たやうである。それと入り代りに歸つた一羽は、前のに翔け後れまいとするやうに、直ぐまた急いで後から飛んで行く。

このやうにして二つの小鳥は、時日が切れでもするやうに、小休もせずにつせと忙しく巢を作る。

間を置いて再び出て見ると、もはや大分圓い壁が附きかけて來た。さうかと思ふと、その次に外からの歸に見れば、折角あれほど心配して少しづつ積足して行つたのが、いつの間にかげつそりと下側が崩れ落ちて、その泥が小屋根にび

雨の脚ほどの
往復

たりと固つてゐる。何だか自分の事のやうにじれつたい。燕も心には悔しがつてゐるのであらうけれど、彼等は子供たちさがさういふ場合にするやうに、どうにも仕方のない事を、仕事を止めて考へ挫けはせぬ。そのくらゐの事は計算に入れたあるやうに、やつぱり小止みもなく工事を續けて、終日雨の脚ほど往つては返る。それで夕方になれば、再び凡そ半分ばかり巢の形が出來てゐる。薄暗くなつてしまへば、もう古巢の中に入つてゐるのか、しかけた作事を黄昏に置いて、鳥はそつと消えたやうに影を亡くしてゐる。

一日二日忘れてゐると、その間に鳥は巢を仕上げて、元の巢の入口の側にもう一つ口をつけた。丁度外見が、どちらか

らでも同じ一つの室へ入れるやうな恰好になつてゐる。これに彼等には一しきり作業が済んだのである。暫くの間は、彼等は毎日、晝は巢を外にして何處へか飛んで行つてゐる。

私は、下女が筈を買ひに行くのに附いて出て、向の材木屋の物干の横木に二つとまつてゐる燕を、自分の家のだらうと思ひながら歩いてゐると、町角を曲つた下駄屋の小屋根にもまた二羽ゐる。町筋を行けば、また二三羽例のちいくと啼きかはして、往來をしやくうて往き返りして飛んでゐる。本町筋へ入ると、そこには何十羽と群になつて、電線に竝んでとまつてゐる。入り代り飛んではまた來てとまる。一つ

が大勢の中へ割込んで入つて、周圍を廣がらせたり、左と右と入り換つて見たり、くるりと方向を變へたりしてとまつてゐる。

すると間もなく、屋根裏の巢に再び忙しい晝が來る。燕は巢の作事の時分のやうに、何回となく往き返りして、頻りに藁屑を運び入れる。ふとすると、自分の丈よりも何倍も長い、一本のまるで藁を銜へて、引摺るやうにして飛んで歸つて、巢に入り餘つたのをその儘に、暫く入口へ垂してゐる日もある。かうして小鳥は雛を孵す仕度をするのである。いつの間にも卵を生んで、いつの間にも雛になるのか見られない。五月も半ばになると、裏通の町々を女が頭に籠を載せて

莢豆を賣りに来る。その莢豆もおひくゝにすつかり實がい
つて、家ではもはや莢を剥いて煮る。祖母は板の間でその豆
を莢から扱といて、ばたんくゝと膝の上の錫の小盆に溜める。
私は竹箸を削つて、その豆粒で彌次郎兵衛を拵へて、指の先
に止めて門口に出て行くと、屋敷裏がちいゝと騒がしい
ので、目を上げて見ると、知らぬ間に孵つた五六羽の雛鳥が、
まだ毛の生え切らぬ、嘴ばかりのやうな頭をてんぶゝに突
き出して、親を待苛つて啼立ててゐるのである。見てゐると、
暫くして親鳥が例のしやくつた飛方をして歸つて来て、巢
の口にぶら下るやうな恰好をして、口に銜へて来た餌を雛
鳥の口へ分けてやる。子は互に先に取らうとして、南瓜の花

のやうな大きな黄色い口を裂けるやうに開いて、重なり合
つて争ひさわぐ。親はそのいくつもの口へ順々に餌を配る
と、またついと飛んで餌を取りに行く。小鳥はこれで三度目
の忙しい晝を見るのである。

このやうにして雛が段々羽根が整うて来ると、二羽の親
鳥は外から巢の口に近づいて、銜へた小蟲を突き出しては、
中の子を引出さうとする。子が餌に飛びつくかと思ふと、親
はさつと後へ退く。さうしてゐる拍子に、子の一羽が力限り
に飛びかゝつて、巢から三四寸立離れると、足の着くところ
がないのを愕いたやうに、あわてて中へ引返す。かういふ風
にして子鳥はだんくゝと飛立つ事を習ふのであつた。その

鳥の行方？

うちには親の後へついて辛うじて向の屋根まで出るほどになる。水に溺れかけたやうな恰好をして、弾條仕掛のやうにじり〜と危く飛んで行つて、やつと向の屋根に足場を得る。さうしてそこで親の取つて歸る餌を待受ける。

子鳥が最早獨で自由に餌を漁るやうになると、屋根の巢はいつしか蜘蛛の巢に鎖される。鳥はみんなで巢を捨てて、何處で夜を寢明すのであらう。晝は本町筋の電線に集つて二町も三町も黒く續いてとまつてゐる。どれが子か親か、もう區別もなくなつてゐる。

附木の舟をひく頃

やがてその小鳥の群が、毎日濡れて並ぶ雨の日が、何日となくじめ〜と續く。私たちは門口の雨落溝に附木の舟を

蜻蛉の飛ぶ眞晝
月見草の咲く夕
星の低い秋の夜

絲で引いて、こゝろさびしい日を送る。それが過ぎると、裏の枇杷の鈴が熟れて、間もなく蜻蛉が出る。月見草が咲く。浴衣を汚して洗はせて、着換へ〜するうちに、おひ〜と星の低い秋の夜となつて、それからとう〜木の葉の落ちる時分となる。

その間に小鳥は、人の氣附かぬ間に、暖い南の國へ、いくつもの海を越えて歸つてしまふのであつた。(小鳥の巢)

大和路の宮も藁屋も燕かな

燕村

大佛の鼻から出たる燕かな

一茶

窪田空穂

名は通治。早

稲田大學講

師。文學者。

露营地

日本アルプス

中の赤岳山

上。

一二 露 營

窪 田 空 穂

空にのみある
光

露营地へ着いた時には、まだ日がかなり高く、岩も草も光つてゐた。暮れるに遅い夏の日、暮れるまでには相應な間があるやうに思はれた。それがいつのまにか暮れかゝつて、眼をとめて見ると、光は空だけのものとなつてゐる。そしてその空も青ざめて、晝の盛の光で見る時の活きくした力を失つてしまつてゐた。露营地へ着いて寝るまでの間は、即ちちつとして山に向かつて居られる間は、一日の中で一番山嶽氣分の濃くなる時である。危険な道を歩いてゐる時は、山は足の下に縮まつて来て、山と足の下とは一つのもの

山の偉力

になつてゐる。仰ぎ見廻す山は偉力を示してはゐるが、こちらの張切つた心には、その偉力は恐ろしいものとはならず、寧ろ美しく耀かしい誘惑的なものに見えて来た。それがちつと動かずに見てゐると、山は限なく大きく静かに、その反對に自分は極めて無力なものとなつて来る。そこには寂しさに似た感じがある。その寂しさが單なる寂しさでなく、清けさを持つた寂しさなので、一種の快さとなつて受入れられるのである。

夜は今、薄靄のやうにあたりに漂つて来た。テントの側で人夫の焚いてゐる火は、次第に赤い色を加へて来た。見ると、人夫は夕飯を食べる支度をしてゐる。

焚火の焰

その時である。何所かへ遊びに行つてゐた關西の學生の一行は、揃つて騒ぎながら、南の方の偃松帯はひまつたいの邊から近づいて來た。

一番大きな青年が、手に何かを握つてゐる。外のものはそれを珍らしがつて、覗いて見ようとする。大きな青年は手を差上げて見せ惜むやうにしてゐる。それが影繪のやうに見えるながら、私たちの側まで來たのである。

「何です。」と私は大きな青年に訊いた。

「雷鳥の雛」

「雷鳥の雛です。」

「いけませんよ。」と、私は強く首を振つて、その事の悪い意を示した。叱られますよ。」

本當は、私は叱られるか何うかを知らなかつた。直ぐに感じたのは、何れはおもちやにしてしまふにきまつてゐる、それが可哀さうだと思つただけであつた。

「いけませんか。」とその青年は慌てて訊いた。その眼には呆れた色が無邪氣な色と一緒になつて現れた。

「どうしたらいいでせう。」

「どうつて、爲方がないな。放しておきなさいよ。」

青年は「何處へ放したらいいだらう。」といつたやうに、まごまごして、手に握つてゐる雛を眺めた。

横山君は側から、「そこいらに置けばいいでせう。あの石の上がいい。可哀さうに。」と云つた。

青年は云はれた通りに、少し先の低い草の中に高く見える一つの石の上に置いて来た。

焚火を囲んだ時には、案内者は一團の者の氣を兼ねながらも、併ししつかりとした口調で、雷鳥を捕つてはならないこと、分らないつもりでも、何うかして分つて、そのために案内者が迷惑することをいひ渡した。

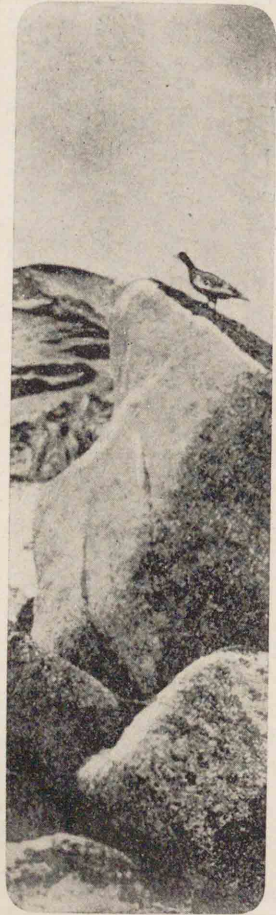
學生連中は黙つて、困つた顔をしてゐた。

「あの雛は、どうなるだらう、死にやしないか知ら。私は氣にして云つた。」

人夫の一人は、親鳥が捜しに来ますよ。鳴聲で分るんです。」と云つた。

高い夜の空

食事が済んで、そろそろ寝ようといふ時であつた。山はすつかり暗くなつてしまつて、空は青黒く高くなつた。赤く燃える生木の焚火をかこんで、私たちは沈黙がちになつてゐた。あたりには何の音もなかつた。



鳥 雷

びよ、びよといふ聲が遠く微かにした。その聲はみんなの耳に入つた。

「雷鳥の親が捜しに来た。」と一人が云つた。

雷鳥の親

みんな其の方に耳を欬てた。

びよ、びよといふ聲は續いて起つて、そして闇の中をさまよつてゐるのが聞えた。近くなるかと聞くと、遠くなつて行つた。

「雛が返事をするといゝんだ。教へてやりやうもない。私たちはさう云つて、親鳥に雛の居場所の分らないのをもどかしがり出した。

「今に分るだらう。」とも云つたが、それは自分を慰めるに過ぎないといふ氣がした。

翌朝、眼が覺めてテントから這ひだすと、私たちは雛鳥を置いた石のところへ行つて見た。雛は居なかつた。その邊を

見廻したが、何處にもその姿は見えなかつた。

「寒い、寒い。」とみんな肩を窄めた。

「水が凍つてゐた。昨日溶けたのが凍つてしまつた。雪溪へ顔を洗ひに行つたものが、さう云つて歸つて來た。

堀君はサックの中から寒暖計を出して見た。

「東京の酷寒ですね。」と云つた。

「今夜はもつと寒くなりますよ。」と案内者は得意なやうな顔をして云つた。

昨夜大事にして焚餘してあつた偃松の生木は白い煙を立てて、黎明のさわやかな大氣の中に燃出して來た。

サック
囊。

「白い煙」

「さわやかな大氣」

北原白秋
名は隆吉。文
學者。早稲田
大學修學。

一三 お祭

北原白秋

わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい。

祭だ、祭だ。

背中に花笠

胸には腹掛

向鉢巻、そろひの半被で、

わつしよい、わつしよい。



わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい。

御輿だ、御輿だ、

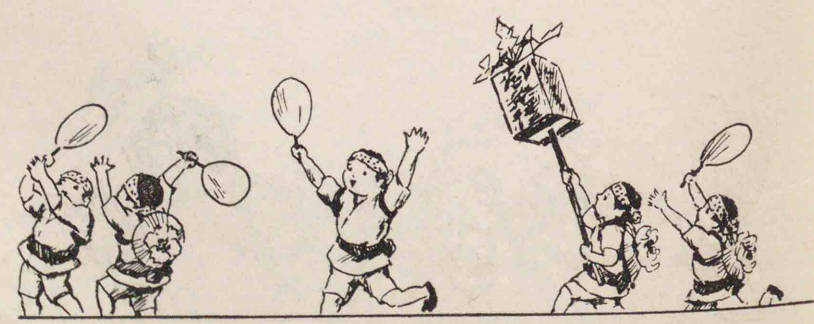
御輿のお練だ。

山椒は粒でも、びりつと辛いぞ。

これでも勇みの山王の氏子だ。

わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい。



わつしよい、わつしよい。

眞赤だ、眞赤だ、夕焼小焼だ、
しつかり擔いだ、

明日も天氣だ。

そら揉め、揉め、揉め。

わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい、

わつしよい、わつしよい。

俺らの御輿だ、死んでも離すな。

泣蟲やすつ飛べ。差上げて廻した。

揉め、揉め、揉め、揉め。

わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい、

わつしよい、わつしよい。

廻すぞ、廻すぞ。

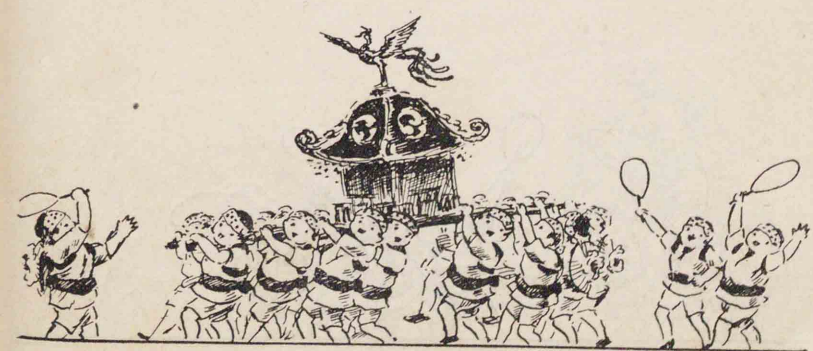
金魚屋も逃げろ、鬼灯屋も逃げろ。
ぶつかつたつて知らぬぞ。



そら退け、退け、退け。
わつしよい、わつしよい。

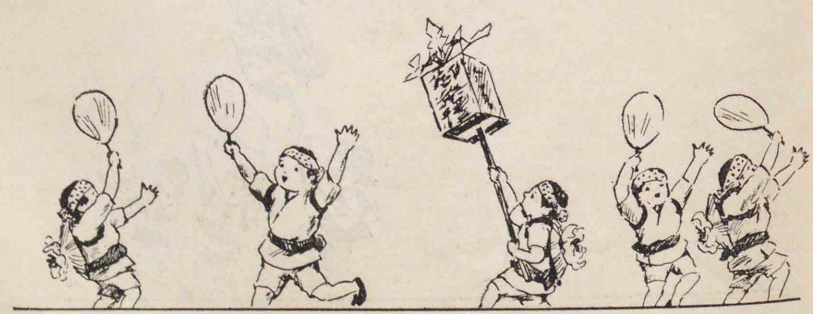
わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい。

子供の祭だ、祭だ、祭だ。
提灯ちてい点ちけろ、
御神燈ごしんとう獻けんげろ。
十五夜お月様まんまるだ。
わつしよい、わつしよい。



わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい。

あの聲何處だ、
あの笛何だ。
あつちも祭だ、
こつちも祭だ。
そら揉め、揉め、揉め、
わつしよい、わつしよい。





は ぎ ち う 浪

わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい。

祭だ、祭だ、

山王の祭だ、子供の祭だ。

お月様紅いぞ、御神燈も紅いぞ。

そら揉め、揉め、揉め。

わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい、

わつしよい、わつしよい。(トンボの眼玉)



若山牧水
名は繁。早稲
田大學英文科
出身。文學者。

草鞋を愛する
心

一四 草鞋の旅

若山 牧水

私は草鞋を愛する。あの枯れた藁で柔かにまた巧みに作られた草鞋を。

あの草鞋を程よく兩足に穿きしめて地の上に立つと、急に五體の締るのを感じず。身體の重みをしつかり地の上にかけて、其處から發した筋肉の動きが、實に快く四肢五體に傳はつてゆくのを覺える。呼吸は安らかに、やがて手足は順序よく動き出す。そして自分の身體のために四邊の空氣が、いかにも心地よく自分の身體に觸れて來る。

机上の仕事に疲れた時、世間のいざこざの煩はしさに耐

へきれなくなつた時、私はよく用もないのに草鞋を穿いて見る。

二三度土を踏みしめてみると、急に新しい血が身體に湧いて、其の儘玄關を出かけて行く。實はさうするまでは、よそに出懸けて行くにも億劫なほど疲れ果ててゐた時なのである。そして二里なり三里なりの道をしつせと歩いて來ると、もう玄關口から子供の名を呼立てるほど元氣になつてゐるのが常だ。

身體をこゝめて、よく足に合ふ様に紐の具合を考へながら結ぶ時の、新しい草鞋の味も忘れられない。足袋を通してしつくりと足の甲を締めつけるあの心持。立上つた時、じん

なりと下から受取る蹠のあの心持。と同時に、よく自分の足に馴れて來て、穿いてゐるのだか居ないのだか分らぬ程になつた時の古びた草鞋も有り難い。實をいふと、さうなつた時が最も足を痛めず、身體を疲れしめぬ時なのである。

ところが、私はその程度を越すことが屢ある。いゝ草鞋だ、捨てるのが惜しいと思ふと、二日も三日も、時とすると四五日にかけて一足の草鞋を穿かうとする。そして往々足を痛める。もうさうなると、餘程よく出來たものでも、何處にか破れが出來てゐるのだ。随つて足に無理がいくのである。

さうなつた草鞋を捨てる時がまたあはれである。いかにも此處まで道づれになつて來た友人にでも別れるやうな、

「道づれになつて來た友人」

うら淋しい離別の心が湧く。

「では、左様なら。」

よくさう聲に出して云ひながら、私はその古草鞋を道端の草むらの中に捨てる。獨旅の時は殊にさうである。

私は九文半の足袋を穿く。さうした足に合ふ様な小さな草鞋が田舎には極めて少いだけに、(都會には大小殆ど無くなつてゐるし)一層さうして捨惜むのかも知れない。

で、これはよささうな草鞋だと見ると、二三足一度に買つて、あとの一二足をば幾日となく腰に結びつけて歩くのである。もつともこれは幾日となく野越え山越えする時の話であるが。

草鞋を穿いて歩くやうな旅行には、無論幾多の困難が伴ふ。つくづく寂しく、苦しく、厭はしく思ふ時がある。

「何の因果で、こんなところまで、てくく出懸けて來たのだらう。」と、われながら恨めしく思はれる時がある。

それでゐて、やはり旅は忘れられない、やめられない。

私の最も旅を思ふ季節は、紅葉がそろそろ散出す頃である。私は元來紅葉といふものをさほどに好まない。けれど、それがそろそろ散りそめた頃の山や谷の姿は實によい。

谷間あたりに僅かに紅を残して、次第に峯にかけて枯木の姿のあらはになつてゐる眺など、私の最も好むものである。路にいつばいに眞新しい落葉が散敷いて、その匂すら日

ざしの中に立つてゐる。その間から濃紫の龍膽の花が一もと二もと咲いてゐるのなども、よく此の頃の心持を語つてゐる。

木枯の過ぎたあと、空は恐ろしいまでに澄渡つて、溪には一面に落葉が流れてゐる、あれもよい。ホ、もう此の邊には、これが来たのかと思ひながら踏む山路の雪、これも尊い心地のせられるものである。枯野の中を行きながら遠く望む高嶺の雪、これも拜みたい氣持である。

落葉の頃に行きあつて、これはよいと思はれた所には、又是非と云ふやうに、若葉の頃に行きたくなる。これは、一つは樹木を愛する私の性癖からかも知れない。

事實、世の中に樹木といふものが無くなつたらば、といふのが仰山すぎるならば、若しそこの山や谷や、森とか林とかいふものが無くなつたならば、恐らく私は旅に出るのをやめるであらう。それもいはゆる殖林せられたものには味が無い。自然に生えたまゝの、とりとりの樹の立並んだ姿があり難い。

理窟ではない、森が斷えると、自づと水が涸れるであらう。水の無い自然、想ふだにも耐へ難いことだ。水は全く自然の間に流れる血管である。これあつて初めて自然が生きて来る、山に野に魂が動いて来る。想へ、水の無い自然の如何ばかり露骨にして荒涼たるものであるかを。ともすれば荒つ

自然を懐かし
む心

ほくならうとする自然を、水は常に柔くし、美しくして居るのである。立並んだ山から山の峯の一つに立つて、遠く眼にも見えぬ麓を縫うて流れてゐる溪川の音を聞く時に、初めて眼前に立聳えて居る巍々たる諸山岳に對して、云ひ様なない親しさを覺えることは、誰しも經驗してゐる事であらうと思ふ。

私の、谷や川の水上を尋ねて歩く癖も、一に此の水を愛する心から出てゐるのである。都會のことは知らない、土に嚙り着いて生きてゐる様を斯うした田舎で、食ふために人間の働いてゐる姿は、時々私をして涙を覺えしめずにはおかぬことがある。(雜誌改造)

音ばかりきこ
える世界

大川
東京の隅田
影川

一五 川 霧

朝七時に舟を出した。今朝は非常に霧が深い。粉のやうな白い細かい水分が眼に見えて、吹亂れて居る。一町先の物は少しも見えぬ。唯艫の軋る音と、人の話聲が聞えるばかりである。音ばかり明瞭に聞取れて、姿が見えないのは全く變な心持のするものだ。

大川へ出ても、少しも霽れて居らぬ。橋をくゞつたかと思へば、五分経たぬ間に、其の橋も影を没してしまふ。橋が消えたかと思ふと、川蒸氣が突如として眼前に現れて来る。一町以外は何も見えないのだから、何が次に出て来るか、さつば

りわからぬ。こんな變化の烈しい大川の景色を見たのは今日が始めてである。

船脚が速いので、多くの舟を追越して、ずん／＼漕ぎくだる。風は少しも無い。水面は至つて平かである。唯新大橋をくゞる時、水が橋杭に激して渦巻くのを見て、今は潮が下げて居るのだな。」と知つた。

永代を過ぎて、もまだ霽れぬ。商船學校が來ても、もまだ霽れぬ。却つて出掛けよりも一層濃くなつたやうに感ずる。川口に碇泊して



新大橋
隅田川に架せる橋。兩國橋の下にある。

永代
永代橋。新大橋の下に架せる橋。

濕つぽく見える火

居る帆前船の列が、常よりもうるはしく浮出して、繪のやうに現れて來る。造船所の鐵を焚く火も、霧を透しては濕つぽく見える。

いよ／＼海面に出た。四面濛氣で、固より何も見えぬ。川と違つて擦れちがふ舟もめつたに無い。並んで漕いで居た舟も、各、志す方面へ消失せてしまふ。残るは我が舟と後から附いて來る釣舟と、唯二艘きりになつた。二艘は合ひつ離れつして、ずん／＼漕ぎ進む。海は油の如く滑かである。船頭は聲高に言葉を交していふ。

船頭仲間の會話

「馬鹿に樂だねえ。」

「うむ、樂だねえ。」

「あんまり樂過ぎて、今夜は寐附が悪いや。」

「違へねえ。此の日並が二三日つゞいたら、船頭は胃病になるね。今日なんざあ、舟賃は貰はなくてもいゝんだが、又今度の埋合せに戴いて置くのだは、その代り風と來たら骨が折れるからね。」

「全くだあ。だが俺あ毎日風を食つても、一日日並がよくなると、すぐ忘れてしまふぜ。」

「そりや人間が馬鹿だからよ。」

「御免なさい。新ちゃんは利口ですよ。さやうなら。」

と少し激した顔付で、うんと押手に力を入れて漕出した。新ちゃんの舟は船脚が重いかして、見る／＼後の方に消えて

しまつた。

我が舟一艘

水を切る音

今は前を見ても後を見ても、愈、我が舟が一艘きりとなつた。天地四方全く濛氣に包まれてしまつた。西へ行くのか、東へ行くのか、それさへわからぬ。かくして行く事凡そ三十分ばかり、舟はちう／＼と水を切つて矢の如く進む。ふと水に眼を移すと、底の藻が流れるやうに明かに見える。非常に淺いところを漕いで居るのだ。魚などは一匹も見えぬ。時々牡蠣の殻がぎら／＼と光る。水をしゃくつて嘗めて見れば、鹹水であつた。舟は一直線にひた進みに進む。ちう／＼ちうちう進む。何處まで連れて行かれるのか知らぬ。聊か不安心である。

「釣舟は一艘も見えぬではないか。」と云ふと、
「霧で……。」

と船頭は平氣である。たま／＼頓狂に赤ん坊の泣くやうな
聲がけた、ましく聞えた。首を伸ばして見ると、遙か向の方
に、舟か鳥か見分けの附かぬ黒いものが、規則正しく一列に
並んで居る。

「舟か。」と聞く。

「鷗です。」と答へる。此の時空に古ぼけた紅提灯のやうな太陽
がぼんやりと現れた。光が全く死んで居る。それも瞬く間に
消えてしまつた。

海苔蘆朶が左右に見え出して、嬉しやと思ふ。蘆朶は一直

「古ぼけた紅提
灯のやうな太
陽」

乗手の心細さ

線に長く十里も先まで續いて居るやうに見える。暫くする
と、それも亦忽ち見えなくなつて、再び元の濛氣に包まれて
しまふ。水を覗くと、いつの間にか、非常に深くなつたと見え
て、黒ずんだ綠色を呈して居る。船頭は何か急に思ひ出した
やうに、艚の手をはたと止めて、前を眺め、又後を眺めた。舟は
なほ數尺を滑つて自ら停る。どうかしたのかと思つたが、別
に事の起つたわけで無く、餘り釣舟が見えないので、さすが
の船頭も、我が航路の正しきや否やを考へて居るらしい。か
うなると、乗つて居る者の心細さは一通りではない。とんだ
日に出掛けたものだ。」と今更悔しくなつた。

彼はやがて力なく艚を取上げながら、又元の如くおし始

坂本四方太
東京帝國大學
文科大學助教
授。大正六年
歿。年四十五。

めた。ぎいゝ、ぎいゝ、だるさうな音をして進む。かくして又十五分ばかり経つた。どうなる事かと思つて居る時、
「あそこに二杯居るな。」と船頭は獨言のやうに云つた。此の一語に大いに力を得て、

「どこに。」と眼を睜つたけれども、我が眼にはまだ何も見えぬ。暫くして漸く一艘幻の如く見え始めた。續いて二艘三艘と見えて来る。全く釣舟に相違ない。乗合の人の動く影さへ見える。愈、近寄つて、ほつと安心した。我が舟もすぐ仲間になつて、其の列に入つた。（坂本四方太の文による）

大類伸
東北帝國大學
教授。文學博
士。
ヴェニス
イタリ
ヤ
Venice
北部の都
會。

一六 水の都

大類伸

ヴェニスは伊太利の有名な都市であつて、風景の美を以て世界に喧傳された水の都である。

此の都は北伊太利の沿岸で、ポーの河口に近い地點にある。街は大きな潟の内にある島で、陸とは全く離れて居り、又海に向かつては長く斗出した洲崎に依つて限られて居る。陸からも、海からも、攻めにくい要塞地で、潟の内は安全な一箇の城郭のやうなものだ。街は其の潟の中央なるリヤルトの島に置かれた。中世の初、幾多の蠻族が伊太利を荒した時、人民の或者は逃れて、此の險要な潟に據つて、こゝで漁業を

城郭の如き潟
の中……

「漁鹽の利」

「交通の要路」

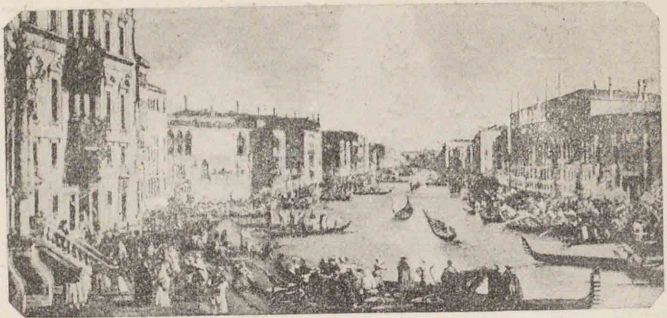
「水の賜」

營むことになつた。これがヴェニスヴェニスの創始である。此の地は軍事上險要の地であつたばかりでなく、其の潟は少からぬ漁鹽の利を藏して居た。ヴェニスヴェニスの住民がおひくゝ發達した其の資源は、これ等の利に依つて得たものである。そればかりでなく、歐洲内地と東方諸國との交通の要路に當つて居たので、遂には中世第一の商業市と云はれる位な盛況を呈するに至つた。

ヴェニスヴェニスの發達は全く水の賜である。水あればこそ、陸からも攻められずに、安全な生活を營む事が出来、水あればこそ、漁鹽の利を收める事が出来、水あればこそ、更に四方に航海通商を試みる事が出来たのだ。其の美しい風景も亦全

ヴェニスの女神
ローマ神話中
の女神。

Gondola
ゴンドラ
ヴェニス
特有の半
月形の船。



く水の賜に外ならぬ。此の如くにしてヴェニスヴェニスは全く水か

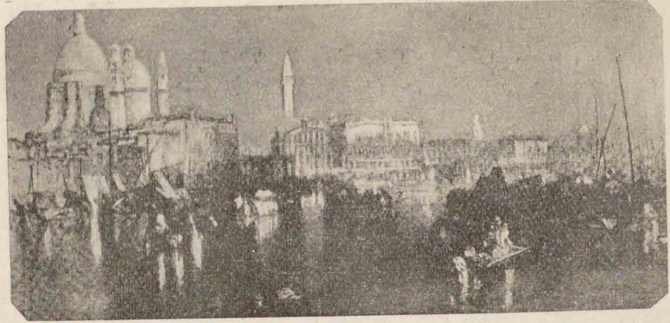
ス = エ ヴ

ら生れたやうなものだ。ヴェニスヴェニスの女神は水に浮かぶ泡から生れたが、ヴェニスヴェニスの都も亦それに似たものと云へよう。初め都は海に面した洲崎の一端なるマラモッコマラモッコにあつたが、後に潟の中央なるリヤルトリヤルトの島に移つたのである。今は此の島全體が都となつて、其の間を縦横に無数の運河が通じて居り、人は此の水の通をゴンドラゴンドラと呼ぶ古風な小船に乗つて往來する。多くの人家は直ぐに水に

「色さまざまの
大理石」

臨んで居るから、戸口の石段は水に洗はれ、ゴンドラは直ぐに此の戸口に着くことが出来る。他の都市ではけたましい自動車の警笛や、敷石を軋る轍の音で喧しいのに、ヴェニスでは水を分けゆく静かな櫂の音が聞かれるばかりだ。文明の進歩した今日、此の如き都市は實に世界に稀なものと云つてよい。

あゝ、水に浮かぶヴェニスの都、寺院に、宮殿に、昔の榮華を語る大厦、高樓が色さまざまの大理石に時代の古びを見せて、一灣の水、晝の静けさに眠る上に、蜃氣樓かと見紛ふばかり浮かび出る時、或は夕日に赤く彩られた眞帆片帆の、滑かな水面をたゆたふ時、或は又遠く銀髮の靡けるが如く、瀉の



ヴェニス夜の景

彼方を限る洲崎の間を分けて、漁船の歸り來る時、若しくは月明かなる夜、ゴンドラの船歌面白く、水に映る町の燈火を櫂の先に搔亂して行く時、水に浮かぶヴェニスの都の美しさは、如何に遊子の心を動かすであらう。朝の霞にも、夕の霧にも、春夏秋冬、ヴェニスの美は即ち水の美に外ならぬ。

併し、ヴェニスに其の美觀のみではない。ヴェニスは實に水の爲に立派な海港となることが出来たのだ。即ち其

の住民は水を利用して、アドリア海から遠く東に航し、小亞細亞・シリヤ・埃及の沿岸に通商貿易を試みた。随つてアドリア海はヴェニスに爲には貴重なるものであつて、これがなければ、あの様な發達は到底望まれなかつたのである。さればこそ、昔のヴェニス人は、アドリア海をヴェニス市の夫と見立てたのである。都を妻とし、海を夫とする、何と美しい想像ではないか。

ヴェニスが繁榮を極めた時代には、以上の想像に基づいて、茲に昔床しい儀式が行はれた。それはヴェニスの町とアドリア海との結婚式である。これは市民が行ふ儀式の中、最も莊嚴華麗なもので、毎年一回づつ行はれた。此の日ヴェニ

スの長官は自ら花を飾つた政府の大船に坐乗し、後には無数の貴族の船を従へ、美々しい行列をつくつて、悠々と海上に漕出し、こゝでヴェニスの都を代表して、黄金の指環を海に投じ、かくてアドリア海と千年の契を籠めたのであつた。夫アドリアと妻ヴェニス、一は人間の作つたもの、一は自然そのもの。其の自然なる夫は、朝夕潮の満干に洲崎の岸を洗ひ、リヤルトの島を訪れて、千萬年も變らないけれど、人爲の妻は衰へて、今は到底昔の誇も榮華も認められない。

(ヴェニスとフロレンス)

吉田絃二郎
本名は源次郎。早稻田大學英文科出身。文學者。筑後川の一名。福岡縣の南部を流れる。千年川
記憶の斷片

思ひ出す故郷の川

一七 千年川のほとり

吉田 絃二郎

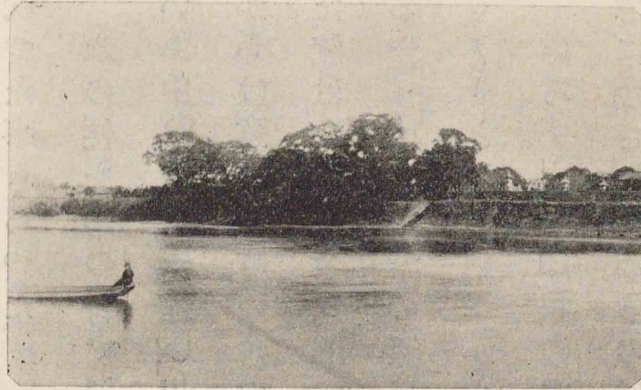
筑紫の平原を貫いて流れてゐる千年川に近い農村を取巻いた樹立があつた。そこが仄かに私の記憶に残つてゐる私の故郷であつた。年に一度か二度、夏になると、きつと農夫たちは千年川の汎濫を恐れて土手の上に集つた。遠い河沿の村々で、雨の夜に打つ半鐘の凄い聲などが、今でも私の頭に刻まれてゐる。

けれども、故郷の川として想ひ出す千年川は、たまたまなく懐かしい、やさしい静かな悠々たる流である。夏になつて、葦の嫩葉がやさしい葉摺の音を立てると、どこからともなく眠たいやうな水鳥の聲が聞えた。

「餘りひもじいく」と言つたので、子供が田の中で鳥になつてしまつた。」

おう！おう！と啼く水鳥の聲を聴く度に、私はよく母親に聞かされたその鳥についての傳説を想ひ出した。今ではその鳥の名さへも忘れた。

行々子や鵜が群集つてゐる土



鳥の聲

手の樹立の中に、草葎をあさりながら、筑後から有明の海へ

背振・天山
福岡・佐賀の
兩縣の境にあ
る山。

温泉嶽
島原半島に聳
える山。

紫の山
白雲

下つて行く船の白帆などを見て、色々な子供らしい空想に耽つた事もあつた。

氷の柱を馬の背で運ぶといふ背振だの、又は天山などといふ山の脈々が、遠い川の上流にそゞり立つてゐた葦の間からは、筑後の町の倉の白壁などが、流を隔てて遠くに見える。流は大抵黄色に濁つてゐた。流の涯に青い夏の海を壓するやうにして紫の温泉嶽が突立つてゐた。白い入道雲がもくもくと河の兩岸から湧出て來ることもあつた。

いろ／＼な印象の中で、今でも一ばんなつかしく私の記憶に残されてゐるのは、千年川の夏の夜である。

ぴた／＼とうら悲しい渚のさゞ波の音を聴く夜など、ぎ

黒い帆
黒い船

若津
福岡縣三潞
郡
「他國人の唄」

い／＼といふ艚の音や、帆綱を繰る音が、薄暗い黄昏の底に聞えたかと思ふと、眼の前に突然黒い魔のやうな大きな船が動いてゐることもあつた。

若津といふ河向の町に燈が點く頃は、月影の中に流れて來る欸ふな乃もあつた。子供心にもそれは他國人の唄であるといふやうな寂しい感じが度々起つた。

水一つ隔てて、そこは筑後といふ他國になつてゐるといふことは、子供の頭にもぼんやりながら意識してゐた。

千年川に沿うた農村の沼に、また菱の白い花が咲いてゐたことも、千年川の夏を想ひ出す毎に忘れられぬものの一つである。(心より心へ)

姉崎嘲風
名は正治。東
京帝國大學教
授。文學博士。

一八 汝の母

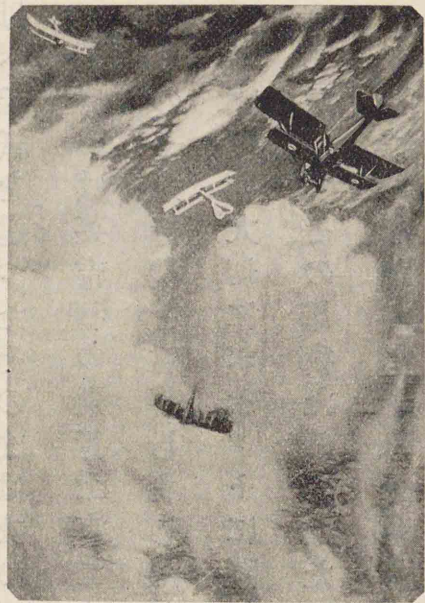
姉崎嘲風

「跡を追うて着
陸した」

最近の世界大戦で、英吉利の一飛行士官が獨逸の飛行機を射落した時の事である。彼は敵の飛行機が地に落ちるのを見ると共に、それに乗組んで居る敵の士官の事を思つて、敵の墜壕の前ではあるが、其の跡を追うて着陸した。敵の飛行機は翼が折れて、散々に破れ、乗組士官は地に横たはつて、呼吸は既に絶えて居た。敵ながら、今まで空中に飛翔して、國の爲に努力してゐた人であつたと思ふと、物の哀が感ぜられて、覺えず涙ぐまれるのであつた。併し敵前である。早く其の死體を片付けてやらうと、胸のポケットの邊にさはると、

胸に抱いてゐ
た寫眞

其處に堅い物があつた。何であらうと、探り出して見ると、一葉の寫眞であつて、それには「汝の母」と書いてある。今戦死した士官は、空中で戦ふ間にも、常にポケットに其の母の寫眞



空中戦

を藏してゐたのであつた。士官は一層の哀に堪へず、先づその屍體を味方の墜壕に齎し、再び飛行機に乗つて、尙一戦したが、幸に

も武運強く、安全に味方の戦線の後に歸つたのであつた。英吉利の士官は、此の射殺した敵と、其の老母とを思ひ續

けた。それと共に、自分の身の上と、且は早く亡くなつた自分の母の上とを考へた。さうして遂にその姓名を辿つて、彼が母へ手紙を送つた。その文は次のやうである。

自分は英吉利の飛行士官です。何月何日、私は敵たる獨逸の一飛行機を射落しましたが、その敵兵は、死ぬ迄母御の寫眞を大切にポケットに藏してゐました。それを發見したので、その母御たるあなたに、此の手紙を差出します。私はあなたの御子息を殺しました。併し、その人を憎んだのでもなければ、その人の母御たるあなたの悲を察しない筈もないのです。唯戦争といふ残忍な仕事に於て、此は私の義務でした。敵士官即ちあなたの御子息が、味方の

陣地を空中から偵察して無事に歸られたなら、その結果、味方は反對に攻撃を受けて、幾人かの兵は、その爲に命を失つたでせう。此の不幸を防ぐため、私は敵機を射落しましたが、その乗組士官の身體には敬意を表し、それを片附けようとする時に、其の人の母御たるあなたの寫眞を發見して、無量の感に打たれたのです。

私は子供の時に母を喪ひ、今でも人に母親があるのを見て羨ましく思ふのですが、私の殺した敵士官には、あなたといふ母親があり、死ぬまで其の寫眞を抱いて居られたのを見ては、自分はちつとしては居られません。殺した私の手紙を御覽になつては、口惜しくもお感じになりま

せうが、私としては、彼の人の母御に對して、恰も自分の母に對するやうな親しい感じを、悲のちうにも禁じ得ません。

私が彼の人を殺したのは、戦争といふ殘忍な悪魔のした事です。あなたも、又亡くなつたあなたの御子息も、此の事を思つて、私の殺人を赦して下さるでせう。さうして又、彼の人の亡くなつた代りに、私は一人の母を得たやうな思のあるのを察して下さるでせう。今私の書く此の手紙は、彼の人と私との二人の魂が、一緒になつて書くのだと思つて下さい。もうこれ以上には書けません。涙で眼は曇り、筆を執る手も慄へて居ります。

此の手紙は、英吉利軍の本營から中立國の手を経て、獨逸國內の宛名の人に届いた。一人の兒を喪つた婦人が、これを読んだ時の心持は、どんなであつたであらう。婦人は數日の後、長い手紙を書いて、彼の英吉利士官へ送つた。その大意は下のやうであつた。

御手紙の着く前に、忤の戦死は知つてゐましたが、其の戦死の相手たるあなたの情深い御手紙を見た時の私の思は、御察し下さい。通常ならば、あなたを忤の仇敵と思ふ所ですが、御述懐に接しては、その仇敵が、却つて忤の蘇生となつて、此の母に手紙を寄せてくれたやうに思はれます。あなたが、忤の懷にあつた寫眞に對して、亡き母御に對

する心持がすると云はれるやうに、あなたの御手紙は、私にとつては、戦死した悴の手紙としか思はれません。あなたは、悴を殺したと云はれ、又、事實その通りに違ない事は、勿論知つて居りますが、殺すのも、殺されるのも、共に各、國の爲で、人として何等の怨も仇もある譯のない事は、お互に明白の事でせう。其の怨もない者が、互に殺さうとするのは、畢竟は戦争の爲ですが、これに就いては、私は何も申しません。唯仇敵といふべきあなたが、私を母の如く思ひ、私も亦あなたが、死んだ悴の身代りのやうに思はれるのは、何たる不思議な事でせう。

私には三人の男子があり、戦死したのはその末子です

が、兄二人もやはり戦線に出て居て、何時弟と同じ運命になるかも計られませぬ。併し私は末子の戦死した爲に、あなたといふ新しい子を得ました。戦争が済み、平和の時から、さうして兄二人も無事に歸る事があれば、私はあなたにも私の家へ一度来て戴きたいと思ひます。二人の兄もあなたを弟と思つて迎へるでせう。其の時には、あなたは死んだ悴と、あなたと二人分の子として、弟として、私の家庭にいつまでも滞在して戴きたい。其の日の早く来ることを神に祈ります。

さうして最後には「汝の母」と、彼の寫眞に書いてある通りに書いてあつた。(光あれ)

蘆田惠之助
前朝鮮總督府
編修官。

所澤
埼玉縣入間
郡。

所澤
廣島
郡。

太刀洗
福岡縣三井
郡。

太刀洗
福岡縣三井
郡。

太刀洗
福岡縣唐津
郡。

濃霧

一九 大道を行く

蘆田惠之助

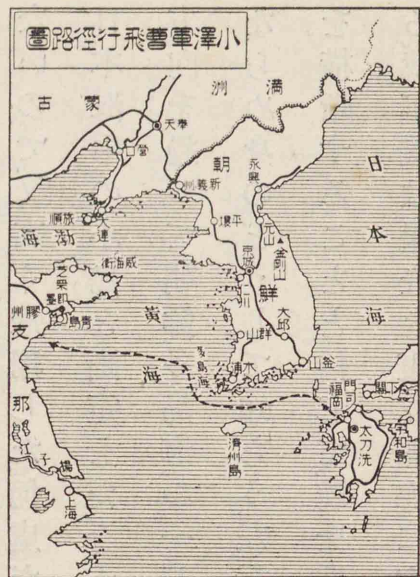
大正十年九月二十七日、長春訪問の國際的飛行は開始せられて、私たちの四機は所澤を立つた。途中滿洲の黄沙に苦められながら、一旦廣島に着陸して、太刀洗に向かつた。黄沙は日々に濃厚となつて、いつ晴れるか分らない。四機は太刀洗に駐つて、たゞその晴れるのをのみ待つて居た。

十月四日愈、京城まで飛ぶことになつて、午前九時十五分太刀洗を離陸した。福岡唐津の上空から海上に出た。すぐに壹岐對馬を見ることと思の外、濃霧が襲來して、全く展望がきかない。たゞ羅針盤を力に進んでゐると、やうく濃霧を

黄沙

出た。壹岐を求めろが見えない。對馬を探すがそれも見えない。その中に機は深いく黄沙の中に入つた。どうしたことか羅針盤が空廻りを始めた。補助羅針盤で補正しつゝ進んだが、これも亦空廻りを始めた。空で羅針盤が狂つては、盲が杖を失つたよりもみじめだ。黄沙の中を行手定めず飛行してゐるので、全く空に迷つて了つた。時

空の盲人



だが、これも亦空廻りを始めた。空で羅針盤が狂つては、盲が杖を失つたよりもみじめだ。黄沙の中を行手定めず飛行してゐるので、全く空に迷つて了つた。時

ハンドル
とつ手。
Handle

に十時四十分。たゞ心あてに、今までの方向を狂はせないやうにハンドルを力に進むこと三十分で、小山の頂を見た。海

中の一孤島だ。無人島らしい。その近くを小蒸氣がかけて行くのを見た。これに力を得て下降して見たが、着陸する所がないので、又高く飛翔した。何處だらうと、私は頻りに考へて、日本海中の小島と断定した。今から考へると、我が機は既に方向を過つて、朝鮮多島海の一端に来てゐたのだ。それを神ならぬ身のどうして知らう。左折すれば朝鮮半島の何處かを横斷することと信じて、舵を曲げた。今思つてもぞつとする。我が機は果なき東支那海に向かつて去つたのだ。

二時間飛行したが、朝鮮半島はおろか、島の片影だも目に入らぬ。いよゝ空に迷つたと思つて、油量を検べると、なほ三時間分を餘してゐる。黄沙は深くこめて、展望は全くきか

ぬ。仰げば蒼天、俯せば蒼海、たゞ目に映ずるは光なき眞紅の太陽のみ。西へ〜と傾く太陽、これを目あてに進んだら、支那大陸の何處かに着くだらうと腹を据ゑて、舵を太陽に向けた。行けども〜海と空ばかり。その中に色々な妄執が群り起つて、わけもなく自分を苦める。身はどうなるのだ。三機は既に京城について盛んな歓迎を受けてゐるのだらう。この機は迷へる我を乗せて、あてどもなく這つて行く。機若し靈あらば、我の不覺を恨むだらう。油盡きて墜落する時は最後の一呼吸まで泳がうか。いや〜、この温かい飛行服をどうして脱捨てることが出来よう。共に沈まう。機と共に名も知らぬ海に沈まう。せめて飛行した時間だけでも木片に彫

バンド
Band
帯。

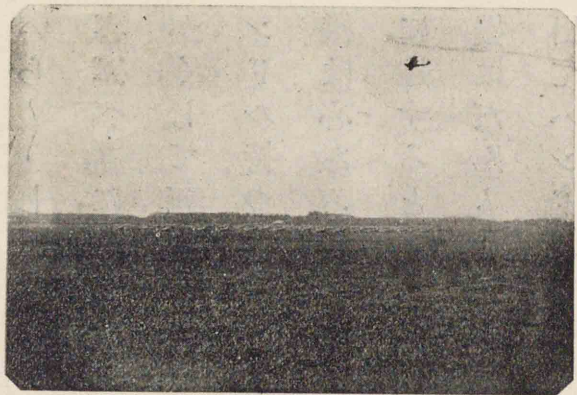
萬歳三唱

つて、後の形見としたい。小刀を取出して彫り始めたが、機の動搖が烈しくて終に果さなかつた。こんな思で、三千五百メートルの高空を飛行すること二時間、再び油量を検すると、餘す所僅かに五十分。我が生命も五十分と限られては、もはや死出の覺悟をしなければならぬ。先づバンドを解いて機體との縁を斷つた。前方の太陽を西とすれば、後は東だ。水筒に残つてゐた水をすつかり飲みほして、靜かに後方東の方に向かひ、聲を限りに天皇陛下の萬歳を三唱した。次に郷里山梨にある母に暇乞を申し上げた。尙兄の一族の安泰なるやうにと祈つた。もはや思ひ遣すことはない、と正しく座に直ると、俄かに橋中佐の琵琶歌が歌ひたくなつた。そこで、最

大道を行く心

後の一節を聲張上げて歌つた。すると心機一轉して、今までいらくくしてゐた心持はどこへやら。生、何物ぞ、死、何物ぞ、生、喜ぶべきにあらず、死、恐るべきにあらず、我はかくして生き、かくして死ぬ、たゞ大道を行く様なものだ。かう考へては、ハンドル持つても執着のきらひがあると、終に放して了つた。機は心ある様に這つて行く。だんくく右に傾いて墜落の度に達すると、左手が靜かに出てハンドルを引く。これが爲に機はだんくく左に傾いて、また墜落の度に達すると、右手が出てハンドルを引く。かくして行くこと暫し、遙かの低空に雲の一團を認めた。直ぐに陸地だと直覺した。下げ舵をとつて千メートルに下ると、雲の下には大河が流れ込んで、海の

波と戦つてゐた。夢ではないかと思つた。又無人島かとも思つた。川について上つて見ると、耕地があり、人家もあつた。廣



い耕地を選んで、低空飛行で耕作してゐる人を追拂ひ、そこに着陸した。所油量を見ると僅かに二十分を餘すだけだつた。

八百餘名が手にく得物を携へて押寄せたのには驚いた。大きな鳥だと思つたといふのには尙驚いた。

私は支那官民の手厚い保護によつて、再び日本に歸ることが出来た。(第二讀み方教授)

リョウセイカ
凌霄花
のうぜんかづ

吉村冬彦
本名は寺田寅彦。東京帝國大學教授。理學博士。
嫌な算術

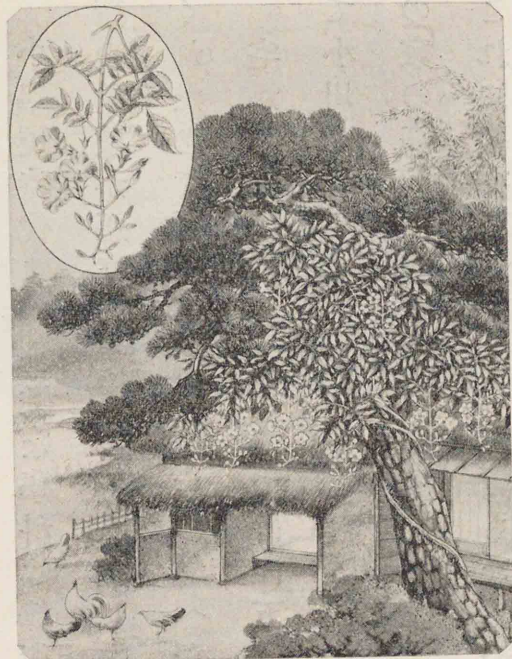
凌霄花の家

二〇 凌霄花

吉村 冬彦

小學校時代に一番嫌な學科は算術であつた。いつでも算術の點數が悪いので、両親が心配し、中學校の先生を頼んでくれたので、夏休中、その先生の宅へ習ひに行く事になつた。宅から先生のところまでは四五町もある。宅の裏門を出て、小川に沿うて少し行くと、村はづれへ出る。そこから、先生の家の高い松が、近邊の藁屋根や植込の上に聳えて見える。これに凌霄花が下から隙間もなく絡つてゐて美しい。毎日晝前に母から注意されて、いや／＼ながら出て行く。裏の小川には、美しい藻が、澄んだ水底にうねりを打つて揺れてゐ

る。其の間を、小鮎の群が白い腹を光らせて、時々通る。子供等が丸裸の背や腹に泥を塗つては小川へはひつて、ぼちやぼ



ちややつて居る。附
木の水車を仕掛け
て居るのもあれば、
宵 盃船に乗つて流れ
花 行くのもある。自
分は羨ましい心を
抑へて、川沿の岸の

草をむしりながら、石盤を抱へて先生の家へ急ぐ。寒竹の生籬を廻らした冠木門をはひると、玄關の脇の坪には、蓆を敷

並べた上に、よく繭を干してあつた。

玄關から案内を乞ふと、色の黒い奥さんが出て来て、「暑いのに、よう御精が出ますねえ。」と云つて、座敷へ導かれる。綺麗に掃除の届いた庭に臨んだ縁側近く、低い机を出して下さる。先生が出て来て、黙つて床の間の本棚から算術の例題集を出して下さる。横に長い黄表紙で、木版刷の古い本であつた。甲乙二人の旅人あり、甲は一時間一里を歩み、乙は一里半を歩む……といった様な題を讀んで、其の意味を講義して聞かせて「これをやつて御覽。」といはれる。先生は縁側へ出て、欠伸をしたり、勝手の方へ行つて、大きな聲で奥さんと話をしたりして居られる。自分は其の問題を前に置いて、石盤の上

で、石筆をこつくいふはせて考へる。座敷の縁側の軒下に、投網が釣下げてあつて、長押の様なものに釣竿が澤山掛けてある。何時間で乙の旅人が甲に追着くかといふ事が、どうしても分らぬ。考へて居ると頭が熱くなる。坐つて居る脚に汗がにじみ出て、着物のひつゝくのがいかにも心持が悪い。頭を抑へて庭を見ると、笠松の高い幹には、眞赤な凌霄の花が熱さうに咲いてゐる。よい時分に先生が出て來られて、「どうだ、むつかしいか、どれ」と云つて自分の前へ坐られる。羅紗切を圓めた石盤拭で、隅から隅まで一度拭いて、そろく丁寧に説明して下さる。時々「分つたか、分つたか」と念をおして聽かれるが、大方それが能く分らぬので、妙に悲しかつた。俯向

いて居ると、水漬が自然に垂懸つて來る。それをちつと泳へて居る。愈、落ちさうになると、思ひ切つて睨り上げる。これもつらかつた。晝飯時が近くなるので、勝手の方では皿や鉢の音がしたり、物を焼く香がしたりする。腹の減るのもつらかつた。繰返して教へて下さつても、結局餘りよくは分らぬと見ると、先生も悲しさうな聲を少し高くなさることがあつた。それが又妙に悲しかつた。「もう宜しい、又明日おいで。」と云はれると、一日の務が兎も角も濟んだ様な氣がして、大急ぎで宅へ歸つて來た。宅では何も知らぬ母が、色々涼しい御馳走を拵へて待つて居て、汗だらけの顔を冷水で清めさせてくれて、ちやほやされるのが又妙に悲しかつた。(藪柑子集)

二一 記念の家

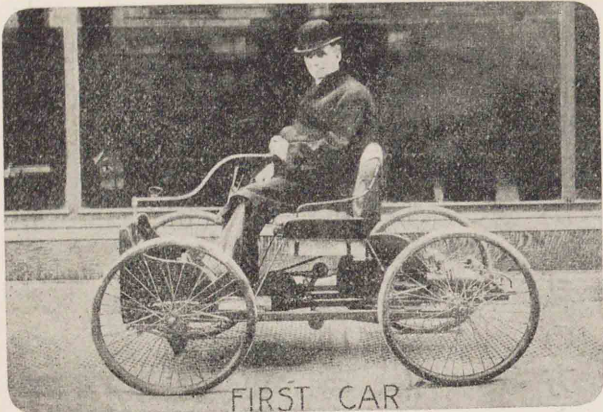
ヘンリー、フォードは或日私を彼の母の家に招待した。ヘンリー、フォードは母に對する敬慕の記念として、彼の女が愛して居た此の家を、一千八百七十六年の昔にあつたまゝの状態と寸分違はぬやうに回復した。其の中にある家具は、皆當時の物で無ければ、少くとも其の通りに複製された品である。屋内の各室は毎朝丁寧にはたきを掛けられる。爐には心持のよささうな焚火が燃えて居る。厨房の戸棚には皿や鉢が綺麗に片付けて並べられ、何時でも使用に應じ得るやうに用意されて居る。唯一つ此處に缺けて居るもの

ヘンリー、フォード
自動車王として世に知られた米國の實業家。
回復された家

唯一つ缺けてゐるもの……

は、彼の母の生きた顔が見られないのみである。

私は彼が幼時、母から訓戒を受けた爐邊に椅子を占めた。爐上の棚には、彼が若い時から寶物の如くにして居た燭臺が載せてあつた。彼の女が愛好した古風な銅壺も、矢張其の場所に置いてあつた。棚の中央の處には、古い煙管が載せてある。彼は、



ヘンリー、フォードの最初の自動車

「僕は或日此の古い煙管を見つけた。併し煙草の詰口は無くなつて居たから、僕は其の道

一つのバイブまで……

の職人に詰口だけ作らせた。あそこに祖父が其の煙管を殘して置く習慣であつたから、僕は今も其處に載せて置くのだ。」と語つた。

偉大な人物は些細の事を大事に思ふものであると、つくづくと感心した。彼は更に言葉靜かに、

「母は僕が十三歳の時に死んだ。」

と言つてから、膝頭に兩手を握り合はせて、燃立つ火焰を數分間見詰めて居た。

暫くしてから、私の方を向いて、其の後は少しも躊躇することなく語つた。

「僕は母が望んだ通りに、僕の一生を過すやうにと努力し

靜かな姿
輝く眸

た。母は僕の子供の時分から、己の任務を果すことが世界に於ける最高の義務であると教へた。僕は母の言葉を深く信じた。今でも母の教訓を信じて居る。僕は母の教訓を服膺するやうに努めて來た。」

「母は時間を空費することは斷じてなかつた。母は何事にも秩序を重んじ、又極めて綿密で、しかも其が徹底的であつた。我々にもそれを要求した。」

「僕は實際さうであるか、又さうで無いかは知らないが、併し僕の叔父は、僕が其の點に於ては母と少しも違はぬと曾て言つたことのあるのを、僕は記憶して居る。」

ヘンリー、フォードは此の事を言つた時、恰も彼の叔父の

批評を聞いた當時を憶ひ出したやうに微笑を浮かべた。其の時爐の中に立てかけられて燃えて居た薪が、一つ燃落ち、床の上に倒れて來た。彼は腰を屈めてそれを拾ひ上げて、焚火の上に積重ねた。それが、恰も彼の母が其處に居て、彼にさうせよと命じたかのやうに見えた。

人間の偉大は、少年時代に基礎を作るものであると、私は常に考へて居たが、此の時ますますその感を強くした。

フォードは再び語り出した。

「我々は能く遊び、よく戯れ、よく騒いだ。母は常に我々を戒めて、人間は遊戯ばかりして過されるものではないと言つて居た。殊に僕に、『お前はまづ働いて、それからお遊びなさい。』

と言つて聞かせた。彼の女の口癖のやうにして居た金言は、『最善の遊樂は任務を果した後に來る。』といふのであつた。

「母は又人間の務といふ事を確く信じて居た。僕が色々の經驗をするに従つて、僕は母がどれほど深く物事を知つて居たかといふ事を、しかもそれは書物からではなく、全く實生活から覺えた事の多かつたことを知る事が出來た。」

彼はかく語つた後、壁間にある母の肖像を見上げて、微笑を洩らした。そして數秒間、彼は何か思案して居る様子であつたが、暫くして又語り續けた。

「母は僕が、たまに不平を訴へた時に、よく言つたものだ。『人生といふものは、お前達に快くない仕事を與へることがあ

る。併しお前達はそれをせねばならぬ。何でもお前達の爲すべき事、又何でもお前達がせねばならぬと承知して居る事は、お前達の出来るかぎり腕を揮つてせよ。と諭した。これこそ母の教訓の最も偉大なものであつた。僕は不愉快な仕事に出逢つた時には、必ず母の言つた事を憶ひ起して、ぢつと辛棒するやうにした。

「僕の母は働く事を僕に教へてくれた。母自身の日々の仕事も決して面白い仕事のみでは無かつた。併し凡て此等の事は爲さねばならぬ家庭の仕事であつて、母はそれを自分の仕事と考へて居た。母が夜になつてから、長い晝間の雑役のために綿の如くに疲れ果てて居たのを、僕は屢見たけれ

ども、併し僕は、母が一度でもそれを辛いとこぼしたことを聞いた覺がなかつた。我々子女に對する彼の女の笑顔は、常に美しく、優しく、そして彼の女の愛は少しも變らなかつた。彼の女は我々子女のために、崇高な模範を垂れてくれた。」

「母が死んだ時には、僕は惨めな目に逢はされたと思つた。其の後、時々友人が僕を慰めて、母が今頃まで生きて居られたらばと言つてくれた。僕も亦さう思つた。併し今になつて考へると、母は我々子女のために、彼の女の爲し能ふ限の總べての事を成し果した後、あの世に赴いたのだ。母は年が若かつたけれども、彼の女の精神は老熟して、そして麗しいものであつた。母はあれで現世の務を全うしたのである。母は

たとへ百歳の壽を保つたとしても、逆も何にもしないで居ることは出来なかつたと、僕は確信する。」

「然らばあなたは如何ですか。」

「僕も、僕の働ける最後まで働を続けよう。僕は唯の一日でも休息を求めない。若し遊樂の生活が欲しかつたら、數年前に會社からも、工場からも退いて、そして安逸の生活に入り、決して再び努力生活には復歸しなかつたであらう。併しながら、それは僕には不可能の事であつた。僕には尙今後大いに成すべき仕事が残つて居る。僕は何時になつたら、僕の此の世に於ける仕事が完了したと思はれるだらうか。僕は我が事成れりと云ふ言葉が發せられる時まで、僕がやりかけ

た仕事に對して、矢張平常の如くに、明日の事を眺めて居るであらう。」

ヘンリー、フォードは慥かに彼の母の如き使命を受けて生れた人であつた。(ゲスト述、加藤三郎譯、自動車王物語に據る)

○
聖人を以てわが身を正すべし。聖人を以て人を正すべからず。凡人を以て人を許すべし。凡人を以て我が身を許すべからず。(大和俗訓)

安井息軒
名は衡。儒者。

明治九年歿、
年七十八。

森鷗外

名は林太郎。

軍醫總監・東

京帝室博物館

長等に歴任。

醫學博士。文

學博士。大正

十一年歿、年

六十三。

評判

蔭言

飲肥
宮崎縣南那珂
郡の町名。

二二 安井息軒

森 鷗 外

「仲平ちゆうへいさんはえらくなりなさるだらう。」と云ふ評判と同時に、仲平さんは不男だ。」と云ふ蔭言が清武一郷に傳へられてゐる。

仲平の父は日向國宮崎郡清武村に二段八畝程の宅地を持つて、そこに三棟の家を建てて住んでゐる。財産としては、宅地を少し離れた所に田畑を持つてゐて、年來、家で漢學を人の子弟に教へる傍、耕作を輟めずにゐたのである。併し仲平の父は、三十八の時江戸へ修業に出て、中一年置いて、四十の時歸國してから、段々飲肥藩で任用せられるやうになつ

たので、今では田畑の大部分を小作人に作らせることにしてゐる。

仲平は二男である。兄文治が九つ、自分が六つ、の時、父は兄弟を残して江戸へ立つたのである。父が江戸から歸つた後、兄弟の脊丈が伸びてからは、二人共毎朝書物を懐中して、畑打に出た。そして外の人が烟草休をする間、二人は讀書に耽つた。

父が始めて藩の教授にせられた頃の事である。十七八の文治と十四五の仲平とが、例の畑打に通ふと、道で行逢ふ人が、皆言合はせたやうに二人を見較べて、連があれば、連に何事をかさゝやいた。脊の高い、色の白い、目鼻立の立派な兄文

治と脊の低い、色の黒い、片目の弟仲平とが、いかにも不釣合な一對に見えたからである。兄弟同時にした疱瘡が、兄は軽く、弟は重く、弟は大痘痕おほいぼになつて、剩へ右の目が潰れた。父も小さい時疱瘡をして片目になつてゐるのに、又仲平が同じ不具かたはになつたのを思へば、「偶然」と云ふものも残酷なものだと云ふ外はない。

仲平は兄と一緒に歩くのをつらく思つた。そこで朝は少し早目に食事を済ませて、一足先に出て、晩は少し居残つて仕事をして、一足後れて歸つて見た併し行逢ふ人が自分の方を見て、連りとさゝやくことは息まなかつた。そればかりではない。兄と一緒に歩く時よりも、行逢ふ人の態度は餘程

村人のさゝや
き

不遠慮になつて、さゝやく聲も常より高く、中には聲を掛けるものさへある。

「猿……」

「見い。けふは猿がひとりで行くぜ。」

「猿が本を読むから妙だ。」

「なに。猿の方が猿引よりは好く讀むさうな。」

「お猿さん。けふは猿引はどうしましたな。」

交通の狭い土地で、行逢ふ人は大抵知合つた中であつた。仲平はひとり歩いて見て、二つの発見をした。一つは自分がこれまで兄の庇護の下に立つてゐながら、それを悟らなかつたと云ふことである。今一つは、驚くべし、兄と自分とに渾名あだなが附いてゐて、醜い自分が猿と云はれると同時に、兄ま

「猿引……」

篠崎小竹
名は弱。儒者。
(二四四〇一
二五一二)

でが猿引と云はれてゐると云ふことである。仲平は此の發明を胸に藏めて、誰にも話さなかつたが、その後は強ひて兄と離れ、トに畑へ往反しようとはしなかつた。

仲平に先だつて、體の弱い兄の文治は死んだ。仲平が大阪へ修業に出て、篠崎小竹の塾に通つてゐた時に死んだのである。仲平は二十一の春、金子十兩を父の手から受取つて清武村を立つた。そして大阪土佐堀三丁目の藏屋敷に着いて、長屋の一間を借りて、自炊をしてゐた。儉約の爲に、大豆を鹽と醬油とで煮て置いて、それを飯の菜にしたのを、藏屋敷では「仲平豆」と名づけた。同じ長屋に住むものが、あれでは體が續くまい。」と氣遣ふほどであつた。中一年置いて、二十三にな

「仲平豆」

古賀侗庵
名は煜。徳川
幕府の儒者。
(二四四八一
二五〇五)
松崎謙堂
名は密。儒者。
(二四三一
二五〇四)

つた時、故郷の兄文治が死んだ。學殖は弟に劣つてゐても、才氣の鋭い若者であつたのに、兎角病氣で、とうとう二十六歳で死んだのである。仲平は訃音を得て、すぐに大阪を立つて歸つた。

其の後仲平は二十六で江戸に出て、古賀侗庵の門下に籍を置いて、昌平黌に入つた。後世の註疏に據らずに經義を窮めようとする仲平がためには、古賀より松崎謙堂の方が懐かしかつたが、昌平黌に入るには林か古賀かの門に入らなくてはならなかつたのである。痘痕があつて、片目で、脊の低い田舎書生は、こゝでも同窓に馬鹿にせられずには濟まなかつた。

それでも仲平は無頓着に黙り込んで、一人讀書に耽つてゐた。座右の柱に、半折に何やら書いて貼つてあるのを、からかひに來た友達が讀んで見ると、

今は音を忍が岡のほとゝぎすいつか雲井のよそに
名告らむ

と書いてあつた。

「や、えらい抱負ぢやぞ。」

と友達は笑つて去つたが、腹の中では稍氣味悪くも思つた。これは十九の時漢學に全力を傾注するまで、國文をも少しばかり研究した名残で、わざと流儀違の和歌の眞似をして同窓の揶揄に酬いたのである。

仲平はまだ江戸にゐる中に、二十八で藩主の侍讀にせられた。そして翌年藩主が歸國せられる時、供をして歸つた。

江戸がへり、昌平饗仕込と聞いて、

「仲平さんはえらくなりなさるだらう。」

と評判する郷里の人達も、痘痕があつて、片目で、脊の低い男振を見ては、

「仲平さんは不男だ。」

と蔭言を言はずに置かなかつた。

大儒息軒先生として、その名を知られるやうになつたのは、仲平が四十八の頃からである。(鷗外全集)

夏目漱石
名は金之助。
文學博士。大
正五年歿、年
五十。

二三 二百十日

夏目漱石

172

「あの音は壯烈だな。」

「足の下が、もう揺れて居る様だ。おい、一寸地面へ耳をつけて聽いて見給へ。」

「どんなだい。」

「非常な音だ。慥かに足の下が唸つてる。」

「其の割に烟が來ないな。」

「風の所爲だ。北風だから、右へ吹きつけるんだ。」

「樹が多いから、方角が分らない。もう少し登つたら見當がつくだらう。」

二人の姿

しばらくは雜木林の間を行く。道幅は三尺に足らぬ。いくら仲が善くても、並んで歩く譯には行かぬ。圭さんは大きな足を悠々と振つて、先へ行く。碌さんは小さな體軀をすぼめて小股に後から跟いて行く。跟いて行きながら、圭さんの足跡の大きいのに感心して居る。感心しながら歩いて行くと、段段後れて仕舞ふ。

路は左右に曲折して爪先上りだから、三十分と立たぬうちに、圭さんの影を見失つた。樹と樹との間をすかして見ても、何も見えぬ。山を下りる人は一人もない。上るものにも全く出會はない。只所々に馬の足跡がある。たまたまに草鞋の切れが茨にかゝつてゐる。其の外に、人の氣色は更に無い。饑餓腹

173

阿蘇の社
官幣大社。熊
本縣阿蘇郡宮
地村に在つ
て、神武天皇
の御孫健甕龍
命を祀る。

の碌さんは少々心細くなつた。

昨日の澄切つた空に引換へて、今朝宿を立つ時からの霧模様には少し懸念もあつたが、晴れさへすればと、好い加減な事を頼みにして、とう／＼阿蘇の社までは漕附けた。白木の宮に禰宜の鳴らす拍手が、森閑と立つ杉の梢に響いた時、見上げる空から、ぼつりと何やら額に落ちた。今朝がた、饅餡を煮る湯氣が障子の破れから吹いて、白く右へ靡いた頃から、午過は雨かなとも思はれた。

雑木林を小半里程來たら、怪しい空がとう／＼持切れなくなつたと見えて、梢に滴る雨の音が、さあと北の方へ走る。後から、すぐ新しい音が耳を掠めて、翻る木の葉と共に、又北

の方へ走る。碌さんは首を縮めて「ちえつ」と舌打をした。

一時間程で林は盡きる。盡きると云はうよりは、一度に消えると云ふ方が適當であらう。振返る後は知らず、貫いて來た一筋道の外は、東も西も茫々たる青草が波を打つて、幾段となく連る奥から、むく／＼と黒い烟が持上つて來る。噴火口こそ見えないうが、烟の出るのはつい鼻の先である。

林が盡きて、青い原を半町と行かぬ所に、大入道の圭さんが空を仰いで立つてゐる。蝙蝠傘は疊んだ儘、帽子さへ被らずに、毬栗頭をぬつくと草から上へ突出して、地形を見廻してゐる様子だ。

「おうい。少し待つて呉れ。」

二人の様子を
見よ

「おうい。暴れて来たぞ。暴れて来たぞう。しつかりしろ。」
「しつかりするから、少し待ってくれえ。」と、碌さんは一所懸命に草の中を這上る。漸く追ひつく碌さんを待受けて、

「おい、何を愚圖々々してゐるんだ。」と、圭さんが遣つつける。
「だから饅頭ぢや駄目だと云つたんだ。あゝ、苦しい。おい君の顔はどうしたんだ。眞黒だ。」

「さうか。君のも眞黒だ。」

圭さんは無雑作に白地の浴衣の片袖で、頭から顔を撫廻す。碌さんは腰からハンケチを出す。

「なる程、拭くと着物がどす黒くなる。」

「僕のハンケチもこんなだ。」

「ひどいものだな。」と、圭さんは雨の中に坊主頭を曝しながら、空模様を見廻す。

「よなだ。よなが雨に溶けて降ってくるんだ。そら、其の薄の上を見給へ。」と、碌さんが指をさす。長い薄の葉は一面に灰を浴びて、濡れながら靡く。

「成程。」

「困つたな、こりや。」

「なあに大丈夫だ。ついそこだもの。あの烟の出る所を目當にして行けば、譯は無い。」

「譯は無ささうだが、是ぢや路が分らないぜ。」

「だから、さつきから待つて居たのさ。こゝを左へ行くか、右

よな
火山灰。熊本
地方の方言。

へ行くかと云ふ、丁度股の所なんだ。」

「成程、兩方とも路になつてゐるね、併し烟の見當から云ふと、左へ曲る方が好ささうだ。」

「君はさう思ふか。僕は右へ行く積りだ。」

「どうして。」

「どうしてつて、右の方には馬の足跡があるが、左の方には少しもない。」

「さうかい。」と、碌さんは、身體を前に曲げながら、蔽ひかゝる草を押分けて、五六歩左の方へ進んだが、すぐに取つて返して、

「駄目な様だ、足跡は一つも見當らない。」と云つた。

「無いだらう。」

「そつちには有るかい。」

「うん、たつた二つ有る。」

「二つきりかい。」

「さうさ、たつた二つだ。そら其處と此處に。」と、圭さんは、縹子張の蝙蝠傘の先で、かぶさる薄の下に、幽かに残る馬の足跡を見せる。

「是だけかい。心細いな。」

「なに大丈夫だ。天佑ぢやないか。」

「君の天佑はあてにならない事夥しいよ。」

「なに、是が天佑さ。」と、圭さんが云ひ了らぬうちに、雨を捲い

「風の飛んで行く足跡」

て颯とおろす一陣の風が碌さんの麥藁帽を遠慮なく吹込めて、五六間先まで飛ばして行く。眼に餘る青草は、風を受けて一度に向へ靡いて、見るうちに色が變ると思ふと、又靡き返して故の態に戻る。

「痛快だ。風の飛んで行く足跡が草の上に見える。あれを見給へ。」と、圭さんが幾重となく起伏する青い草の海を指す。

「痛快でもないぜ。帽子が飛んぢまつた。」

「帽子が飛んだ。いゝぢやないか。帽子が飛んだつて取つて来るさ。取つて来てやらうか。」

圭さんは、いきなり自分の帽子の上に蝙蝠傘を重しに置いて、颯と薄の中へ飛込んだ。

「おい、此の見當か。」

「もう少し左だ。」

圭さんの身體は次第に青い物の中に、深くはまつて行く。仕舞には首だけになつた。あとに残つた碌さんは又心配になる。

「おい、大丈夫か。」

「何だあ。」と向の首から聲が出る。

「大丈夫かよう。」

「やがて圭さんの首が見えなくなつた。」

「おい。」

鼻の先から出る黒烟は、鼠色の圓柱の各部が絶間なく蠕

動を起しつゝある如く、むくく〜と捲上つて、半空から大氣の裡に溶込んで、碌さんの頭の上へ容赦なく雨と共に落ちてくる。碌さんは悄然として首の消えた方角を見詰めて居る。

暫くすると丸で見當の違つた半町程先に、圭さんの首が忽然と現れた。

「帽子はないぞう。」

「帽子は入らないよう。早く歸つてこようい。」

圭さんは坊主頭を振立てながら、薄の中を泳いで来る。

「おい、何處へ飛ばしたんだい。」

「何處だか相談が纏らないうちに飛ばしちまつたんだ。帽

子はいゝが、歩くのは厭になつたよ。」

「もういやになつたのか。まだ歩かないぢやないか。」

「あの烟と、この雨を見ると、何だか物凄くつて、歩く元氣がなくなるね。」

「今から駄々を捏ねちや仕方がない。——壯快ぢやないか。」

あのむくく〜烟の出てくる所は。」

「あのむくく〜が氣味が悪いんだ。」

「冗談云つちやいけない。あの烟の側へ行くんだよ。さうして、あの中を覗き込むんだよ。」

「考へると全く餘計な事だね。」

「兎も角も歩かう。」

「は、は、兎も角もか君が兎も角もと云出すと、つい釣込まれるよ。さつきも兎も角もで、とうとう餛飩を食つちまつた。」

暫くして圭さんは立止つて、黒い烟の方を見る。

濛々と天地を鎖す秋雨を突抜いて、百里の底から沸騰る濃いものが渦を捲き渦を捲いて、幾百噸の量とも知れず立揚る。其の幾百噸の烟の分子が、悉く震動して爆發するかと思はれる程の音が、遠い〜奥の方から濃いものと共に頭の上へ躍り上つて来る。

雨と風のなかに、毛蟲のやうな眉を攢めて、餘念もなく眺めて居た圭さんが、非常な落附いた調子で、

「雄大だらう、君。」と云つた。

「全く雄大だ」

「全く雄大だ。」と碌さんも眞面目で答へた。

「恐ろしい位だ」

「恐ろしい位だ。」暫く時をきつて碌さんが附加へた言葉はこれである。

圭さんはのつそりと踵を廻らした。碌さんは默然として跟いて行く。空にあるものは、烟と雨と風と雲である。地にあるものは、青い薄と女郎花と處々にわびしく交る桔梗のみである。

無人の境を行く二人

二人は煢々として無人の境を行く。(二百十日)

橋の袂に一條の小徑あり。堤を下りて水に通ず。水の中よりは柳の大樹生じて、道の上にまで、その長き枝を曳きたり。その枝は細く密にして網目をなし、四五艘の小舟を繋げる舟小屋に掲げたる、舟貸し候の文字を、いと物靜かに覗ひ讀ましむ。

流は平かにして鏡の如く、この面に映ずる總べての影は澄みて動かず。折々塵の如く飛ぶ水蟲の波紋に亂さるゝのみ。

丘陵の麓を汽車走り過ぎぬ。

忽ち、石の釣橋をば、みやびたる少女等の腕組みあひて來るがあり。橋の中程なる欄干に身を寄せて、何れの小舟をや

借るべきと指さし語る聲、此方の岸まで聞えつ。

畫工は卓をたゞきて二度目の蓋を命じぬ。

旅亭の方より物煮る臭して、前垂かけし十四五歳の娘出でたり。

犬の聲聞ゆ。(新編ふらんす物語)

某は案山子にてさふらふ雀どの

漱石

秋の蟬死にたくもなき聲音かな

同

子規に送る

見つゝ行け旅に病むとも秋の富士

同

正岡子規
名は常規。類
祭書屋主人・
竹の里人等の
別號がある。
明治三十五年
歿、年三十六。

暮れ行く山
輝く白雲

二五 箱根山

正岡子規

國府津・小田原は一所懸命にかけぬけて、はや箱根路へか
かれば、何となく行脚の心の中嬉しく、秋の短き日は全く暮
れながら、谷川の音耳を洗うて、烟霧模糊の間に、白雲光あり。

白雲の中にぼつかり夜の山

湯元に辿り着けば、一人のをのこ袖をひかへて、「いざ給へ、
善き宿まゐらせん。」といふ。引かるゝまゝに行けば、いとむさ
くろしき家なり。前日來の病もまだ全くは癒えぬに、此の旅
亭に一夜の寒氣を受けんこと氣遣はしく、やゝ落膽したる
が、まゝよ、これこそ風流の始、行脚の眞面目なれ。

「わるい宿」

だまされてわるい宿とる夜寒かな

次の日まだき起出でつ。板屋根の上の滴るばかりに沾ひ
たるは、昨夜の雲のやどりにやあらん。よもすがら雨と聽き



箱根 響なりしものをと、
箱根 はや山深き心地ぞ
箱根 街 なる。
箱根 道 けふは一天晴渡

きらつくに、鶴鶴の小岩づたひに飛びあるくは、逃ぐるにや
あらん、はたこなたへとしるべするにやあらんと、草鞋のは

「我がなり」

こび自ら軽らかに、箱根街道のぼり行けば、鶉の聲左右にか
しましく、

我がなりを見かけて鶉の鳴くらしき

秋の雲瀧をはなれて山の上

病みつかれたる身の、一足のぼりては一息ほつとつき、一
坂のぼりては巖端に尻をやすむ。駕籠昇の頻りに駕籠をす
すむるを耳にもかけず、

山路の菊野菊ともまた違ひけり

と吟じつゝ行けば、

どつさりと山駕籠おろす野菊かな

石原に瘦せて倒るゝ野菊かな

二子山
双兒山とも書
く。箱根中央
火山の東南端
の峰で、双峰
相並ぶ。
茶屋の婆様

などおのづから口に浮かみて、はや二子山鼻先に近し。谷に
臨めるかたばかりの茶屋に腰掛くれば、秋に枯れたる婆様
の挨拶、何となく物寂びて面白く覺ゆ。見あぐれば千仞の山
峡より木を負うて下り來る樵夫二人三人、のそりくゝとも
のもえ言はで、汗を滴らすさまいとあはれなり。

樵夫二人だまつて霧をあらはるゝ

樵夫も馬子も皆足を茶屋にやすむれば、それゝゝにいた

はる婆様のなさけ、一碗の澁茶よりも猶濃し。

犬蓼の花くふ馬や茶の煙

店先の柿の實つゝく烏かな

名物ありやと問へば、力餅といふものなりとて、大きなる

餅の焼きたるを、二つ三つ盆に盛り來る。

山姥の力餅賣る薄かな

など戯れつゝ、力餅の力を借りて上ること一里餘、杉櫓の大木道を夾み、元箱根の一村目の下に見えて、秋さびたるけしき仙源に入りたるが如し。

紅葉する木立もなしに山深し

千里の山嶺を攀ち、幾片の白雲を踏みくだきて上り着きたる山の頂に、鏡を磨ぎだせる蘆の湖を見そめし時の

心ひろさよ。餘りの絶景に、恍惚として立ちもえ去らず、木の



湖の蘆

「心づよし」

くひぜに坐してつくづくと見れば、山更にしんくとして、風吹かねども、冷氣冬の如く足もとよりのぼりて、腦天にしみ渡るこゝちなり。波の上に飛びかふ鶴鴿は忽ち來り、忽ち去る。秋風に吹きなやまされて、力なく水にすれつあがりつ、胡蝶のひらくと舞出でたる、箱根の頂とも知らずてや、いと心づよし。

遙かの空に白雲とのみ見つるが上に、兀然として現れ出でたる富士、こゝよりも猶三千仞はあるべしと思ふに、更に其の影を幾許の深さに沈めて、さゝ波にちゝめ寄せられたる、またなくをかし。

箱根驛にて午餉したゝむるに、皿の上に尺にも近かるべ

き魚一尾あり。主人誇りかに、こは湖水の産にして、この名

物なりといふ。名を問へば、赤腹

となん答へける。面白き魚の名

大なりけり。

名 これより山をくだるに、見渡

行 すかぎり皆薄なり。箱根の關は

列 いづちなりけんとおもふもの

から、問ふに人なく、探るに跡な

し。これらや歌人の歌枕なるべ



きとて、

關守の招くやそれと來て見れば尾花が末に風わた

るなり

薄の句を得たり。

大方はすゝきなりけり秋の山

伊豆相模境もわかず花すゝき

維新の頃までは金紋さき箱の行列整々として、烏毛片鎌

など威勢よく振立てく行きかひし街道の繁昌も、あはれ

物の本にのみ残りて草刈るわらべの小道一筋を除きて、外

は草の生ひ出でぬ處もなく、僅かに行列のおもかけを薄の

穂にとゞめたり。

槍立てて通る人なし花すゝき (糧祭書屋俳話)

「行列のおもかけ」

河東碧梧桐
名は柔五郎
俳人。

明治三十五年
九月

陸氏令閨
陸實(羯南)氏
夫人。陸氏は
當時「日本新
聞」の主筆で
あった。

宮本
醫師。
高濱
名は清。號は
虚子。子規門
下の俳人。

二六 子規の絶筆

河東碧梧桐

十八日の朝の十時頃であつたか、どうも様子が悪いといふ知らせに、胸を躍らせながら早速駆けつけたところ、丁度枕邊には陸氏令閨と妹君とが居られた。

予は病人の左側近くへよつて、「どうかな」といふと、別に返辭もなく、左手を四五度動かしたばかりで、静かにいつものまゝ仰向けに寝て居る。餘り騒々しくは悪いのであらうと、予は口を噤んで、そこに坐りながら、妹君と、醫者のこと、藥のこと、今朝は痰が切れないで困つたこと、宮本へ痰の切れる藥を取りにやつたこと、高濱を呼びにやつたかどうかと

病人の一言

いふことなどを話して居た時に、「高濱も呼びにおやりや」と病人が一言いうた。依つて予は直ぐに陸氏の電話口へ往つて、高濱に大急ぎで來いというて歸つて見ると、妹君は病人の右側で墨を磨つて居られる。



正岡子規

聽て、例の畫板に唐紙の貼付けてあるのを妹君が取つて、病人に渡されるから、何がこの場合に書けるのであらうと不審しながらも、予はい

つも病人の使ひ馴れた軸も穂も細長い筆に、十分墨を含ませて右手に渡すと、病人は左手で板の左下側を持添へ、上は妹君に持たせて、いきなり中央へ、

糸瓜咲て

とすらくくと書きつけた。併し、咲ての二字はかすれて少し書きにくさうにあつたので、こゝで墨をついで、又筆を渡すと、こんどは「糸瓜咲て」より少し下げて、

痰のつまりし

まで、又一息に書かれた字がかすれたので、又墨をつぎながら、次は何と出るかと、暗に好奇心に驅られて板面を注視して居ると、同じぐらゐの高さに、

佛かな

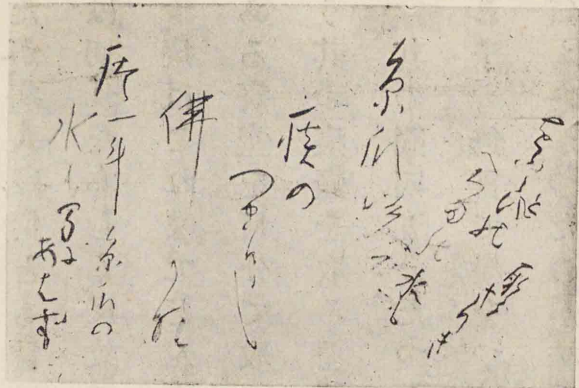
と書かれたので、予は覺えず胸を刺されるやうに感じた。書き終つて、投げるやうに筆を捨てながら、横を向いて、咳を二

三度つゞけざまにした。痰が切れぬので、如何にも苦しさうに見えた。妹君は板を横へ片付けながら、側に坐つて居られたが、病人は何とも言はないで無言である。又、咳が出る。今度は切れたらしく、反故で其の痰を拭きとりながら妹君に渡す。痰はこれまでどんなに苦痛の劇しい時でも、必ず設けてある痰壺を自分で取つて、吐込む例であつたのに、今日はどうも其の痰壺を取る勇氣もないと見える。

其の間四五分たつたと思ふと、無言に前の畫板を取寄せ、予も無言で墨をつける。今度は、左手を畫板に持添へる元氣もなかつたのか、妹君に持たせた儘、前句「佛かな」と書いた其の横へ、

「痰一斗糸瓜の水も」

痰一斗糸瓜の水も



と、水もを別行に認めた、こゝで墨をつぐ。すぐ次へ、

間にあはず

子規と書いて、矢張投捨てるやうに筆を置いた。咳は二三度出る。如何にもせつなさうなので、予は以前に増して動氣が打つて、胸がわくわくして堪らぬ。

無言

又四五分を経てから、無言で板を持たせたので、予も無言で筆を渡す。今度は板の持方が少し具合がわるさうであつ

「をぎひのへちまの」

たが、其の儘少し筋違に、

をぎひのへちまの

と「へちまの」は行をかへて書く。予は墨をこゝでつぎながら、「ぎ」の字の上の方が、「ふ」の字のやうに、其の下の方が「ら」の字の略したものやうに見えるので、「をふらひのへちまの」とは何の事であらうと、聊か怪みながら見て居ると、次を書く前に、自分で「ひの上へ」と書いて、それが「ひの上へ」はひるものやうな印をした。それで始めて「をぎとひの」であると合點した。其のあとは、すぐに「へちまの」の下へ

「水も」

水も

と書いて、

取らざりき
は其の右側へ書流して、例の通り筆を投捨てたが、丁度穂の方が先に落ちたので、白い寢床の上へ少しばかり墨の痕をつけた。

予は筆を片付ける。妹君は板を障子にもたせかけられる。暫くは病人自身も其の字を見て居る様子であつたが、予は此の場合、其の句に向かつて何といふべき考も浮かばなかつた。が、もうこれでお仕舞であるか、紙には書く場處はないやうであるけれども、又書かれはすまいかと、少し心待ちにして硯の側を去る事が出来なかつたが、其の後再び筆を持たうともしなかつた。(子規言行録)

二七 鳩

千家 元 麿

千家元麿
文學者。慶應
義塾大學修
學。

鳩が舞ふ、
鳩が舞ふ。

曲線を畫いた
美しい空に、
白い鳩は十羽餘り群れて、
ゆるやかに輪をかいて舞ふ。
神の使のやうな鳩よ。

ひとの家に飼はれてゐるのか。
畠の上を舞を舞つてゐる。

『清浄な鳩』

清浄な鳩よ。

静かな日だ。

静かさに堪へないやうに、

鳩は舞ひ、

崩れるやうに地に落ちて、

姿が見えなくなる。

神の王宮へ歸つたのか。

鳩よ、幻のやうな鳩よ。

平和の姿

お前の舞ふ姿は、
實に平和だ、實に静かだ。

神の使の鳩よ。

お前は戦争に使はれてくれるな。

お前の姿は平和にこそふさはしい。

美しい鳩よ、

静かな鳩よ。(野天の光り)

鈴木鼓村
音楽及び音楽
史の研究者と
して知られて
居る。

二八 自然の音楽

鈴木 鼓村

野の曲

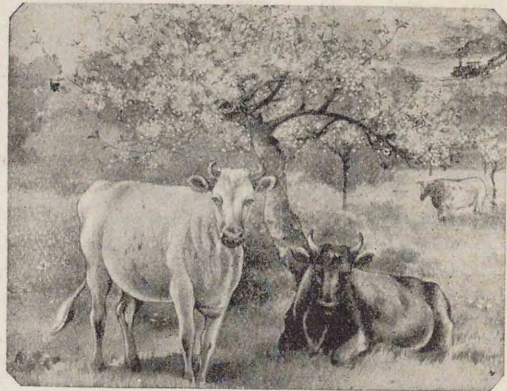
翠濃い丘陵の際に、巨刹の屋根が見えて、揚雲雀の高く囀る日であつた。川尻のせゝらぐ汀に、里の子が根芹を摘んでゐるいさゝ小川の土橋を渡つて、日の光もさゝない藪の中を出かゝると、十戸にも足らぬ草の屋が立並んで、野仕事の間の午下りが朝の如く静かである。

梨・杏などの木立を隔てて、直径丈にも餘る水車が軋つてゐる。山吹・木蓮の蔭から箴の響も傳はつて來る。雞が一聲長閑に鳴渡ると、椿の花がぼとりと落ちる。桃の蔭に牛が鳴く。

野の曲

再びきこえる
幽玄の曲

軽踏たる瀧の
響



瀑の音

瀑の音を現した句で、自分の氣に入つてゐるのは、
あら瀑や満山の若葉皆振ふ

その間、正しき拍子と長閑な旋律とを以て、ひつそりした裡に趣ある曲が繰返される。春の香の沁入るやうな嫩草の中にうづくまつて、暫しこの音に聽入つた。
折柄、雷の如き轟が漸く近づいて、汽車は土手の上を走る。蜿蜒たる列車は長き烟を吐いて過ぎた。暫く破られた幽玄の曲がまた聽きとれる。

と云ふ漱石の句である。如何にも鞆鞆たる瀑の音を聴くやうで、一種雄大な感に打たれる。

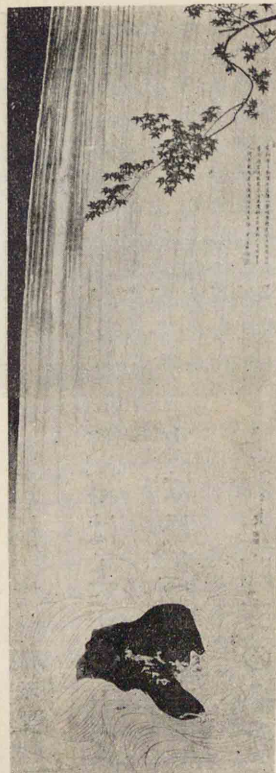
初袷の軽い旅姿で喘ぎく、細い徑でも上つて往くとし

つとりした若

葉の匂が鼻に

満ちて来る。汗

ばんだ肌も冷



りとするので、「もう瀑に近づいたな」と思ふと、どうつと雷のやうな音を連続させて、それが木立や巖石の疎密の加減で、強く聞えたり、また少し弱くなつたりして居るうちに、さつと薄い霧が面を拂つて、つい數歩前に見上げる白簾が現れ、

巖に激して凄じい響を立てる。其のあたりの青葉若葉は揺らぐばかりである。崖の上には赤い躑躅が照つてゐる。薄紅の八鹽の花が翠巒の中に、ほつりく、と模様のやうに咲いてゐる。

こんな光景が自ら想ひ起される。

同じ瀑の音でも、何處か閑寂な感じのするのは、彼の芭蕉

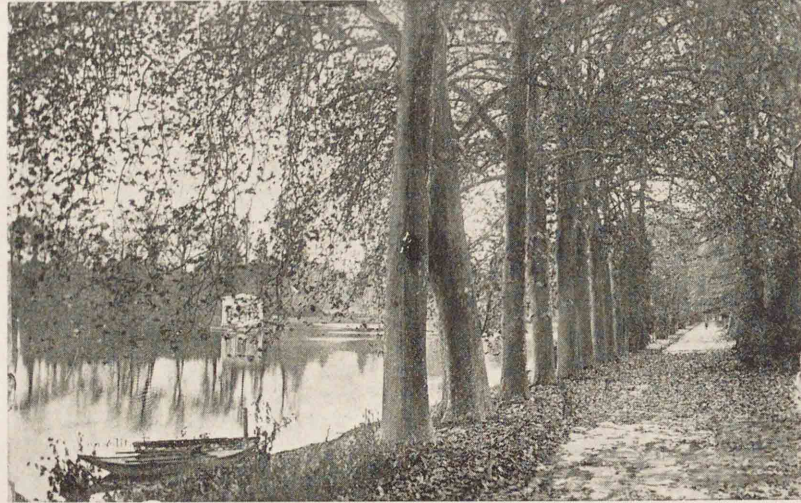
翁の、

ほろく、と山吹散るか瀑の音

といふ句である。

春が段々開けて、山吹の花は瓣の端が白くなつて、風もな

芭蕉翁
姓は松尾、名は忠右衛門宗房、桃青・天軒等の別號がある。俳諧正風の祖。元祿七年歿、年五十一。



並木路

て、不斷の響を傳へてゐる。其の裾には水車もあらう、杉の林もあらう。日は麗かに照つて、背中がほかくするので、路傍の石に腰をかけてゐると、雉子が向の山際で一聲朗かに鳴く。またしても山吹がほろ／＼と散る。瀑は同じ調子で響いて居る。

翁の句はこんな境を聯想させる。(耳の趣味)

○ 若山牧水

こゆ 山越えて入りし古驛こえきの霧のおくに電燈の見ゆ人の聲き

河上肇
法學博士。

「鍵」

ブリュッセル
ベルギー
の首府。
Brussels

二九 鍵の國と障子の國 河上肇

西洋人の精神的乃至物質的生活を何かに纏めて掌の上
に載せて見せろと註文されるならば、私は鍵を出して示さ
うと思ふ。始めてブリュッセルの素人下宿に入つた時、定め
られた自分の部屋を見廻して、私は鍵の多いのに驚いた。戸
をあけて部屋に入ると、其の戸を内から閉ぢる爲に鍵があ
る。北側に窓がある。其の窓に又鍵がある。一度此等の錠を下
したなら、誰も私の部屋に入つて來られぬ事に爲つて居る。
此等の鍵を見て、道理から云へば、私は安心すべきであら
うが、實際は寧ろ薄き不安と淺き危惧に襲はれた戸棚があ

る。勿論其の戸に鍵があり、其の抽斗に鍵がある。洗面臺の下に四段の抽斗がある。一々それにも鍵がある。机にも抽斗がある。それにも亦鍵がある。凡そ開閉の出来るものに、特別の鍵の装置の無いものは全く無いのである。郵便を一つ入れに出る。歸る時には必ず鍵を出して錠をはづさぬと、家の大戸はあかぬのである。夜になると、其の大戸に内から錠を下す。鍵がなくては外からはどうせ開かぬ戸であるが、猶用心の爲に更に錠を下すのだと見える。錠が下りた後は、外から鍵を入れて一回半廻さぬと、戸は開かぬ。鍵の生活に慣れぬ私は、此の大戸の鍵の用法に就いて容易に要領を得ないので、暫くまごついた。同宿のT君は、嘗て鍵を忘れて遂に一夜

ホテルで過ぎた事があると云ふ。

巴里に来て、始めて西洋の旅館に泊つた。私の部屋は戸を締めると、鍵がなければ外からはあけられぬ。それにも拘らず、内から又錠を下す爲に別の鍵が備付けてあつた。

只今の宿は鳥崎藤村君の向隣であつて、同君が讀書の燈は私の窓から坐りながら見られるが、而も同君の部屋にお訪するためには、錠の下りる戸を四度通らねばならぬ。白晝にお訪しても、一度はベルを鳴らして、内から戸をあけて貰はねば、同君の部屋の戸を敲く譯には行かぬ。

私はブリュッセルと巴里を見ただけであるから、俄かに斷言は出来ぬが、恐らく西洋諸國に於ける鍵の數は、人口の

幾倍かに當るだらうと思ふ。聞く所に依れば、此の巴里市の各停車場で、下車及び乗車する者が日に三十三萬人、地下鐵道に乗る者が日に百七十萬人といふが、假に此等の人々が五個宛の鍵を持つて居るとしても、此の巴里市だけで、一日約一千萬の鍵が汽車に乗り降りする譯である。其の外電車に乗り、自轉車に乗り、馬車に乗り、乃至は靴に乗つて歩いて居る鍵を算へ上げたならば、往來して居る鍵だけでも、恐らく半億に達するであらう。實に西洋は鍵の世界である。

西洋は個人主義の國である。それ故部屋を圍むのに厚き煉瓦の壁を以てし、出口に重い戸を設け、戸に丈夫なる錠を下し、蟄居する時は敢へて之を窺ふことを得ざらしめて居

る。如何に親しい間柄の者といつても、他人の室に入るには先づ戸を敲く。すると、内に居る人が「入れ」と應ずる。其の聲を聞くまでは、今ベルで呼ばれた下女と雖も、決して其の戸をあけぬのである。

今此の地に在つて遠く日本を顧みると、日本は實に家族主義の國である。而して日本の家族主義が西洋の個人主義と恐ろしい差異を有するが如く、日本人の住居の様は又大變に西洋人のと相違して居る。錠を下した重い戸の代りに、日本では紙一枚の障子で部屋を圍んで居る。出入自在である。共同主義である。假令一軒の家が五間になつて居ようと、十間になつて居ようと、實は一間の家である。五間・六間乃至

家を持つて居る國民

數十間の室が、離るゝが如く、即くが如くにして、茫然、漠然、自ら一室を成してゐるのが、即ち日本の家である。此の「家」は實に日本獨得のものである。夫婦を始め、家族一般相倚り相信じて一體を作し、其の間一點の祕密をも存せざる所が、日本の「家族」なるものの精神である。而して此の精神を建築で現せば、即ち日本流の家屋になる。錠を下した戸の代りに、紙で張つた障子になる。西洋にも日本流の家屋は造り得られる。併し、例へば此の巴里の眞中に左様な家を造つて見ても、之に住まひ得る巴里人は居ない。西洋人は室を持つて居る。併し西洋には家がない。家を持つて居るのは、世界で唯日本人だけである。——少くとも今日の文明國に於ては、（祖國を顧みて

中村正直
號は敬宇。文學博士。明治二十四年歿、年六十。

三〇 否の一語

中村 正直

人の此の世に處するや、事の次第によりては、否の一語を言ふの勇なかるべからず。何となれば、誘惑の事及び罪惡の事、その始に當りては、甚だ些少なるが如くなれども、その中に陥るに及んでは、遂にその圈套を脱出する能はざるに至る。故に始より毅然として「否」と言ひて之を拒むべし。否、我は之を爲す能はず。と言ふべし。然るに、世人を觀るに、能く此の否の一語を言ふの勇氣あるもの少し。

否の一語を言ふ能はざる一種の人あり。他の心に違ふを怖るゝに由るや、他人の心に順ふを欲するに由るや、確かに

知り難しと雖も、此の人は他人に頼まるゝことを辭せず、或は金錢を貸し、手形に裏書し、或は證人に立ち、遂に之が爲に累を受け、其の身、其の家を傾くるに至るなり。人、當然の時に



中村正直

於て、否の一語を言ふは安全の道なり。蓋し許多の人、否の一語を言ふ能はざるに由りて、其の身、其の家を傾くるに至るなり。否の一語を言ふの勇氣あらざれば、罪惡に地歩を占めらるゝなり。

歡樂の事、我を誘引せんとして、我を試みる時は、直ちに否といふ決心を有せざる可からず。此の決心は徳行をして益

堅固ならしむ。若し始に於て一步を譲り、否といふことを怠らば、自己に信賴するの力、これよりして退き減ずべし。然るに、否の一語を言ふに、始は其の難きを覺え、大いなる勢力を要すれども、久しき後は、自然に勢力増加して容易となる。怠惰、惑溺、其の他諸の悪習の襲撃を防がんには、否の一語より外は有らず。故に曰く、當然の時に於て、否の一語を言ふは、大いなる徳行なりと。(西洋節用論)

夜も未だあけやらぬに、仲間たる者戸をあけ、さてもおびただしく雪のふりたるはといふ聲しけり。亭主聞付け、如何程降りたるぞと問へば、されば深さは五寸程つもりて候も、幅は知れぬと申したり。(醒睡笑)

三一 ことわざ

見やう見眞似。

人は一代、名は末代。

龜の甲より年の功。

一寸の蟲にも五分の魂。

帯に短し、襷に長し。

後悔先に立たず、提灯持後に立たず。

鬼に鐵棒。

金槌の川流れ。

狼が衣を着たやう。

蓼喰ふ蟲もすきく。

旅は道づれ、世は情。

取らぬ狸の皮算用。

藁苞に黄金。

杓子は耳搔にならず。

能ある鷹は爪を隠す。

暖簾に腕押し。

雨だれ石を穿つ。

雨降りて地固る。

七轉び八起き。

石の上にも三年。

三三 三人の時計

長與善郎

甲乙丙の三人の者が、あるところへ行かうと思つて、その時間を相談しました。

「二時半の汽車にしよう。」と、甲が云ひました。

「よろしい。併し今は何時だらう。」と、乙が云ひました。

「二時十分前だ。」と、自分の時計を出して見て、丙が云ひました。

「君の時計は合つてゐるのか。」と、乙が聞きました。

「あゝ、僕の時計は正しい。午砲どに合はせたのだから。」と、丙が答へました。

丙の時計

「いつ合はせたのだ。」と、甲が聞きました。

「三日前だ。」と、丙が答へました。

「それでも、君の時計がおくれる質なら、君の時計は、もう正しくはないだらう。」と、乙が云ひました。

「そんなことはない。僕は僕の時計を信じる。」丙は又きつぱり、かう答へたあとで、甲に聞きました。

「君の時計は何時だ。」

「一時十分過だ。」

「随分進んでゐるね。」と、丙が笑ひました。

「あゝ、僕の時計はあてにならない。」と、甲が云ひました。

「それでも、君は君の時計を、いつ午砲に合はせたのだ。」と、乙

甲の時計

が甲に聞きました。

「昨日だ。」と甲が答へました。

「昨日？それなら、三日前に午砲に合はせた丙の時計よりは、あてになるかも知れないぢやないか。」

「うん。しかし、僕は僕の時計を信じられない。なんだか違つてゐさうな気がする。」と甲が俯向いて答へました。

「そんなあてにならない時計を持つてゐても、仕方がないぢやないか。」と丙が罵つて云ひました。

「僕の時計に合はせ給へ。」

「君のが合つてゐるなら、君の時計に合はせよう。甲は、かう云つて自分の時計を丙の時計に合はせました。

乙の時計

「君の時計は何時だ。」

丙は又乙に聞きました。

「かつきり一時だ。」

「いつ、午砲に合はせたのだ。」

「一昨日だ。」と乙が答へました。

「やはり、進む質だね。」

「いゝや、僕の時計はどちらかといふと、少しおくれる質なのだ。だから多分は一時五分過ぐらゐだらう。」と乙が云ひました。

「そんなことがあるものか。それは違つてゐるよ。」と丙が笑つて云ひました。

「うん。少しは違つてゐるかも知れない。併し大した違は無
い筈だ。こゝから停車場までは、どの位かゝるだらう。」

「二十分あれば十分だ。だから、まだゆつくりしてゐてい
と、丙が云ひました。」

「しかし、今が一時五分過だとすれば、あと二十五分しか
い。のだから、僕は一足先に出掛けるよ。いづれ停車場で會
う。」

乙はかう云つて出て行きました。

「氣の早い奴だ。」

丙と甲とは、かう云つて笑ひました。

しかし、それから暫くたつて、甲と丙とが停車場へ行つた

時、乙は二人に云ひました。

「汽車はもう出てしまつた。僕は間に合つたのだが、君達を
待つてゐたのだ。」

甲と丙とは、驚いて顔を見合はせました。

「それでは、僕の時計は違つてゐたのかな。」と、丙が顔を赤く
して云ひました。

「さうだ。君の時計は二十分後れてゐたのだ。僕の時計は十
分後れてゐた。甲の時計があつてゐたのだ。」

「さうかなあ。」と、甲がぼんやりして云ひました。

「見ると、君が一番利口だつたわけだね。」
と、さうだ。自分を知つてゐるものが一番利口だ。時計は信じ

顔を赤くして
ぼんやりして

ぼんやりして

自分を知る者
信すべきもの
を信する者

るために在るものだ。信じなければ、それは何の役にも立ち
はしない。間違つた時計を持つてゐて、それを信じるのは固
より悪いが、又どんな正しい時計を持つてゐても、それを信
じなければ、間違つた時計を持つてゐるのと同じことだ。又
何にも持たないのと同じことだ。間違つた時計を信じるも
の、正しい時計を信じないものも、共に汽車に乗ることが
出来ない。それは、兩方共馬鹿であるからだ。自分を知つて、信
ずべきものを信じるものだけが、汽車に乗ることが出来る
のだ。」

乙はかう云ひました。(孔子の歸國)

大町桂月

文學者。東京
帝國大學文科
大學卒業。大
正十四年歿。
年五十七。

三三 修養一題

足跡

大町桂月

『直線の足跡』

海水浴に行きたらば、試みに浪打際を歩いて見よ。而して
一二町歩きたらば、ふりかへりて見よ。必ずや御身の足跡は、
あつちへ曲り、こつちへ曲りして、一直線には成り居らざら
ん。若し數人言ひあはせて、直線の足跡を印せんことを競は
ば、われ請ふ、御身に一秘訣を授けん。秘訣と云へば、むづかし
きやうに聞ゆれど、別にむづかしきことは無し。唯前方に
の目的物を定めて、わき眼もふらずに、それに向かつて歩け。
さらば御身の足跡は、直線となりて連らん。

社會を歩むも亦此の如し。心にしかとしたる信念を懷きて、それに向かつて進め。さらば、其の言正し、其の行正し、其の人正し。左支右吾することなくして、正しき路を濶歩することを得。

新編の風潮

外山先生

名は正一、號は山、文學博士。東京帝國大學總長、文部大臣等に歴任。明治三十三年歿、年五十三。

懐ひ起す、二十年前、外山先生の教授を受けしことありしが、同級の學生、凡そ七十人。先生は學生の出席を調ぶるに、學生の名を呼びては、一々じろく、其の顔を見たり。かくて稽古の時間の三分の一は、出席調に費せり。斯くすること凡そ一週間に及びけるが、それより後は一切學生の名を呼ばず、唯學生の顔を見て帳簿に記したり。先生は僅々一週間にし

「名と顔」

て、學生全體の顔と名とを併せて記憶せられたるなり。

事小なるが如くなれど、實は大なり。社會に活動せんと思ふものは、人の名と顔とを記憶して忘れざることが一大要件なり。それも少數ならば何の事もなけれど、業務多端になり、面會する人多くなりては、中々一々記憶しがたきものなり。それが數千萬人の上になりても、數十年の久しきに互りても、一度逢ひたる人は忘れずといふ人は、必ずや一廉の事業を成し得べき資格を有するものなり。昔張巡は二萬人の兵士の顔と名とを併せて記憶し居たりと聞く。われは到底之を能くせず、一室に閉居し、筆を執りて自ら樂む。記して、大いに世に活動せんとする有爲の士の參考に資す。

張巡 唐の忠臣。安祿山の亂に國に殉じた。

然れども唯單に顔と名とのみを併せて記憶せよと云ふに非ず。それ以外何を記憶すべきかは、其の人の智慧次第なり。
（桂月全集）

○
碁をうちけるに、そばより何も知らぬをとこ見て、それあぶない／＼といふをどこがあぶなうござるといひければ、いやこの隅の石が、下へ落ちさうであぶなうござると。

（徳福利）

國木田獨歩
文學者。明治
四十一年歿、
年三十八。

三四 非凡なる凡人

國木田獨歩

僕の子供の時からの友に、桂正作といふ男がある。今年二十四で、今は横濱の或會社に技手として雇はれ、専ら電氣事業に従事して居るが、先づ此の男ほど類の違つた人物はあ
るまいと思はれる。

非凡人ではないけれども、凡人でもない。さりとして偏物でもなく、奇人でもない。非凡なる凡人といふのが、最も適評かと僕は思つて居る。

僕は知れば知るほど、此の男に感心せざるを得ないのである。感心すると言つた所で、秀吉とか、ナポレオンとか、其の

他の天才に感心するのとは違ふので、此の種の人物は千百歳に一人も出るか出ないかであるが、桂正作の如きは平凡なる社會が常に産み出し得る人物である。又平凡なる社會が常に要求する人物である。であるから、桂のやうな人物が一人殖えれば、それだけ社會が幸福なのである。僕の桂に感心するのは、此の意味に於てである。又僕が桂をば非凡なる凡人と評するのも此の故である。

十僕等がまだ小學校に通つて居る時分であつた或日、其の日は日曜で、僕は四五人の學校仲間と小松山へ出かけ、戦争の眞似を爲て、我こそ秀吉だとか、義経だとか、十三四にもなりながら、馬鹿げた腕白を働いて、大暴れに暴れ、遂に喉が渴

いて來たので、山の直ぐ麓にある桂正作の家の庭へ、裏山からどや／＼と駈下りて、案内も請はず、いきなり井戸端に集つて、我勝ちに水を汲んで飲んだ。

すると、二階の窓から正作が顔を出して、此方を見て居る。僕はこれを見るや、

「來ないか。」と呼んだ。けれども、いつにない眞面目嗅つた顔つきをして、頭を横に振つた。腕白の方でも人並の事を爲てのける桂正作、不思議と出て來ないので、僕等も強ひては誘はず、其の儘、また山に駈登つてしまつた。

騒ぎ疲れて、みんなちり／＼に我が家へと歸り去り、僕は二人桂の宅に立寄つた。黙つて二階へ上つて見ると、正作は

テーブルに向かひ、椅子に腰をかけて、一心になつて何か読んで居る。

僕は先づ此のテーブルと椅子の事から説明しようと思ふ。テーブルといふのは、粗末な日本机の兩脚の下に繼臺をした品物で、椅子とは、足繼の下に箱を置いただけのこと。けれども正作は眞面目で此の工夫をしたので、學校の先生が、日本流の机は衛生に悪いと言つた言葉を、なる程と感心して直ぐこれだけの事を實行したのである。其のテーブルの上には、教科書その他の書籍を重ね、筆墨の類まで決して亂雑に置いてはない。で、彼は日曜の好い天氣なるにも關らず、何の本か脇目もふらないで読んで居るので、僕は其の傍に

行つて、

「何を讀んで居るのだ。」と言ひながら見ると、それは洋綴の厚い本である。

「西國立志編だ。」と答へて顔を上げ、僕を見たその眼ざしは、まだ夢の醒めない人のやうで、心は猶書籍の中にあるらしい。

「面白いかね。」

「うん、面白い。」

「日本外史と何方が面白い。」と僕が問ふと、桂は微笑を含んで、漸く我に復り、何時もの元氣のよい聲で、

「それや此の方が面白いよ。日本外史とは物が違ふ。昨夜僕

「まだ夢の醒めない人のやう」

は梅田先生の所から借りて来てから読みはじめたけれど、面白うて止められない。僕はどうしても一冊買ふのだ。と言つて、嬉しくつてたまらない風であつた。

其の後、桂は遂に西國立志編を一冊買求めたが、其の本といふのは、粗末至極な洋綴で、一度讀了らない中に、既にばらばらになりさうな代物故、彼はこれを丈夫な麻絲で綴ぢなほした。

此の時が桂も僕も數へ年の十四歳。桂は一度この本の甘味を知つて以來は、何度此の書を讀んだか知れない。殆ど誦するほど熟讀したらしい。そして今日と雖も、常にこれを座右に置いて居る。

實に桂正作は活きた西國立志編と言つてよからう。桂自身でもさう言つて居る。

「若し僕が西國立志編を讀まなかつたらどうであつたらう。僕の今日あるのは、全く此の本のお蔭だ。」と。

けれども西國立志編を讀んだ者は、洋の東西を問はず、幾百萬あるか知れないが、桂正作のやうに、余を作りし者は此の書なり。」と明言し得る者は果して幾人あるだらう。

天が與へた才能からいふと、桂は中位の人たるに過ぎない。學校に於ける成績も中等で、同級生の中、彼よりも優れた少年は幾らも居た。又、彼はかなりの腕白者で、僕等と一緒に随分暴れたものである。それで、學校に於ても、郷黨にあつて

も、特に人から注目せられる少年ではなかつた。けれども、天の與へた性質から言ふと、彼は率直で、單純で、そして何處かに壓すべからざる勇猛心を持つて居た。勇猛心といふよりも、敢爲の氣象と言つた方がよからう。即ち一轉すれば冒險心となり、再轉すれば霸氣となるのである。現に彼の父は霸氣の爲に失敗し、兄は冒險の爲に死んだ。けれども正作は西國立志編のお蔭で、此の氣象に訓練を加へ、堅實なる有爲の精神としたのである。

彼の父は尋常の人ではなかつた。昔の武士で、維新の戦争にも出て一廉の功をも立てたのである。體格は骨太の頑丈な作り、其の顔は、皆長く切れ、鼻高く、一見して堂々たる容貌。

氣象も武人氣質で、容易に物に屈しない。若し武人の儘で押通したならば、今日は人にも知られた將軍になつて居たかも知れないが、彼は維新の戦争から歸ると直ぐ農に隠れてしまつた。隠れたといふよりも出直したのである。そして當時流行の「殖産」といふことの爲に遂に破産してしまつた。

桂の屋敷は、もと町に在つたのを、家運の傾くと共に、之を小松山の下に運んで建直したので、その時も、僕の父などは、「あれほどの立派な屋敷を打壊さないで、その儘人に譲り、其の金で別に建てたらよからう。」と言つて居た。けれども桂正作の父の氣象は此の一事でも解つて居る。小松山の麓に移つて以來は、正作の父が純粹の百姓になつて働いて居るの

を、僕は屢、見た。

であるから、正作が西國立志編を讀み始めた頃は、其の家政は、餘程困難であつたに違ない。けれども其の家庭には、何時も多少の霸氣が浮動して居たといふ證據には、或日正作が僕に向かひ、今から何箇月とかすると、蛤を澤山御馳走するといふから、「何故だ」と聞くと、「父が蛤の養殖事業を始め、種を取寄せて濱に下したから、遠からず此の附近は蛤が非常に捕れるやうになる。」と答へた。これで家庭の様子も想像することが出来るのである。

父の氣象を露骨に受繼いで、正作の兄は十六の歳に家を飛出して、音信不通、行方知れずになつてしまつた。布哇に行

つたとも言ひ、南米に行つたとも噂せられたが、實際の事は誰も知らなかつた。

小學校を卒業すると、僕は縣下の中學校に入つてしまひ、暫く故郷を離れたが、正作は家の都合でさういふ譯に行かず、周旋する人があつて某銀行に出ることになり、僅かの給料で某町まで二里の道のりを朝夕往復することになつた。間もなく冬期休暇となり、僕は歸省の途に就いて、車で故郷近く來ると、小さな坂がある、其の麓で車を下り、手荷物を車夫に託し、自分はステッキ一本で坂を登りかけると、僕の五六間先に行く少年がある。古ぼけたトンビを着て、手に古ぼけた手提鞆を持つて、靜かに坂を登りつゝある。其の姿が

桂正作に似て居るので、

「桂君ぢやないか。」と聲を掛けた。後を振り向いて破顔一笑したのは、正しく正作。立止つて僕を待ち、

「冬期休暇になつたのか。」

「どうだ、君は銀行に通つてゐるか。」

「うん、通つてゐるけれども、少しも面白くない。」

「どうしてや。」と僕は驚いて聞いた。

「どうしてと言ふ譯もないが、君なら三日と辛棒が出来ないだらうと思ふ。第一、僕は銀行業からして、僕の目的ぢやないのなもの。」

二人は話しながら歩いた、車夫のみ先へやり。

「何が君の目的だ。」

「工業で身を立てる決心だ。」と言つて、正作は微笑し、「僕は毎日此の道を往復しながら色々考へたが、發明に越す大事業はないと思ふ。」

ワットやスチブソンやエヂソンは、彼が理想の英雄である。そして西國立志編は彼の聖書である。

僕の黙つて頷くを見て、正作は更に言葉をつぎ、

「だから、僕は來春は東京へ出ようかと思つて居る。」

「東京へ？」と驚いて問返した。

「さうさ、東京へ。旅費はもう出來たが、向へ行つて三月ばかりを食へるだけの金を持つて居なければ困るだらうと思

ワット
イギリス
の人。蒸
氣機關の
發明者。

スチブソン
イギリス
の人。蒸
氣機關の
完成者。

エヂソン
アメリカ
の人。電
氣機械の
發明者。

Edison

ふ。だから僕は父に頼んで、來年の三月までの給料は全部貰ふことにした。四月早々に立てるだらうと思ふ。」

桂正作の計畫は總べて此の筆法である。彼は随分少年に有りがちな空想を描くけれども、計畫を立てて之を實行する上に就いては、少年の時から今日に至るまで、少しも變らず、一定の順序を立てて、一步々と着々實行して、遂に目的通りに成就するのである。無論これは西國立志編の感化でもあらう。けれども一つには、彼の性情が祖父に似て居るからだと思はれる。彼の祖父の非凡な人であつた事を今こゝで詳しく話すことは出來ないが、其の一つを言へば、眞書太閤記三百卷を寫すに十年計畫を立てて、遂に見事寫し終つ

たことがある。僕も桂の家でこれを實見したが、今でも其の氣根の大いなるに驚いて居る。正作は確かに此の祖父の血を受けたに違ない。若しくは此の祖父の感化を受けただらうと思ふ。

途上種々の話で、吾々二人は夕暮に歸宅し、其の後、僕は毎日のやうに桂に遇つて、互に將來の大望を語り合つた。冬期休暇が終り、愈僕は中學校の寄宿舎に歸るべく故郷を出立する前の晩、正作が訪ねて來た。そして言ふには、「今度會ふのは東京だらう。三四年は歸郷しない積りだから」と。僕も其の積りで正作に離別を告げた。

明治二十七年の春、桂は計畫の通りに上京し、東京から二

三度手紙をよこしたけれど、何時も無事を知らせるばかりで、別に着京後の様子は告げない。又、故郷の者も、誰もどうして正作が暮して居るか知らない。父母すら知らない。唯何人も疑はないことが一つあつた。曰く、桂正作は何等かの計畫を立てて、其の目的に向かつて着々歩を進めて居るだらうといふ事實である。

僕は三十年の春上京した。そして宿所が定ると、早速築地何町何番地、何の某方といふ桂の住所を訪ねた。此の時二人は既に十九歳。

午後三時頃であつた。僕は築地何町を隅から隅まで捜して、漸くのこと桂の住家を捜し當てた。容易に分らぬも道

理とある横町の貧しげな家ばかり並んで居る中に挟まつて、九尺間口の二階屋、其の二階が「活ける西國立志編君」の巢である。

「桂君といふ人が貴方の處に居ますか。」

「へい、いらつしやいます。あの書生さんでせう。とのお神さんの挨拶、聲を聞きつけて、みしくと二階から下りて来て、「やあ」と現れたのが、一別以來三年會はなんだ桂正作である。足も立てられないやうな汚い畳を二三枚歩いて、狭い急な階子段を登り、通された座敷は六畳敷、煤けた天井が低く頭を壓し、畳も黒く、壁も黒い。けれども黒くないものがある。それは書籍。」

桂ほど書籍を大切にする者はない。彼は如何なる書物でも、決して机の上や、座敷の眞中に放擲するやうなことはない。かう言ふと、桂は書籍ばかりを大切にすることなどはしない。必ずしもさうではない。彼は身のまはりのもの總べてを大事にする。

見ると、机もかなり立派、本箱もさまで黒くない。彼は其の必要品を粗略にするほど、東洋豪傑風の美點も悪弊も受けて居ない。今の流行語で言ふと、彼は西國立志編の感化を受けただけに頗るハイカラ的である。今にして思ふ、僕はハイカラの精神の我が桂正作を支配したことを皇天に感謝する。

机の上を見ると、教科用の書籍やその他が、例の如く整然として重ねてある。其の他周囲の物總べてが、皆其の處を得てきちんとして居る。

室の下部にして暗憺たるを憂ふる勿れ。桂正作は其の主義と其の性情とに依つて、總べてこれ等の黒く暗憺たるものをば化して、純潔にして高貴、感歎すべく畏敬すべきものと爲して居るのである。

彼は、例の如く、最も快活に胸臆を開いて語つた。僕の問ふがまに、上京後の彼の生活をば、恥ぢもせず、誇りもせず、平易に、率直に、詳しく話して聞かせた。彼ほど虚榮心の少ない男は珍らしい。其の境遇に處し、其の信ずる處を行つて、それ

で満足し、安心し、そして勉強して居る。彼は決して自分と他人とを比較しない。自分は自分だけのことを爲して、運命に安んじて、そして運命を開拓しつゝ進んで行く。

一別以來、正作の爲したことを聞くと、實にこの通りである。僕は聞いて居る中にも、益、彼を尊敬する念を禁じ得なかつた。

彼は計畫通り、三箇月の糧を蓄へて上京したけれども、坐して之を食ふ男ではなかつた。何が面白い職を得たいものと、先づ東京中を足に任せて、經巡り歩いた。そして思ひついたのは新聞賣と砂書き。九段の公園で砂書きの翁を見て、彼は直ぐにこれと物語り、事情を明して弟子入を頼み、それ

より二三日の間稽古をして、間もなく大道の傍に坐り、一錢五厘時には二錢を投げて貰つて出鱈目を書き、幾錢かつつの収入を得た。

或日、彼は客のない儘に、自分で勝手なことを書いては消し、消しては書いて、ワット・ステブソンなどといふ名を書いて居ると、八歳ばかりの男の兒を連れた衣装（かみ）の良い婦人が前に立つた。ワットと子供が讀んで、母さま、ワットとは何のこと？と聞いた。桂は顔を舉げて、子供に解り易いやうに此の大發明家のことを話して聞かせ、坊様も大きくなつたらこんな豪い人におなりなさいよ。と言つた。さうすると婦人が、失禮ですけれど。と言ひつゝ、二十錢銀貨を手渡しして

立去つた。

「罪のない微笑」

「僕はその銀貨を使はないで未だ持つて居る。」と正作は言つて、罪のない微笑を漏らした。

彼はかく労働して居る間、其の宿所は木賃宿。夜は神田の夜學校に行つて専ら數學を學んで居たのである。

日清の間が切迫して來ると彼は直ぐに新聞賣になり、號外で意外の金を儲けた。かくて其の歳も暮れ、二十八年の春になつて、彼は首尾よく工手學校の夜學部に入學し得たのである。

且問ひ、且聽いて居る中に、夕暮近くなつた。

「飯を食ひに行かう！」と桂は突然言つて、机の抽斗から手

早く墓口を取出して懷へ入れた。

「何處へ？」と僕は驚いて訊ねた。

「飯屋へさ。」と言つて、正作は立ちかけたので、

「いや、飯なら僕は下宿へ歸つて食ふから、心配しない方がいいよ。」

「まあ、そんなことを言はないで、一緒に食ひ給へな。そして今夜は此處へ泊り給へ。まだ話が澤山残つて居る。」

僕も其の意に従ひ、二人して其の家を出た。路の二三町も歩いたが、桂は其の間も愉快に話しながら、國元のことなどを聽き、今年の中に一度故郷に歸りたいなどと言つて居た。けれども、僕は桂の生活の模様から察して、三百里外へ往復

することの、到底言ふべくして行ふべからざるを思ひ、別に氣にも留めず、歸れたら一度歸つて父母を見舞ひ給へぐらゐの軽い挨拶を爲て置いた。

「繩暖簾」

「此處だ！」と言つて、桂は先に立つて繩暖簾を潜つた。僕は喫驚して暫時ためらつて居ると、内から、

「おい君！」と呼んだ。仕方が無いから入ると、桂は程よき場處に陣取つて、笑みを含んで此方を見て居る。見まはずと、桂の外に四五名の労働者らしい男が居て、長い食卓に着いて飯を食ふ者、酒を飲む者、殊の外靜肅である。二人差向ひで卓に倚ると、

「僕は三度々々此處で飯を食ふのだ。」と桂は平氣で言つて、

「君は何を食ふか。何でも出来るよ。」

「何でもいゝ、僕は。」

「さうか、それでは。」と桂は女中に向かつて二三品命じたが、其の名は符牒のやうで僕には解らなかつた。暫くすると、刺身、煮肴、煮、汁などが出て、飯を盛つた茶碗に、香の物。

桂は旨さうに食ひ始めたが、僕は何となく汚らしい氣がして食ふ氣にならなかつたのを、無理に食ひ始めて居ると、思はず涙がこみ上げて來た。卒然僕は思うたのだ。あゝこの飯は、この有爲なる、勤勉なる、獨立自活して自ら教育しつゝある青年が、労働して儲け得た金で、心ばかりの馳走をしてくれる好意だ。それを何ぞや不味さうに食ふとは。桂は此處

で三度の食事をするではないか。これを厭々ながら食ふ自分分は、彼の竹馬の友と言はれようかと。さう思ふと、僕は思はず涙を呑んだのである。そして僕は急に胸がすがくしくなつて、桂と共に旨く食事をして、繩暖簾を出た。

其の夜二人で薄い布團に一緒に寝て、夜の更けるのも知らず、小さな豆ランプの覺束ない光の下で、故郷の事や、他の友の事や、將來の望を語り合つた事は、僕は今でも想ひ起すと、楽しい懐かしい其の夜の様が眼の先に浮かんで来る。

其の後、桂と僕とは互に往來して居たが、早くも其の年の夏期休暇が來た。すると一日、桂が僕の下宿に來て、

「僕は故郷に歸つて來ようかと思ふ。實はもう決めて居る

のだ。」といふ意外な言葉。

「それはいゝけれども君……」と、僕は直ぐ旅費等の事を心配して口を開くと、

「實は金は出來て居るのだ。三十圓ばかり貯金して居るから、往復の旅費と土産物とで二十圓あつたらよからうと思ふ。三十圓みんな使つてしまふと、後で困るからね。」といふのを聞いて、僕は今更ながら彼の用意のほどに感じ入つた。彼の話に依ると、二年前から既に歸省の計畫を立てて、其の積りで貯金したとのこと。

其處で僕も大いに歡んで、彼の歸國を送つた。彼は二年間の貯蓄の三分の二を平氣で擲つて、錦繪を買ひ、反物を買ひ、

母や弟や、親戚の女子供を喜ばすべく、欣々然として新橋を立つた。

翌三十一年にめでたく學校を卒業し、電氣部の技手として横濱の會社に給料十二圓で雇はれた。其の後、今日まで五年になる。其の間彼は何をしたか。たゞ其の職分を忠實に勤めただけか。さうではない。彼は大いなる事を爲て居る。

彼には弟が二人あつて、二人とも彼の兄、逃亡した兄に似て、手に合はない突飛者。一人を五郎と云ひ、一人を荒雄といふ。五郎は正作が横濱の會社に出たと聞くと、國元を飛出して東京に來た。正作は五郎の爲に色々奔走して或は商店に入れ、或は家僕としたけれど、五郎は到る處で失敗し、到る處

を逃出してしまふ。けれども正作は根氣よく世話をして居たが、遂に五郎を自分の側に置き、種々訓戒を加へ、西國立志編を繰返して讀ませ、そして工手學校に入れてしまつた。僅かの給料で、自ら食ひ、弟を養ひ、三年の間、辛苦に辛苦を重ねた結果は、三十四年に至つて現れ、五郎は技手となつて、今は東京芝區の某會社に雇はれ、眞面目に勤勞して居るのである。荒雄も亦國を飛出した。今は正作と五郎と二人で、此の弟の處置に苦心して居る。

今年の春であつた。夕暮に僕は横濱野毛町に桂を訪ねると、宿の者が「桂さんはまだ會社です。」といふから、會社の様子も見たく、其の足で訪うて見た。

桂の仕事をして居る場處に行つて見ると、僕は電氣の事を詳しく知らないから十分の説明は出来ないが、一本の太い鐵柱を擁して、數人の人が立つて居て、正作は一人其の鐵柱の周圍を幾度となく廻つて、熱心に何事か爲て居る。最早電燈が點いて、白晝の如く此の一群の人々を照らして居る。人々は黙々として正作の爲るところを見て居る。器械に狂ひの生じたのを、正作が見分して修繕して居るのらしい。

桂の顔、様子！―彼は無人の地に居て、我を忘れ、世界を忘れ、身も魂も今其の爲しつゝある仕事に打込んで居る。僕は桂の容貌のかくまでに眞面目なのを見たことが無い。見て居る中に、僕は一種の莊嚴な感に打たれた。(獨歩全集)

三五 アイソップより

蟹の親子

蟹の婆さんが息子に向かつて、「何だつてお前は、そんな風に横ばひに這つて歩くのだね。眞直に歩くものですよ。」と言ふと、若い蟹は答へて、「かあさん、ぢやあ眞直に歩いて見せておくれ、わたしもそのとほりにやつて見るから。そこで蟹の婆さんは一所懸命、眞直に歩いて見せよ、うとしたが、だめだつた。そして息子ばかり間違つてゐると言つて責めるのは悪かつたと悟つた。

冬の天氣のよい日に、蟻達がせつせと、長雨にしめつた貯への穀物を乾かしてゐると、そこへ瘦衰へた蟋蟀が来て、食物を何でも恵んで下さいと頼んだ。ほんたうにわたしはかつえて死にさうなんですよ。」と蟋蟀は言つた。

蟻達は自分達の主義には反くけれど、仕方なしに、しばらく仕事の手を休めて、蟋蟀の相手をした。ぢやあ聞くが、お前さん、此の夏は一體何をしてゐなかつたね。此の冬の用意に食物を集めては置かなかつたのですか。」

「實は。」と蟋蟀は答へた。「わたしはあんまり歌ばかりうたつてゐたものですから、外の事をする暇がなかつたのです。」
「お前さん、夏の間歌をうたつて暮したと言ふのなら、此の冬

「實は……」

「相變らず仕事」

はまあ踊ををどつて暮するより外に仕方はあるまいね。」かう蟻は答へて、笑ひながら、相變らず仕事にかゝつた。

樵夫と水神

樵夫が河畔で樹を伐つてゐたが、斧を振上げる手先がくるつて、思はず手を放すと、斧は河の中へ飛込んでしまつた。樵夫は河縁に立つて、斧のなくなつたことを嘆いてゐると、水の神様が現れて、何を悲んでゐると言つて尋ねた。そして譯を聽くと、大層氣の毒がつて、早速水の中へ斧を取りに行つてくれたが、やがて黄金の斧を持つて来て、此ではないかと聽いた。樵夫がそれではないと言ふと、又水の中に潜つて、今度は銀の斧を持つて来て、これでもないかと聽いた。

「黄金の斧」

「銀の斧」

え、それでもございませぬ。」と樵夫は答へたので、もう一度神様は水の中に潜つた。そしてなくなつた斧を持つて出て來た。樵夫は品物が戻つたので大よろこび、夢中になつて御禮を言つた。神様は樵夫の正直なのを大層感心されて、外の金と銀との二本の斧をも褒美にくれた。



樵夫が歸つて、此の話を仲間の者にすると、其の中で、友達の仕合せを羨ましく思つた男が、自分も一番運だめしをや

「それです、それです」

つて見ようと思ひついた。そこでわざ／＼河畔へ出かけて行つて、わざと斧を水の中へ落した。神様は前のやうに現れて、斧を落した話を聴くと、すぐ中に潜つて、やはり黄金の斧を持つて上つて來た。そして、「此はお前のか」とも何とも言はないうちに、慾ばりの樵夫は、「それです、それです」と叫びながら、手を延ばしてそれを取らうとした。けれども、どつこい、神様は此奴の不正直を憎んで、決して黄金の斧をやらなればかりか、水の中へ落した斧までも取上げてしまつた。

楠山正雄
早稻田大學出
身

(楠山正雄譯イソップ物語)

石川啄木
名は一。明治
四十五年歿、
年二十七。

三六 短歌抄

毬

石川 啄木

その昔小學校の桎屋根に我が投げし毬いかになりけ
ん
なつかしき冬の朝かな湯を飲めば湯氣がやはらかに
顔にかゝれり
痛む齒をおさへつゝ日が赤々と冬の靄の中昇るを見
たり
あきれたる母の言葉に氣がつけば茶碗を箸もてたゝ
きてありき

力なく病みし頃より口すこし開きて眠るが癖となり
にき
顔と聲そのみ昔に變らざる友にも會ひき國のはて
にて
取出でし去年の裕のなつかしき匂身に沁む初秋のあ
さ
故もなく憎みし友といつしかに親しくなりて秋も暮
れゆく
一晚に咲かせてみんと梅の鉢を火にあぶりしが咲か
ざりしかな (啄木全集)

土岐哀果
名は善廣。早
稲田大學出
身。

炎 天

土 岐 哀 果

汗みどろの顔をふりむけて炎天の荷車ひきが我をば
見たり
ゆらくこの指に燃ゆる燐寸の火のおもしろきか
も冬の日なたに
こそくと岩にかくれし蟹のやつまつたく岩になれ
りしごとし
二月堂みくじをふれば鐵の筒の音おもたくもしづか
にさびし
あたらしき土のにほひの明るさよ公園に来て春を感
ずる

日曜の街に見かけぬあの男もいつか中尉になりにつ
るかな
うしろより「わ」とおどせしに先方のおどろかざりしご
とき寂しさ
公園の水まき車しやといきなりわれ愕かせし秋のゆ
ふぐれ
わが言ふを聞きかへされしうるささにちつとだまれ
ば秋風の吹く (土岐哀果集)

三七 至 情

天杯御下賜

母上様、おめでたう存じます。遙かに御祝ひ申します。御大禮に就いて八十歳以上の高齢者に天杯御下賜の御沙汰のあるといふことが新聞紙上に傳へられますと、私は飛立つやうに喜びました。あなたも今年は八十歳、必ず御沙汰には洩れられまいと、取敢へず兄様に御悦を申し上げて置きました。すると、兄様の御返事に、満八十歳に六個月不足するため、残念ながら選定に洩れられたとありました。私は落膽してしまひました。ところが、翌朝の新聞に數へ年で宜しいか

「天杯御下賜

「私の力」

ら調べ直せとの恩命があつたといふ記事が出たのを見まして、私は全く蘇生の思を致しました。

蘇生と申せば、私は想ひ出します。一昨年夏、あなたが九死一生の御大患にお罹りになつた時、私はあなたの許に駈附けて、あなたの枕に取りついて、「お母様、あなたは私の力で。」と無我夢中に叫びました。其の聲が昏睡状態のあなたの耳に響いて、此の皺くちやの老婆を、子なればこそお前は力とも思つて居るか、それから御心の中に再生を氏神様に御祈願になり、奮發して薬も召上り、お粥もお啜りになり、そしてあれほどの大患から御回復なさつたと、斯う後日あなたから承りました。私は彼の刹那、何と申し上げたか記憶は

御座いませんが、併し母上様今もあなたは私の力ですよ。
ふる里に老いたる母のいますなりいたくな吹きそ

秋の夕風

子の至情です。

あなたは片田舎に名もなく御暮しになつてゐても、陛下の御慈みの露はかゝりました。愛撫の御手はあなたの御頭に及びました。私は感涙に咽びました。それと共に慙汗は背を濕すのです。これ迄の永い間に、私は葉書一枚で済むものに御機嫌を御伺することを怠り、十分で事足るのに、多忙に口を藉りて御音信を缺いた事が、どれだけあつたでせう。そんな時でも、あなたは唯、いやな夢を見たが、達者で暮してゐる

か。と御尋ね下さいました。何といふ不孝でせう。今度といふ今度、始めて私は親に事へる道に目が覺めました。どうぞ、行末長く御達者でゐて下さいませ。あなたは私の力です。私の生命です。

別封、少額ながら御祝に差上げます。一部で氏神様に御神酒を上げて下さいませ。その餘で、御友達や御近付の方々に御祝に一杯差上げて、そして陛下の萬歳を御祝ひ下さいませ。

御大禮の前々日。(八波則吉の文に據る)

五十嵐力
早稻田大學教
授。文學博士。

三八 伊勢參宮

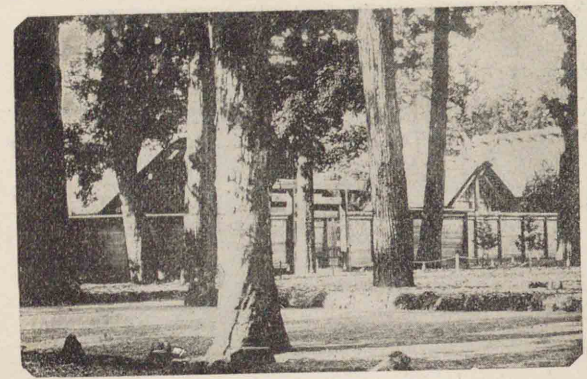
五十嵐力

俄かに參宮を思ひ立ち、昨七日の夕八時に東京を立つて、今朝十時に山田に着きました。まづ外宮を拜んで、次に内宮を拜みました。兩宮の神々しさ、殊に内宮の畏さは言語に盡くせません。五十鈴川の清き流に、水底の小鮎の數を讀みつつ、恭しく嗽いで、それから頭上の木の枝に猿の遊ぶのを見、名も知らぬ鳥の奥深く啼く音に耳を澄ましつゝ、綠青色の苔にさびた神杉の太い幹が天を支へる柱の様に立並んで居る間を辿つて、暫く進むと、やがて木立の奥、塀の彼方に千木、堅魚木の金色が拜まれます。更に進んで塀の内に入ると、

五十鈴の清流

「白木の御宮」

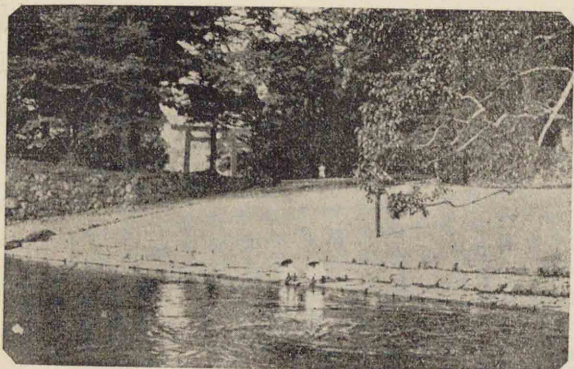
かたじけなさ
何事のおはし
ますかは知ら
ねどもかたじ
けなさに涙こ
ぼるゝ。



外 宮

正面の御門には、白布の垂幕が長く地に曳いて、靜かにそよ風に揺られ、其の奥に立つた神杉に護られて、御白石のびつしりと敷きつめられた間に、神々しい白木の御宮が拜まれます。私はまづお白幕の手前の石段の下に跪いて、小さき祈を捧げました。而して傍に並んでゐた老爺老婆が拍手を打つては、溜息まじりに高聲の祈願を繰返すのに聞入りながら、現の間に、西行法師が忝さに涙をこぼして額づいた、小さい敬虔な姿を思ひ浮かべました。

直き清き強き心をあらはしてすくく立てりたふ
と神杉



五 十 鈴 川

太廟は「單純」といふ者の偉大さを
極度に表現したやうに拜まれます。
而して此の御社の神杉は、樹木の神
神しさを極度に現した者のやうに
思はれます。

私共は内宮の御後の神杉の根方
から、一片の苔を採つて、之を押戴い
て懐にし、御手洗川に口すゝいで、折
しも聞える笙篳篥の幽寂な雅樂の音に送られて、此の神境

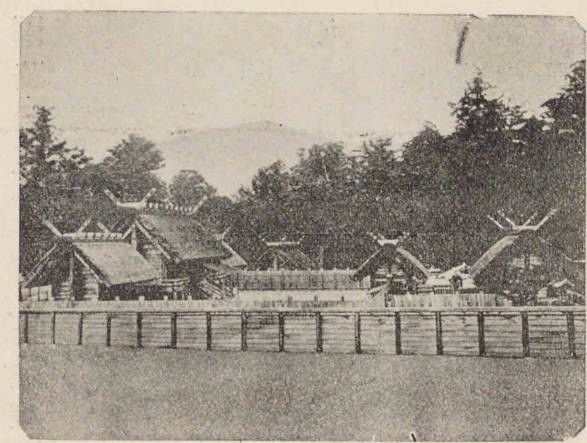
を辭しました。而して顧みく、宇治橋を渡り、車を命じて田
圃路の五十九町を志摩境の名山朝熊岳に走らせました。
御社のうしろの御門をろがみて一かけの苔をいた
だき歸る

神路山の御蔭を浴び、御裳濯川の流に肥された田圃路を
車に揺られながら、私は此の神境が大神の大御心に叶つた
謂れを考へました。大神宮儀式帳に、

度會の國は朝日の來向かふ國、夕日の來向かふ國、浪の音
聞かぬ國、風の音聞かぬ國と、弓矢鞆の音聞かぬ國と、大御
意鎮ります國と悦び給ひて、大宮定めまつりき。

とあるを見れば、第一には山水の景色の類なさを愛でさせ

たのであらう、第二には地勢、氣候、風土のうるはしさを愛で
させられたのであらう、第三には此の土地に永久なる平和



じて居る中に、いつか朝熊岳の麓に着きました。(我が書翰)

の可能性がある事を愛でさせら
れたのであらう、最後には一切の
消極的煩累に煩はされずして、皇
御孫に率ゐられる大和民族の積
極的・光明的發展を見そなはずに
都合のよい、氣の落ちつく境と思
はせられたのであらう、などと考
へつゝ、折々車夫の饒舌に氣を轉

沼波瓊音
名は武夫。東
京帝國大學文
科大學出身。
第一高等學校
教授。

三九 一月の日記

沼波 瓊音

一月二日。雪。

冬になり、始めて降るを初雪といへど、ともすれば、年改り
てより始めて降るにもいふといふ人あり。今日の雪は何れ
よりしても動かぬ初雪なり。

夜に入り、雪大いに降る。電車の頭燈ヘッドライトに雪の
巴と狂ふさま美し。

三日。今宵盆栽の梅一輪開く。

六日。今は日曜を知らぬ身なり。出初式の

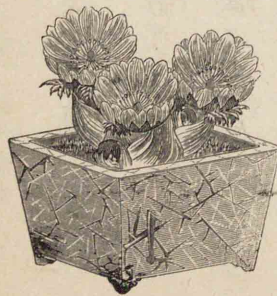
半鐘朝靄を破りて響く。牛込に用ありて行く。途にて電燈會



社の工夫、電線にかゝりたる紙鳶を取除くに忙はしきを見る。

八日。早朝より陸軍始の觀兵式を見に行く。余は從來總べて儀式といふものに趣味を持たざりしが、今日始めて觀兵式を見て、胸に一種言ふべからざる御稜威の韻ひんぎとも名づくべき感を起し、儀式なるものの捨て難きをつくゞと知りたり。

九日。筒袖の内儀が水道の栓をひねりながら、子供の毬を投げて居るを見て、「金ちやん、又ベースマリーですか。」といふを聞く。
十日。鶯また庭に来る。



陸放翁
名は游。宋の
詩人。

十三日。机上の福壽草三つ揃うて開く。
愛らしき花なり。

十六日。藪入なり、晴渡りたる空に閻魔堂の鐘絶間なく鳴響く。西洋の日曜の朝は此の様なるものかと思ふ。

二十九日。友來る。余いつの間にか眠りて、その歸りしを知らず。まさにこれ陸放翁の須臾客去、主人覺、一半西牕無夕陽。

庵の梅よんどころなく咲きにけり
朝日さす弓師が店や福壽草

一茶
燕村

四〇 兎 狩

徳 富 蘆 花

今思うても愉快だ。

收穫が済む。霜が降る。裏山の楓が染まると、兎狩の季節がそろく、始る。繕ひに遣つてあつた網も出来て来る。何日は兎狩と云ふ貼札が出る。脚絆草鞋の用意に僕等はいそくとして何も手に着かぬ。炊事番は夜半に起きて握飯を拵へる。皆が結束して塾の庭に勢揃する頃は、もう午前の三時過でもあらう。有明の月は白く冴えて居る。三たび関の聲を揚げて、月影を踏んで、行く所は東か西か。近くて一二里、遠くて四五里。大人組は、網をかついで、高らかに詩を吟じて行く。僕

有明の月の光

等は黙つて、併し心は揚々として跟いて行く。

ねむさうな雞の聲のする村も過ぎ、けたましく犬の吠えかゝる村も過ぎ、月色茫々たる野路を歩いて行くと、果はだんく、ねむたくなり、頭は茫となつて、こくりく、足ばかり機械的に歩んでゐる。ふと、さあくといふ音が聞える。松風か、目を開くと川——月にさゝめく川瀬の音だ。橋番小屋の前をわざと突貫して馳渡る。もう一里半も來たらう。月は落ちて野は一面の曉闇、前に行く者の姿も、はつきりとは見えぬ。ふと、すばらしい大きな、眞黒いものが鼻先に現れる。山だ——目的の。まだ早い。皆そこらに積んである稲束や粟がらを引出しては、焚火をしながら天明を待つて居る。

山の影

僕は藁の上に寝轉んで居ると背は寒い、顔や腹は焚火に暖つて、炎々と立昇る焰の間に、ちら／＼見えて居た一同の赤い顔が、次第に遠くなつて、ついつと一寐入した。と思へば、「おい、起きんか、夜が明けたぞ、もう網を張りに行つた。」と起される。眼を摩つて起上ると、なる程天明だ。東が白んで、曉の風は切る様に面を吹く。焚火の迹だけ黒い圓を描いて、四邊は一面の霜だ、やがて勢揃して山にかゝる。進軍の號令がかゝる。鬨の聲が一時に揚る。二山も追ふ頃は、もう朝日がきら／＼と秋空に昇つて居る。

今思うても愉快だ。秋が、黄に紫に、鳶に、あらゆる色彩の限を盡くした落葉木の枝を押分け、葉を打拂ひ、聲をあげて



兎

狩

登る心地網近くまで追詰めて、どうかと思つて居る時、どこからか「捕れた。」と云ふ聲がして、我知らず棒を振つて、勝鬨をあげる時の心地。網番をして、攻寄せる勢子の叫の間近になるのに、兎のうの字もかけて來ず、「あゝだめ。」と落膽する時、突然がさ／＼と藪が鳴つて、覗く鼻先に淡褐色の飛影がちらり、思はず網に飛込んで、二つ三つ網ながらに蜻蛉反る兎を、樹蔭から飛びかゝつて押へる

「一つ一つの心地を想へ」

時の心地。あゝもう正午か、どこの山中の一軒家でか、午鶏が鳴いて居る。落葉を搔分けて、谷川の水を口づけに吸つて、木の根草の上に脚投出して、網袋の握飯にかぶりつく時の心地。食つてしまつて、落葉の床に仰向けに寝て、碧玉よりも澄んだ空を眺めて、汗ばんだ顔を冷々した風に吹かせる心地。――「さあ、もう一奮發だ。」やゝ重い足を移して、又二山三山。數へ立てると際限も無い。

秋の日の短さ、まだ三正しか取れぬのに、もう鴉が鳴出した。遙かに見える湖や川は、金の如くに夕日に閃いて居る。獲物は鳶葛で四脚を縛つて、大人が昇いでとくに還つた。僕等は紅葉の枝を折つて、ぶら／＼後から還つて行く。山を降り

狩りくらし
かりくらし
機つめに宿か
らむ天の川原
にわれは來に
けり。在原業
平、古今和歌
集。

楽しい食事

て野に出ると、日は彼方の櫛の森に沈んで、夕烟が村々の黄昏を催して來る。と思ふと、薄紫に烟る野末に、大きな月が朗朗と顔を出す。狩りくらし……何とか歌でも詠みたい風情。その月がやゝ高く、やゝ小さくなつて、打連れて行く我が影の、大分短くなる頃は、僕等はもはや塾に歸り着いて、やつと草鞋を脱いで、顔を洗つて、先生を始め、一同大胡坐で、てんでに兎汁を盛つて、飯を食つてゐる。その味、否それよりも食つてしまつて、着物も更へず、ぐつすり寐る時の心地。夢も見ない、身動きもしない。

今思うても愉快だ。(思ひ出の記)

正木不如丘
名は俊二。東
京帝國大學醫
學部卒業。慶
應義塾大學醫
學部助教。

山國の初春

四一 三太郎風

正木不如丘

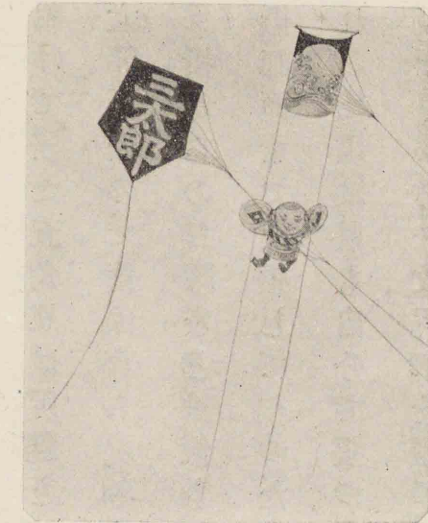
長野の春は三月末に来る。長い冬も漸く老いて、ともすれ
ば日本晴の暖い日の續くまゝに、軒から落ち、畑から消える
雪解の道のぬかるみに、僕達は毎朝足駄の齒を食はれて難
儀する。日が暮れると、又軒から落ちる雪解の水が氷柱にな
る。その氷柱に朝日があたる時、僕達は棒でそれを叩き落す。
日一日と雪が解去つて、物蔭にしか白いものが残らぬ頃
になると、僕達は風を上げる。三月の下り風と東國では云ふ
と聞くが、山國では、三月も末にならなくては風も上げられ
ない。

「尻劍」

師範
長野師範學
校。

奴風を短い絲につけて、駈けて歩いた頃は面白かつたの
だらうが、今は思出もない。十近くなつて、四角や五角の風を
上げた頃の思出が今も残る。四角の風には二本の長い尾を
附けて居た。五角風は尻劍しんけんと號して、上下左右、自由自在の悪
太郎風なので、僕は専ら尻劍を好んで上げた。
折からの日曜などは、飯も忘れて風を上げる。風上げは大
抵師範まで出張してやつた。運動場の空は風を以て埋めら
れる。僕達は風も自分で張つたし、絲も自分で編んだ。日曜の
朝早くから一枚尻劍を張つて、それに繪や字を書いて、僅か
の絲を持つて家を出て、麻屋で麻を買つた。風を上げながら、
僕達は麻をよつて風を天に送つた。

僕の尻剣は三太郎と紅地に白く染抜いてあつたので、どんなに群むら風かぜが空に居ても直ぐ分つた。時に大馬鹿などとい



ふ字の風を上げて、僕の風の上に位させて喜んだものもあつた。併し僕はそんな卑劣なものには降服しなかつた。常に僕の三太郎風は天下に冠たりであつた。

僕の尻剣は少し様子が變つて居た。それは尻が幅廣く武張つて居る所にある。随つて安定である。併し、一度絲をゆるめて右肩の下つた時、絲を手繰れば、風は殆ど水平に、厭くま

でも右に進んだ。喧嘩風としては世界に雄たりと、自他共に許して居た。

僕は、小さな風や、子供の風には決して目をくれなかつた。二本の尾を長く垂れて、我が物顔に天心に澄んで居る眼の光る達磨などを見ると、直ぐに挑戦した。尾長風は安定ではあるが、尾をすくふと直ぐに逆さまに落ちる。

長野では、風の喧嘩は風で復讐する事になつて居る。決して頭をぼかりとなくつてはならぬ法律であつた。だから僕は中學生の上げて居る風でも平氣で失敬した。

或年、僕は例の尻剣で、大分大物を倒すに成功した。三太郎風が出陣すると、群風忽然として姿を消すといふ状態であ

つた。僕は得意になつて、或風の強い日の午後、又運動場に出た。所がたつた一つ、二疊敷程の尾長風が天心に澄んで居た。僕は大きいに癢に障つたので、早速三太郎風を上げ出した。三太郎風が上つたので、外の風はなか／＼上らない。僕は一所懸命になつて絲をくれて風を高くした。そして例の尾長風の尻尾をすくふのに努力したが、絲が短くてなか／＼尾に届かぬ。

尾長を上げて居るのは、兄の友達の中學生であつた。僕が一心になつてやつて居るのを見て、僕を嘲つた。

「三太郎も今日は大馬鹿三太郎だ。」

向ふ所敵なき所を悪口されたので、風の右肩が一寸傾い

た時、絲をどん／＼手繰つた。三太郎風は右上に一直線に登つて行く。尾長の尾に届きさうに見えた。僕はなほ絲を手繰つた。その時、僕は三太郎風が十分に遠く行つて居る積りなので、確かに尾長の尾に達すると思つて居たが、案外僕の風はそれに近い所にしか達して居らなかつたと見えて、尾長の尾よりは遙かに低い所で、敵の絲に尻剣がくる／＼と絡みついた。

いつも僕を憎んで居た子供達は、「大馬鹿三太郎やあい、やあい。」と囃し立てた。僕は切齒したが、何とも致し方がない。何とかして風を敵の絲から離さうとしたが、どうも離れぬ。中學生は、「あは、」と笑つて僕を見て居る。

その時中學生は、急に凧に糸をくれ始めた。僕は自分の凧の糸を握つて居るので、力を出して引いたが、敵の凧は大きいので、僕の身體がづるゝと引かれ始めた。見物人はワーワーと騒ぐ。中學生はまた糸を凧にくれる。僕はころゝと轉げながら、運動場を引きずられて、とうゝ運動場の隅の小高い土手の上まで引上げられた。

あつと思ふ中に、僕の身體は宙に浮いたが、直ぐにべちやんと大きな溝（ぼとけ）の中に落込んだ。土手の先の溝である。僕は顔も頭も溝泥の洗禮を受けて了つた。僕の凧糸は帯に結びつけられてあるので、やつと溝の石垣を登つた時、中學生は又糸を手繰り始めた。僕は自分の糸の稍たるむのを見て、一時

安心したが、凧の大きさと糸の太さが比較にならぬので、糸はぶつりと切れて了つた。溝の向側に立つて空を見た時に、尻劍の附録をつけた尾長凧は中天に澄んで居る。

僕は大分糸も損をしたし、凧も取上げられたが、仕方がないから、すごゝと泥だらけの顔のまま、家へ歸つた。

僕はその日の失敗を考へる度に、口惜しくてたまらなかつた。何とかして再舉を計らなくてはならぬと思つて、頻りに工夫して居た。その頃丁度上京して居た父が、お土産に素敵なものを持つて来てくれた。それは、その頃まだ長野になかつたガンギリと云ふものである。僕はそれを貰つた時、夜もそれを抱いて眠つた。

待つた日曜が来たので、僕は又新調の三太郎風を持つて運動場に出た。その日は朝からの風日和だつた。空には色々な風が上つて居た。僕は群小の風には目もくれずに、先週の尾長を物色すると、相變らず天下を領した高所に恨重なる大物が居た。

そこで、例のガンギリをそつと附けて風を飛ばした。今度は十分に絲も用意して居たので、萬失敗はないと信じた。三太郎の姿を見ると、段々と遠くへ逃げて行く風がある。やつと僕の尻剣が上りついた頃は、例の尾長しか近い所に居なくなつた。僕は一心に風を高くした。中學生は僕の傍へ寄つて来て、「又今日も喧嘩をやらうか。」と云つた。僕は自信がある

ので黙つて居た。

「どうせ大きさが比べ物にならないのだから、降参した方がいゝよ。」

僕はまだ黙つて居た。その時一陣の春風が大野を渡つた。尾長はウーンと唸つて、一段高く上る。僕の尻剣は旋曲マニエールりに左右に動く。早速僕は敵の絲と僕のとを交叉させた。

「又やるのかあ。中學生が怒鳴る。」

「やるんだ。僕は勢よく答へて、一心に絲を手繰つた。そしてガンギリが敵の絲に近づいたのを見た時、急に絲を引いた。見る、尾長は絲をぷつりと切られて、へこくと朝日山の方へ飛んで行くではないか。それに比べて僕の風は、今度は

中天高く頭の上まで来てくるくくと二三回廻つた。いゝ氣持である。中學生はと見れば、眞青になつて風の行方を追ひかけて行く。

「示威運動」

僕は太急ぎで風を下した。そしてガンギリを懐にかくして、平然として又上げた。誰一人僕に近づく者が無い。僕は右に左に上に下に、風を活躍させて示威運動を試みた。

一時間程して、中學生は絲ばかりを持つて歸つて來た。

「又今度の日曜にやらうな。」

と、中學生だけあつて、僕に笑つて話して歸つて行つた。

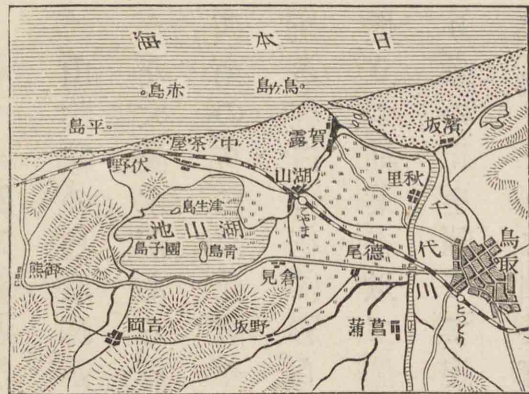
「卑怯」

考へて見れば、ガンギリを用ひたのは我ながらいかにも卑怯であつたと恥ぢた。(三太郎)

四二 湖山長者

今見る湖山池

山陰線の鳥取驛から西の方へ二里ばかり行くと、鏡のやうな大湖水がある。湖山池といつて、周回四里近くもあらう。西南の方には丘陵や小山が波のやうに起伏して、春は爛漫たる紅白の花に彩られ、夏は滴る木々の翠緑に潤され、秋は燃立つ紅葉を以て飾られる。東北の方には田畑が廣々と連り、砂の丘を隔てて、遙かに漫々たる碧の海を望むことが出来る。かやうに山と海とのえならぬ眺を兼ねた上に、湖の面には、時々蘆荻の生ひ茂つた間に鷺鷥の閑眠を貪るのが見え、又仙人めいた舟子の網を擧げて細鱗を捕るのが見える。



景色の雅なること、眞に一幅の名畫を展べたやうである。今は昔、此のあたりに湖山長者といふ名高い豪家があつた。住家は王侯の宮殿のやうで、その中には、金銀財寶が積んで山をなして居た。着るには綾錦の美しきがあり、食ふには山海の珍味があり、使ふには數十百人の婢僕があり、そして所有の田地は見渡すかぎり廣々と、稲の波を打つて居た。たとへば、天下の富を此處に集めたかと思はれるほどで、世の中の事何一つ、此の長者の思ふ儘にならぬものはなかつた。

或年の夏の田植時の事である。湖山長者の家では、季節中の最上吉日を卜して、此の廣田に田植をすることになつた。長者の家に使はれる者は勿論、近郷近在の者ども迄、今日こそ湖山長者の田植だといふので、老幼男女數を盡くして、身仕度かひなく、我もくと田圃をさして出掛けて行く。長者は高殿の欄干に凭れて、目も及ばぬ田地を遙かに見渡しつゝ、己が限なき富に思はず得意の微笑を漏らしてみた。さる程に、仕事は面白いやうに運んで、早苗を取る男女の手が動く度毎に、濕つた黒い土の色が、片端から青くく變つて行く。そのうちに正午になつた。やがて夕暮近くなつた。

仕事はめきくと運んだが、名に負ふ長者が広い田地のこ

とであるから、植ゑるのに果しなく、

まだ數段を残してゐる中に、日はは

や西の山に入らうとした。

長者はこれを見て、あゝ、今少し日

が高ければ、全體めでたく濟まうも

のをと、暫し深い思に沈んだが、つと

立つて黄金の扇を持ち來り、さつと

開いて、今しも沈まうとする夕陽を

三度までさし招いた。

見る間に、山の端にかゝつた夕陽は三段ばかり昇つて來



湖 山 池

「黄金の扇」

「喜と心驕り」

た。長者の喜と心驕りとは、どんなであつたらう。田に立つた村人らは、天道様を左右する長者の威力を見て、いかに驚いたであらう。かくして、これまでと思つた田植も思ふまゝに抄取つて、その日も無事に暮れた。田植に出た人々は、終日の働に非常に草臥れたが、長者が犒ひの酒肴に歡を盡くして、いづれも快く枕についた。

寢覺の牛の聲がゆるやかに響いて、短い夜はやがて明けた。朝の床を起出て、背戸の流に落ちあつた村人らは、申合せたやうに、先づ昨日の田植の苦しかつたことを話し、次には、入日を招きかへした長者の恐ろしい力を稱へた。それから昨日幾千の人が一日で植ゑあげた田の有様を見ようと

「短い夏の夜」

見る限りの水の面

風に戦ぐ蘆の葉

「千古曇なき鏡」

して出かけたが、之を見て誰一人腰を抜かすばかりに驚かぬ者はなかつた。驚くのは無理はない。

見よ、さしにも廣かつた長者の田地は、跡形も無くなつて、漫々たる湖が、朝の嵐に白い波を立てて居るではないか。數千人で一日植附けた早苗が、一本も見えないで、渚には群立つ蘆が、波に洗はれ、風に戦いで居るではないか。

長者の家は此の時から一日々と衰へた。そして遂に此の廣い田のやうに跡形もなく亡びてしまつた。

此の池はそれから湖山池と呼ばれて、千古曇なき鏡を展べつゝ、此のほとりの住民に盡きぬ教訓を與へてゐる。

〔五十嵐力の「趣味の傳説」に據る〕

澁川玄耳

名は柳次郎。

別號を藪野椋

十といふ。新

聞記者。大正

十五年歿。

四三 國 引

澁川 玄耳

伊弉諾神・伊弉冉神がお産みになつた日本は、初の程は小さくて、足りない處が多かつたのを、子孫の神々が段々に修理を加へられて、今のやうな立派な國となつたのである。

出雲の國は取分け小さかつた。ごく幅が狭くて、帶のやうであつた。素戔嗚尊の四世の孫の臣角命（おみつのつね）といふ方が、「いかにもこれでは狭過ぎる。ちと縫足さなければいけない。」と思召し立たれた。

そこで海岸の巖の上に立つて、「何處か、國のあまりは無いか。」と遙かに西の方を御覽になると、漫々たる大海を隔てて、

「國のあまり」

臣角命

八束水臣津野

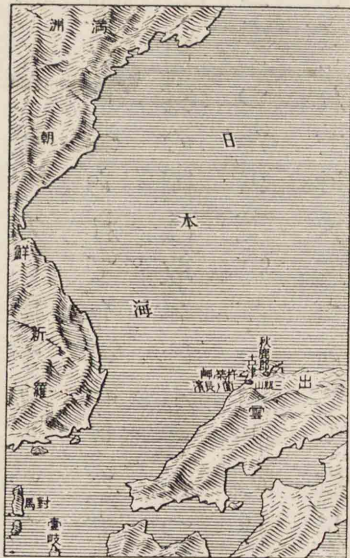
命とも稱す。

天國主命の父

神。

「はくり」
「ざくり」
「ずばり」

古津・杵築
共に出雲國簸
川郡。
三瓶山
石見國安藝
郡。



彼方に新羅の國が見える「おゝあるく、新羅の岬に、國のあ
まりがある。あれを引寄せて此の國に縫合はせよう。」と、臣角
命は神通力を現して、其の新羅の出鼻をばくりと鋤取つて、
ざくりと衝放して、ずばりと切分けて、さて三撚の大
綱を打掛けて、其の國の切
れに結び附け、えいやくと
と手繰寄せ、そりくと
引寄せて、國來い、此處まで來い。」と、とうくと引附けて縫
合はせられたのが、古津から杵築の岬の邊である。此の國引
の綱を繋ぎ止めた杵が即ち今の三瓶山といふ山、又その綱

出雲國簸川
郡。
蘭の長濱

秋鹿郡
今廢して八束
郡に入る。

は蘭の長濱に爲つて居るのである。○
まだ、これでも、出雲の國が小さいと、此の度は、北の方に國
のあまりは無いかと御覽になると、滿洲の方に大分廣い所
が見えた。早速其處を切分けて、又もや三撚の綱を打掛けて、
「國來い、此處まで來い。」と引寄せて、接合はせられたのが、
秋鹿郡あたりになつた。今少し足さう。」と言つて、更に東北の
方を探して、その國のあまりを引寄せられたので、とうと
う今日の出雲の國がすつかり出來上つたのである。

神代から幾千萬年を経て、明治四十三年になつて、あの、ち
ぎり残りの朝鮮の全部が、遂に悉く我が日本に引かれてし
まふことになつた。

(日本古事記斷)

いつまでも明
けぬ夜の世界

四四 日の出る前 鳥崎藤村

鳥の世界は暗くていつまでも夜が明けませんでした。鷹だの鴉だの七面鳥だの鷺だの、それから鶏だの、いろいろな鳥が首を長くして、もう夜が明けさうなものだと言つて居ました。おや／＼鷺や雀や鴛鴦までが皆と一緒に居て、おてんたうさまの出るのを待つて居るのでありました。

どうしたとか、いつまで待つても同じだものですから、鷹は待ちくたびれ、鴉は欠をし、雀はぶつ／＼言ひ、七面鳥でも鶏でも日の光に渴ゑてしまひました。鳥の中でも鷺は好い聲で夜の歌を歌つて居ました。氣の短い七面鳥などは待

夜明を待つ鳥
仲間

遠しがつて「鷺はのんきだなあ。いつまであんな夜の歌など歌つて居る氣だらう。」と言ひました。

「鳥の世界には夜は明けないのかも知れない。」と鷹が言出しました。

「とても私は鷹のやうな氣長なことを言つて、おてんたうさまの出るのを待つて居られない。」と七面鳥は言ひました。

鳥仲間には、黙つてみんなの言ふことを聞いて居るやうな鷺も居ました。鷺は氣の短い七面鳥や物をほじくりたがる鴉のお饒舌を煩はしがつて、獨で遠い先のことを夢に見て居ました。そんな遠い先の日の出の夢を見て居ました。

「どうです皆さん。」と、その時言出したのは鴉でした。一體お

てんたうさまは東の方から出ると定つたものでせうか。」

「鴉がまた何かほゞくり出した。」と言つて、鷹は笑ひました。

「いや、うつかりすると、おてんたうさまは西の空からも南の空からも出ますぜ。」と鴉が言ひました。

「大きにさうだ。私達は東ばかり待つて居た。どんなすばらしいおてんたうさまが思ひもよらない方から出て、西の空から夜が明けないとも限らない。」と言ふのは七面鳥でした。いつまで待つても夜が明けないものですから、鳥仲間はおてんたうさまの出る方角にさへ迷ひました。そしてがやがや言ひ騒ぐうちに、しまひには皆くたびれてしまひました。中でも氣の短い七面鳥やお饒舌の好きな鴉などは、もう

夜明けを待つ元氣もないほどにがっかりしました。

「私達は一生おてんたうさまを見ずに死ぬのだ。」

七面鳥はこんなことを言つて鳥仲間を笑はせました。

その中に鶏は他の知らないやうな力を擱みました。鶏は眼を覺したのです。そして夜明けの近いことを知つたのです。第一に身を起しました。それから鴉の言つたことなどに迷はされずに、確かにおてんたうさまの出るのは東の方だと思ひまして、ありたけの聲を出して勇ましく鳴きました。途方もない鶏の叫び聲に驚いたのは鳥仲間でした。日頃遠見のきくのを自慢にして居た鷹の眼にすら、そんなおてんたうさまらしいものは見えません。

霧の中に響き
渡る聲

「鶏に一ばい食はされた。」と言ふのは鴉でした。
「あの鶏は大方寝ぼけたのだらう。」と言ふのは七面鳥でした。その癖、鴉でも七面鳥でも、夜明けを待ちくたびれて、うとうとと半分夢を見て居たのです。

まだ空は暗かつたのですが、併し鶏は一度鳴いた自分の聲に勵まされました。二度目の時をつくる頃には、その鳴聲が深い霧の中に響き渡りました。その時になつて、鶏は鳴けば鳴く程自分に力が出て来るのを知りました。いつになつたら夜が明けるかと思ふやうな鳥の世界にも朝が来て、あの赤々としたおてんたうさまが美しい顔をお出しになるのも、もう遠いことではなからうと思ひました。(藤村讀本)

世界一の大家傑
獨逸の名高い
滑稽本ミューン
ヒハウゼンの
話

四五 世界一の大家傑

もと私は華族の息子で、小さい時から乳母や守役に、やれ若君、それ坊様と、荒い風にも當てない様に、大事にかけて育てられました。が、世間並の華族の兒の様な、蒼しよびれた弱蟲ぢやありません。生れついでの大力無雙、而も武藝は何でもござれて、馬は名人、鐵砲は上手、其の他何でも出來ないものは無いと云ふ、世界一の大家傑でした。

それで或冬のこと、私は露西亞へ旅をしましたが、露西亞は滅法寒い處で、評判の雪國ですから、その深い雪の中を騎馬旅行も面白からうと、例の馬を乗出しました。すると案の

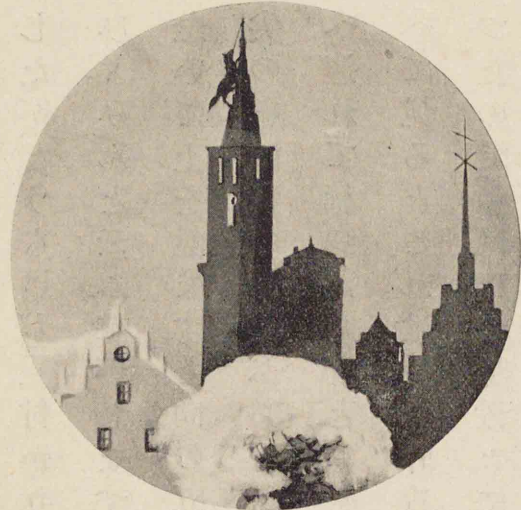
「世界一の大家傑」

定、いくら行つても雪ばかりで、右も左も銀世界、何處が町だか、畠だか、まるで見分けが付きません。

其の中に日が暮れて、何だか睡くなつて來ましたから、今夜はこゝらで寢て行かうかと、馬から降りて見ますと、丁度其の側に、何だか木の枝の様なものが雪の中から出て居ましたから、これは好い物があつたと、すぐにそれへ馬を繋ぎ、私は雪の中に横になつて、ぐつすり寐込んでしまひました。間も無く夜が明けたと見えて、近所がやかましくなつて來ましたから、ふと目を明けて見ますと、これはしたり、昨夜は確かに雪の中で寢たのに、今朝はまるで雪が無くなつて、自分は大きなお寺のそばの芝の上に横になつて居ます。

はてな、何時の間にかこんな處へ來たらう。それに馬も見えないやうだがと、私は起上つて、そこらをきよろ／＼捜しましたが、どうも馬が見付かりません。すると、何だか空の方で、ひゝひんと云ふ聲がします。おや、變な處で鳴いて居るぞと、急いで上を見ますと、向の五重の塔のてつぺんの避雷針の尖さきの處に、私の馬がぶら下つて居ります。おや、誰があんな所へ連れて行つたらうと、私も肝を潰しましたが、よく／＼考へて見ると、これは全く昨夜の中に雪が残らず解けてしまつたので、私はその時段々に地びたへ着いてしまつたけれども、馬は結び附けてあつたものですから、塔のてつぺんに残されてしまつたのです。して見ると、昨夜木の枝だと思つ

たのは五重の塔の避雷針かと初めて分りましたが、何しろ、あんな高い所では連れに行く事が出来ません。と云つて、う



塔の上の馬

つちやつて置けば、可哀さうに馬は死んでしまひます。是には少し困りましたが、忽ち一策を案じ出しまして、用意のピストルを持出し、馬の繫いである綱を狙つて、ずどんと一發放しますと、弾丸は好い鹽梅に綱に中つて、綱がぶつりと切れましたから、馬は眞逆様に落ちて來ました。其處を下でうまく受けて、直ぐと其

の上に跨がりながら、又悠々と出かけました。

それから或宿屋に着いて、其處に一晩泊りましたが、翌朝早く起きて見ますと、前の庭の大きな池に、鴨が澤山下りて居ます。私は大の獵好きですから、それを見ると、もうたまりません。急いで鐵砲を擔ぎ出して、寢卷のまゝで跳び出しましたが、あんまり急いだものですから、柱へ頭をぶつゝけて眼からばつと火が出ました。それでもかまはず庭へ出て鴨を狙つて撃たうとしますと、これも急いで來たお蔭で、肝腎の雷管を持つて來ませんでした。

雷管が無ければ、彈丸が出ず、彈丸が出なければ、鴨が撃てず、鴨が撃てなければ、折角此處まで來た甲 がありませぬ。

と云つて、それを取りに行つてゐるうちには、鴨が逃げてしまふかも知れない。これはどうしたらよからうかと、大いに困りましたが、不圖氣が付いて見ますと、今柱へ頭をぶつつけたとき、確かに眼から火が出た。して見ると、人間の眼は頭を撲つと火の出るものだな、よし、それぢや、一つ此の火で試しに鐵砲を撃つて見ようと、突然自分で拳固を堅めて、力一杯に自分の額を、ごつんと一つ撲ちますと、ばつと云つて火が出ましたから、直ぐにそれを火薬に移して、どんと放しては又なぐり、なぐつて火を出しては又ずどん。見る／＼中に十羽ばかりは見事に撃取つてしまひました。

其の勢に驚いて、外の鴨はみんな逃出しましたが、直ぐと

又下りて來ましたから、後を又撃たうと思ひますと、今度は彈丸がなくなりました。

よし又彈丸があつた所で、撃つ度に額をなぐつては、何ほ何でも痛くてたまりませんから、他に好い工夫は無いかと考へて居ます處へ、犬が一匹やつて來ました。見ると、其の頸輪に長い紐が付いて居ります。

よし、これは好い物があつたと、其の紐を取つて其の先に餌を付け、そつと池の中へはふり込みました。すると、鴨はこつちの計略を知りませんから、直ぐに來てそれを呑込み、暫くして尻から出しました。處へ又一羽、又それを喰べたかと思ふと、間も無くこれも尻から出す。すると、又その後からも

一羽來て、それを拾ふ。拾ふかと思ふと、又後へ出す。それを又他の鴨が呑む。かう云ふ鹽梅に、後からくと鴨が來て、同じ餌を喰べては出し、呑んでは尻へ通しましたが、元よりその餌には長い紐が附けてありますから、これがどの鴨のお腹へも通つて、とうとう十二羽ばかりといふもの、數珠繫ぎになつてしまひました。

私はこつちの蘆の蔭で、それを見て居ましたが、もうよからうと思ひますから、そろそろ其處へ出かけて行つて、例の紐を手繰寄せ、とうとう鴨十二羽を紐一本で生捕にしてしまひました。

すると、鴨は驚いて、一時にばたくと飛び初めましたか
ら、私は紐を擱んだ儘、宙へ釣上げられました。けれども決して驚きません。これは好い風船が出來た、序に空中旅行をしてやれと、うまくその鴨の背に乗つて、足でもつて楫を取り、暫く空を歩いて居ましたが、今急に下へ降りては怪我をするかも知れないと、其處で私は考へて、一羽づつ締めて殺しましたら、段々力が弱つて來て、そろそろ降りる事が出來ました。

それから又可笑しかつたのは、私が鹿を撃つた時です。これは或山の中で、丁度獵の歸途でしたから、もう彈丸は一つもありません。處へ、向から鹿が一匹やつて來ましたが、生憎彈丸がありませんので、間に合はせに櫻の實を拾ひ、その核

を弾丸の代りにして、うまく鹿の頭を撃ちましたけれども、本當の弾丸ではありませんから、鹿は一寸倒れたばかりで、其の時は直ぐに逃げてしまつたのです。

すると、それから丁度二年目でした。私は又其の山へ行く、と、向に大きな鹿が見えます。こいつは好い獲物だと、急いで其の側へ行つて見ますと、其の鹿の頭には、大きな櫻の木が生えて居て、實も澤山なつて居る様です。さては、いつぞや櫻の核をうまく撃込んで置いた奴だな。よし、それでは今日こそ本當の弾丸で引導渡してくれようかと、狙ひを定めて譯無く撃止め、それから試しに、櫻の實を一つ取つて喰べて見ました處が、そのまたおいしかつた事、今だに頬ほが落ちさ

うです。

私は一體大力ですが、其の代り體が軽いので、どんな早業でも出来ました。それで戦争の時なども、敵の様子を見ようと思ふと、何時でも大砲の口に居て、ずどんと弾丸の出る所を、うまく其の上に飛乗つて、敵の方へ行くのですが、一緒に敵の陣へ落ちた日には、直ぐ生捕になりますから、好い加減の處まで行くと、敵の方から來る弾丸へ、又ひよいと乗移つて、こつちへ歸つてしまふのです。

又或時は、生憎味方が敗軍で、どん／＼逃出して來ましたが、其の途中に大きな池がありまして、廻つて居てはつかまりますから、一足飛びに飛越さうとしました。處が氣が急い

巖谷小波
名は季雄。文
學者。

て居たものですから、運悪く飛損つて、馬ごと池の中へ落込みました。すると、又その池が非常に泥深いので、いくら藻掻いても出られません。其の中に、馬も私も首まで水に浸つてしまひました。

此の時、私は一所懸命日頃の大力を現して、右手に馬の鬣を掴み、左手に自分の頸を掴んで、えい〜えい〜と云ひながら、泥の中から拔出して、向の岸へはふりましたら、自分は馬に乗つたまゝで、うまく陸へ揚りました。何とすばらしい力ではありませんか。(巖谷小波譯世界お伽噺)

四六 海底

人 海上にあるは、二十二潜水隊の原田司令等

海底にあるは、四十三號潜水艦の小川大尉、岩見兵曹長、その他の乗組員。

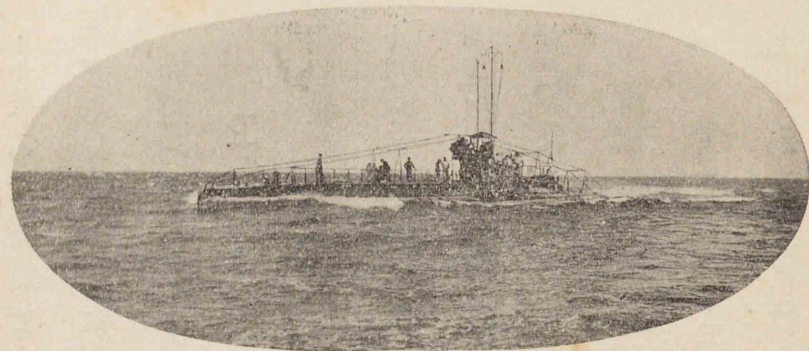
處 佐世保港外。

風 荒く波浪高し。

四十三號潜水艦は、軍艦龍田と衝突して沈没した。間もなく高聲電話機が海面に浮上つた。それによつて海上からは原田司令等が交々通話し、海底からは小川大尉等がこれに應答した。

時 大正十三年三月十九日。
午後四時二十分頃。

小川衝突したやうですから、發令所に命令を聽きましたが、何等の應答がありません。機械室の者は衝突の音響を聞いて、電動機室に退きました。午後二時爆音と思はれる音が聞えて、艦内は眞暗になり、艦が左に五十度位傾斜しました。海水はどんく浸入して來ます。電燈の間からも大いに漏つて來ます。油タンクの油も恐ろしく逆流して來ました。……あゝ、苦しい。盛んに、……まるで瀧のやうです。……どうか出來るだけ早く助ける手段を講じて下さい。……あゝ、又機械室から水が噴出して來ましたから、之を防ぐ方法を頼みます。……とうく左の電動機も水に浸つてしまひました。」



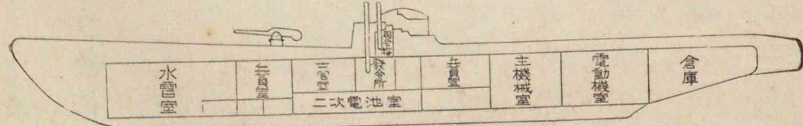
第四十三號潜水艦

(原田司令等は海底からのこの通話を聞いて、互に顔見合はせて驚いてゐる。)

原田して見ると、中央發令室から前部は沈没刹那にやられて、此の一室の人だけが生き残つてゐるらしい。艦内各室の聯絡は悉く絶たれたらしい。困つたな。」

午後四時二十七分。

小川呼吸が苦しくなつて、……



潜水艦内部分略圖

……まるで駈足で山へ登つた時のやうです。」

原田「あゝ又電話が聞える。成程はあゝと喘ぐやうな苦し
い息づかひが、手に取るやうに聞える。」

(上から)

原田「最前部の部屋はどうなつてゐるかね。」

小川「どうだ、駄目か。」

岩見「よく分りませぬ。」

原田「うむ……」

午後四時四十五分頃。

小川「此の部屋には空氣清淨機が六箇ありますから、三人一

甘露のやうな
空氣

箇づつの割合で分配し、交替で之を甘露のやうに吸つて
居ります。……それから電燈が消えて、眞暗で心細いので
すが、幸ひ、演習前に買つて貰つた懐中電燈が二箇ありま
すので、それを頼りに遺書などを認めて居ります。が、段々
光が弱つて、絲のやうに消えて行きつゝあります。……今、
兩舷とも電動機が浸水してしまひました。」

午後五時五十五分頃。

小川「浮船渠ドックが來て居るなら、それで淺瀬の方へ曳いていつ
てくれませんか。……それからメインタンク排水の用意
はしてありますが、發令所のバルブが書いてゐない筈で

メインタンク
主水函。
Maintenance
バルブ
Valve
弁。

「靜かに泰然と
して……」

すから、之を早くあけて下さい。」

(おっかけて)

小川「司令殿に申し上げます。兵員は能く命を奉じて努力して居ります。而も靜かに、泰然として、各自の部署に就いて居りますから、此の事をお上によく分るやうに、くれぐれもお願いたします。……今、足が水に浸つて居ります。……暗い中で懸命に働いて居りますから、少しでも早く救助の措置を執つて下さい。……炭酸ガスが充満して、呼吸が非常にせはしくなりましたが、電動機室は温くて、電話もありますから、皆こゝに居る積りです。」

午後六時四十分頃。

「夜ですか？ 晝
ですか？」
上では何をし
てゐるのです
か

岩見「今日中に揚げて載く見込がありませんか。……只今は夜ですか晝ですか。……何時頃でせう。……上では一體、……何をしてゐるのですか。今どういふ作業をやつてゐるのですか。……呼吸がますます苦しくなつたから、今蓄氣機の空氣をじり〜出して居ります。」

(上から)

原田「それを出しては氣壓が高まつて來て大變だから、苦し
くとも我慢して居れ。」

岩見「はい、それではやめます。」

原田「あたりを顧みて獨語」まるで子供の如く素直に命を聽く。

實にいちらしくて、泣かされて、もう電話を聴く勇氣がない。早く救助を早く。」

小川「今、一人倒れました。あ、又、二人倒れました。」

原田「獨語」段々倒れて、今では三四名の生存者が、下から段々に迫つて来る魔のやうな水に追込まれて、高い處に攀上つて、おーい、おーい」と呼合つてゐるらしい。」

午後七時三十五分……突然、

聲「天皇陛下萬歳……萬歳……萬……。」

「力強い叫」

(非常に力強い叫が三度繰返された。)

原田「獨語」いよゝゝ覺悟をきめたらしい。それでも絶えず、早

くゝ。と頻りに呼んで居る……(獨語のやうに)もう苦しさをうで、瀕死の病人の吐息のやうで聴取れない。」

午後八時十分。

小川「せつなさうな聲で一身上に關しては……何も言ふ事はありません。既に……決心して居りますから……御安……心下さい。願はくは、今後とも、國家の爲に最善の努力を……頼む……頼む。」

原田「獨語」如何にも苦しさうだ。さすが軍人だ。よく言ひきつた。あたりを顧みていよゝゝ決心して居る……。」

「國家の爲に最善の努力」

午後八時三十頃分。

原田〔獨語〕もう上からの話も聴取り得ないらしひ。たゞ天命を待つ。と言つて居る。』

午後八時四十分。

聲早く……早く……』

(がやくといふ聲)

原田「あゝ、もう聲が聞えなくなつた。」

浪の音。

風の聲。

すゝり泣の聲。

(佐世保防備司令官高橋少將の手記に據る)

四七 御 詞

皇太子殿下九月三日御歸朝ニ付原内閣總理大臣參殿御祝詞ヲ言上シタル處同大臣ニ對シ左ノ通御詞ヲ賜ヒタリ

予ハ曩ニ 皇上陛下ノ允許ヲ蒙リテ歐洲諸國ヲ巡遊シ幸ニ遠路恙ナク今日歸朝スルヲ得タルハ深ク自ラ喜悅スルト共ニ予ノ外游ニ關シ朝野ノ表示セル一憂一喜ノ至情ハ予ノ欣感忘レサル所ナリ

予ノ歐洲諸國ヲ歴訪スルヤ諸國ノ元首竝ニ官民ハ均シク眞摯敦篤ナル誠意ヲ披瀝シテ歡待至ラサル所ナク之ニ因テ短日月間ニ多方面ノ事物ヲ視察スルヲ得タルハ

予ノ幸福トスル所ナルカ歴訪諸國ノ歡待ハ蓋シ予ニ對
スル厚意ノ表現ニ止ラス實ニ我カ國民ニ對スル友情ノ
發露ナリ予ハ此ノ機會ヲ以テ國民ト共ニ深厚ナル感謝
ノ意ヲ表セサル可ラス
斯ノ游往復半歲ニ過キスシテ充分ナル考究ヲ爲スニ暇
アラサリシモ予ハ此ノ間ニ於テ知名ノ政治家竝ニ軍人
學者等ニ接見シテ其ノ談論ヲ聽キ學術文藝產業等發達
ノ狀況ヲ視察シ遂ニ大戰ノ跡ヲ尋ネ慘澹タル光景歷々
猶存スルヲ目撃シテ彌々世界平和ノ切要ナルヲ感シ戰
時聯合國民カ國難ノ爲ニ發揚セル犠牲ノ精神偉大ナル
ヲ追想シ更ニ戰後孜々トシテ文明ノ興隆ニ努力セル氣

象ヲ看取シ感興尤深ク裨益ヲ獲ルコト頗ル多カリキ予
ハ大戰ノ教訓今猶鮮明ナル時機ニ於テ見學ノ目的ヲ遂
ケタルヲ喜フ
惟フニ我ニ國粹ノ精華アリテ固有ノ特長ニ屬ス然レト
モ我國ノ宜ク他邦ニ學フヘキモノモ亦尠カラス予冀ク
ハ國民ト共ニ維新ノ宏謨ニ則リテ今後益奮勵シ彼ノ長
ヲ取りテ我ノ短ヲ補ヒ國運ノ隆昌ヲ期シ世界文化ノ發
展ニ資シテ以テ 皇上陛下ノ聖意ニ副ハムコトヲ
皇太子殿下ハ九月八日東京市ノ奉祝會ニ行啓左ノ通御詞
ヲ賜ヒタリ

予カ前日歸朝ノ際ハ東京市民ノ熱誠ナル歡迎ノ中ニ帝

都ニ入り欣喜ニ堪ヘサリシカ今特ニ斯ノ場ヲ設ケテ盛大ナル祝賀ヲ受クルハ予ノ満足スル所ナリ
 東京市ハ今方ニ都市施設ノ改善ヲ講究スト聞ク予ハ切ニ好成績ヲ得テ市民ノ幸福ト帝都ノ殷盛トヲ増進セム
 コトヲ望ム (天正十年九月官報)

國文新編卷一終

語釋

一 自學自習の精神に基き本文中の語句の解釋を列擧したものである。一語意の轉用に就いては、更に辭書を調べる習慣を養ひたい。
 一 辭書使用訓練の目的を以て、常に次の要件を見落さぬやうに注意せよ。
 イ 訓方。
 ロ 文法上の品詞の性質。
 ハ 同意語・同音語・對照語・熟語。

一 小さな旅人

【生涯】 シャウガイ。この世に生きてゐる間。一生の中。
 【塵埃】 デンアイ。ちりほこり。
 【森として】 シンとして。

二 犬ころ

【宵の口】 ヨヒのクチ。夜にはひつたばかり。
 【けたましく】 俄かにさわがしいこと。仰山なこと。
 【聲尻】 コワジリ。聲のをはり。聲のする。
 【かほそく】 細くの意。
 【めいるやうに】 氣の沈むやうな。氣

力のなくなるやうな。

【欠】 アクビ。
 【いたいけな】 あはれげな。かはいさうな。
 【寐・寢】 寐は音ビ。ねいること。寢は音シン。寢床をつくつてねること。即ち横たはるだけである。
 【擡げ】 モタげ。
 【他愛もなく】 タワイもなく。正體もなく。
 【乳汁】 チ、。
 【産毛】 ウブゲ。生れた時から生えてゐる柔かい毛。柔かい細かい毛。
 【正體がない】 シャウタイがない。正體がない。夢中だ。
 【節くれ立つ】 節のあるやうにごつごつしてゐること。無骨なさまにいふ。

【宙につるす】 チウにつるす。空中にぶらさげる。
 【藻掻く】 モガク。
 【足掻】 アガキ。手足を動かし、もがくこと。こゝでは、手足の働ぐらゐの意。
 【領元】 エリモト。
 【しよほたれ】 濡れて雫の垂れる。
 【身慄】 ミブルヒ。
 【途方に暮れる】 トハウにクれる。仕方なくなる。どうしてよいか分らない。
 【居たゝまらな】 ぢつとしてゐられない。
 【雪洞】 ボンボリ。おほひをかけ、柄の付いた手燭。
 【流石】 ササガ。
 【鼻聲を出す】 物をねだる時などに甘える様。
 【履脱】 クツヌギ。家の上り口の履物をぬぐところ。
 【噓】 クシャミ。クサメ。
 【棧俵法師】 サンダラボフシ。サンダラボッチ。米俵の上下のふたとして用ひる藁製の圓く平たいもの。
 【うんざり】 あき果てた時にいふ語。

【菰】 コモ。

三 競漕

【晴れがまし】 はえんしのこと。
【夕風】 ユフナギ。夕方に浪風のおだやかにすること。
【臺船】 ダイブネ。ボートを直接陸につけず、昇降するのに仲つぎにする船。普通は長方形の箱をふせたやうなもの。
【咄嗟の間】 トッサのアヒダ。ごく短い時間。
【非観する】 がっかりする。
【錯綜】 サクソウ。入り交る。
【慌つ】 アワつ。
【整調】 セイテウ。舵手につく重要な役で、席は船首から、一番、二番、三番、四番、五番、六番、七番、整調、舵手の順序。
【彌次郎】 ヤジロ。からかつたり、馬鹿にしたりすること。
【半艇身】 ボートの全長の半分。
【緊り】 シマリ。
【へたばる】 よわる。
【應酬】 オウシウ。むくいをなすこと。

【たへる】 こと。
【餘裕】 ヨユウ。餘りがあつてゆたかなこと。ゆつたりとおちつきのあること。
【機先を制す】 キセンをセイす。他に先んじて事をする。
【力漕】 リキサウ。Heavy. 力一ぱいに漕ぐこと。
【船脚】 フナアシ。船の進み。速度。
【激勵】 ゲキレイ。はげしくはげますこと。
【機械的】 キカイテキキ。器械が何の考もなく動くやうに夢中で動くのである。知らず識らず。無意識に。

四 苺

【苺】 イチゴ。
【水菓子】 食用となるくだもの。
【寒肥】 カンゴエ。寒中にするこやし。
【舌の御正月】 一番うまいものが食べられる時。目の御正月、頭の御正月も、それに準じて知れよう。
【二の腕】 二のウデ。ひちと肩との間。
【紅玉】 コウギョク。ルビー(Ruby)のこと。

五 トロツコ

【竹んで】 タ、ズんで。立ちどまつて。
【煽る】 アふる。
【半纏】 ハンテン。こゝはしるしばんてん。
【勾配】 コウバイ。傾きの度合。傾斜。
【薄暮】 ハクボ。夕方。
【有頂天】 ウチャウテン。夢中。うはのそら。
【怒鳴聲】 ドナリゴエ。
【仄めた】 ホノめた。

【綺】 シマ。

【怯つ】 オづ。
【ひた^スに^スに】 ひとむきにすべつて。
【赤錆】 アカサビ。
【巖乘な】 ガンジョウな。丈夫な。巖丈。頑丈とも書く。
【冷淡】 レイタン。ひやゝか。愛想なく。
【呆氣にとられた】 アツケにとられた。心を奪はれる。
【抛り出す】 ハフリダす。
【火照り】 ホテリ。
【躓く】 ツマヅク。
【喘ぐ】 アへぐ。いきせく。いきをきらす。
【啜る】 スゝる。
【塵勞】 チンラウ。世間のわづらはしいほねをり。

六 鮎

【彼岸】 ヒガン。仲春と仲秋とに佛供養をなす日。
【涸れて】 カれて。
【領域内】 リヤウキキナイ。領地の中。
【硅藻】 ケイサウ。下等な植物の一種。

【齒型】 ハガタ。

七 詩二篇

【眼鏡】 メガネ。
【据ゑて】 スゑて。

八 静寂

【楊枝】 ヤウジ。齒磨楊枝。齒ブラッシ。
【雲海】 ウンカイ。雲の海。
【銚】 ホコ。
【わが物顔】 自分一人のものものやうに。得意に。
【高音】 タカネ。
【凛々しい】 リ、しい。いかめしい。
【緋】 カスリ。
【鰐口】 ワニグチ。神社の前の簷下にさげて、参詣の人が緒の下方を取つて打鳴らすもの。大鈴を平たくしたやうな形である。
【咳く】 ツブヤク。ぶつ／＼いふ。くどい／＼いふ。鰐口にぶい音をたとへいたのである。
【啄木鳥】 キツ、キ。

九 蛙

【漢々】 バク／＼。雲や霧などにおほはれてほんやりしたさま。
【疾風】 ハヤテ。俄かに烈しく吹く風。
【空際】 ソラギハ。
【刺戟】 シゲキ。感^トを起こすこと。
【榛の木】 ハンのキ。
【地味な】 チミな。はなやかでないこと。派手の反對語。
【蟄居】 チッキ。蟲の地中にこもつてゐること。
【煤】 スゝ。
【撒散らす】 マキチらす。
【假死】 カシ。死んだやうな。
【復活】 フククツ。よみがへる。生きかへる。
【快げ】 コ、ロヨげ。
【發揮】 ハッキ。あらはす。
【嫩葉】 ワカバ。
【爽かで】 サワヤかで。さつぱりして。
【偃つて】 ハつて。
【雜木林】 ザフキバヤシ。
【蠶豆】 ソラマメ。
【芒】 ス、キ。

【硬直】カウチョク。剛直と同義。こ

こは、こはくすくくと勢よくつき

立つてゐること。

【焔めく】キラめく。

【拗切れる】ネヂキれる

【矜つて】ホコつて。

【磁石】ジシヤク。

【括つて】クハつて。

【膨脹】バウチャウ。ふくらすこと。

【撼かす】ウゴかす。

【絁絲】繭からぬき出したばかりの粗

末な絁。

【敏捷】ビンセフ。すばやく。

【聲を呑む】鳴きやむ。

【滅切り】メッキリ。きは立つて。

【擦つて】クスグつて。

【消耗】セウカウ。セウモウ。モウは

實は誤讀。消しへらす。費やしへら

す。

【恢復】クワイフク。もどす。とりかへ

す。

【覺醒】カクセイ。目ざめること。き

づくこと。

【櫟・檜】タヌギ・ナラ。木の名。

【あさましい】見苦し。

一〇 大地の句

【蝦蟇】ガマ。蛙の一種。

【高粱】カウリヤウ。たうもろこしの

異名。

【がつしりした】物の強健なさまにい

ふ。

【象徴】シャウチョウ。ある心を形とし

てあらはしたものの。

【悠然】イウゼン。ゆつくりと。ゆつ

たりと。氣長。

【洗盤】アラヒバン。

【燦として】サンとして。きら／＼と。

【顔へる】フルへる。

【緊張】キンチャウ。心のはりつめて

ゐること。

一一 小鳥の巢

【炬燵】コタツ。

【つまゝれる】だまされる。ばかされ

る。

【呪】マジナヒ。

【けんげ】蓮花草のこと。

【土筆】ツクシ。

【手すさび】手なぐさみ。

【薬舂】ワラフゴ。農夫などが物を運

ぶに用ひる薬で作つた道具。てんび

んにかけてかつぐ。

【無花果】イチジク。

【恰好】カッカウ。

【銜へて】クハへて。

【挫け】クジけ。

【作事】サクジ。仕事。

【薬屑】ワラクヅ。

【莢豆】サヤマメ。

【彌次郎兵衛】ヤジロベエ。釣合人形

のこと。紙などで作つた人形に竹な

どの骨を入れ、両手などを細長くし、

そはしに豆またはむくろじなどの

重しをつけ、中心點をとつて倒れぬ

やうにする。

【瞬つた】カへつた。

【枇杷】ビハ。

一二 露 管

【誘惑的】イウワクテキ。心を惑はす

やうな。

【偃松】ハヒマツ。松の一種。高山に

生ずる。地に副うて低くはふ松であ

る。

【雷鳥】ライテウ。高山にゐる鳥の名。

一五 川 霧

【簾】ロ。

【軋る】キシる。

【突如】トツジ。にはかに。突然。

【船脚】フナアシ。船の速力。

【橋杭】ハンゲヒ。

【渦巻く】ウヅマク。

【濛氣】モウキ。もや／＼たちこめる

氣。

【寝附が悪】安心されないのである

激した。ゲキした。おこつた。

【牡蠣】カキ。貝類の名。

【鹹水】カンスキ。しほ水。

【頓狂】トンキョウ。だしぬけに調子

はづれの言動をなすこと。

【鷗】カモメ。水鳥の名。

【瞬く】マタ／＼。

【海苔鹿菜】ノリソダ。海苔をふやし

てとる爲に海中にたてる木の枝。

【睜る】ミハる。

【幻の如く】マボロシの如く。ほんや

りと。

一六 水の都

【欝てた】ソバダてた。

【もどかしがる】氣をもむ。じれつた

く思ふ。

【窄めた】スボめた。

【酷寒】コクカン。きびしい寒さ。極

寒。

【黎明】レイメイ。夜あけ。あけ方。

一三 お 祭

【花笠】ハナガサ。造花で飾つた笠。

【腹掛】ハラガケ。はらあてともいふ。

多く職人などがつけて居る。

【向鉢巻】ムカフハチマキ。額の正面

で結んだ鉢巻。

【半被】ハツビ。しるしばんてん。

【お練り】おネリ。お通りくらの意。

【山椒】サンセウ。木の名。こゝはそ

の木の実をいふ。薬用などにする。

辛味がある。

【山王】サンノウ。サンノウと發音す

る。日枝神社をいふ。

【氏子】ウヂコ。産土神のまもりを受

ける土地に生れた民。

【揉め】モメ。こゝでは上下にゆるこ

と。

【鬼灯】ホ、ヅキ。

【提灯】チャウチン。

一四 草鞋の旅

【四肢五體】シ、ゴタイ。全身といふ

程の意。四肢は手足で。五體は筋。

脈・肉・骨・毛皮。

【いざこざ】ごた／＼した。

【億劫】オククウ。面倒なこと。

【じんなり】しなやかに。

【蹠】アシウラ。足のうら。足のひら。

【穿いて】ハいて。

【離別】リベツ。わかれ。

【因果】イングワ。ふしあはせ。報い。

【あらは】むきだし。

【日ざし】日光のさすさま。

【靉靆】リンダウ。草の名。

【性癖】セイヘキ。くせ。

【仰山】ギャウサン。おほげさ。

【殖林】シヨクリン。木をうゑて林を

つくること。

【荒涼】クワウリャウ。あれて物すさま

じきこと。

【溪川】タニガハ。

【巍々】ギ、。山の高く聳えたさま。

【喧傳】ケンデン。かまびすしくいひ傳へること。盛んに言ひはやすこと。

【斗出】トシュツ。突き出る。

【要塞地】エウサイチ。攻むるに難く守るに易き所に防禦工事をして、兵力を以て守備する地。

【城郭】シヤウクラク。しろ。

【魚鹽の利】ギョエンのリ。魚をすなどり鹽を製する利。海産物の利。

【資源】シゲン。もと。

【大夏高樓】タイカカウロウ。大きな高い建物。

【蜃氣樓】シンキロウ。大氣の具合で遠方の地物などが空に浮んで見える現象である。

【見紛ふ】ミマガふ。

【眞帆片帆】マホカタホ。眞帆は、帆を正面に向け、その全體に風を受けること。片帆は、帆を一方に片よせて風を受けること。

【たゆたふ】定まらずたゞよふ。ためらふ。

【遊子】イウシ。旅人。

【水に負ふ】水のおかけを受けてゐる。

【床しい】ユカしい。何となくしたはしい。

【坐乗】ザジョウ。船艦に乗つて居て指揮すること。

【悠々】イウ／＼。ゆつくりとしたさま。

【指環】ユビワ。

【一七】千年川のほとり

【灰かに】ホノかに。

【汎濫】ハンラン。水のみなぎりあふれること。

【嫩葉】ワカバ。

【行々子】ヨシキリ。小鳥の名。

【鶉】ツグミ。小鳥の名。

【印象】インシヤウ。見聞した事物が深く心に印されること。

【歎乃】フナウタ。船歌。字音、アイダイ、又はアイナイ。

【一八】汝の母

【塹壕】ザンガウ。敵を防ぐために地を掘つて土を前方に積み上げたもの。

【飛翔】ヒシヤウ。飛びかけること。

【齎す】モタラす。

【殘忍】ザンニン。むごたらしいこと。

【偵察】テイサツ。ひそかに敵の様子をさぐること。

【赦す】ユルす。

【悴】セガレ。他人に對して自分の子をいふ。

【述懐】ジツクワイ。心の中を述べること。

【蘇生】ソセイ。生きかへること。

【畢竟】ヒツキヤウ。つまり。

【滞在】タイザイ。逗留すること。

【一九】大道を行く

【國際的飛行】國交的飛行といふのと同じ。

【黃沙】クワウシャ。沙漠地方から来るすなほこり。

【羅針盤】ラシンバン。航海などの時方角を知る機。

【蒼天】サウテン。あを空。

【腹を据ゑて】決斷する。思ひ切る。

【妄執】マウシツ。むだな思ひ。つまらぬ考へ。

【不覺】フカク。意氣地のないこと。

【死出】シデ。死出の山の略。こゝでは死に出かけることをいふ。

【安泰】アンタイ。無事なこと。

【心機一轉】シンキイッテン。心持のがらりと變ること。

【執着】シツチャク。物事を思ひつめて離れぬこと。こゝでは、死ぬのをいとふ心の離れぬのをいつた。

【直覺】チツカク。理窟なしにすぐ考へつくこと。

【得物】エモノ。武器。

二〇 凌霄花

【凌霄花】ノウゼンカヅラ。夏の頃黄赤色の花を咲かせる蔓草の名。

【絡つて】マツハつて。からまつて。

【生籬】イケガキ。

【冠木門】カブキモン。兩柱の上に横に渡した木を附けた門。又はその横木の上に板屋根をおぼうた門。

【坪】ツボ。家の間、又は垣の内の空地。

【蓆】ムシロ。

【投網】トアミ。魚を捕る網の一種。

【長押】ナゲシ。鴨居の上に横に長く渡す材。

【水洩】ミヅツバナ。

【泳へて】コラへて。

二二 記念の家

【招待】セウダイ。招くこと。招いてもてなすこと。

【敬慕】ケイボ。うやまひしたふこと。

【複製】フクセイ。それと同じものを一つ以上つくること。

【厨房】チュウバウ。くりや。臺所。

【銅壺】ドウコ。爐や竈などに取附けて湯を沸かす銅器。

【膝頭】ヒザガシラ。

【躊躇】チウチ。ためらふこと。

【服膺】フクヨウ。心にとめて常に忘れぬこと。

【秩序】チツジ。順序。

【徹底的】テツテイテキ。残すところなくすること。

【批評】ヒヒヤウ。よいわるい等を判斷すること。

【揮つて】フルつて。

【辛棒】シンバウ。

【崇高】スウカウ。けだきこと。

【慘めな】ミジめな。

【老熟】ラウジュク。ものなれてをること。

【迎も】トテも。

【安逸】アンイツ。遊び暮すこと。

【使命】シメイ。使のつとめ。

二三 安井息軒

【輟む】ヤむ。

【脊丈】セタケ。

【畑打】ハタウチ。畑を耕す。

【疱瘡】ハウサウ。天然痘。

【剩へ】アマツサへ。その上に。カタハ。不具のこと。

【片羽】カタハ。不具のこと。

【偶然】おもひがけぬこと。

【殘酷】ザンコク。むごたらしいこと。殘忍。

【庇護】ヒゴ。かばふこと。

【自炊】ジスキ。自ら飯をかしぐ。

【學殖】ガクシツク。學問の素養。

【訃音】フイン。フオン。死去のしらせ。

【昌平齋】シヤウヘイカウ。江戸幕府でたてた學校の名。江戸の本郷湯島

にあつた。
【註疏】 チュウソ。註釋。ときあかし。
【經義】 ケイギ。經書の意義。
【無頓着】 ムトンヂヤク。何事も心にか
けぬこと。
【座右】 ザイウ。座のかたはら。
【半折】 ハンセツ。唐紙畫仙紙などを
堅に二つに切つたもの。
【抱負】 ハウフ。心の中に抱いて居る
望。
【傾注】 ケイチウ。心を傾け注ぐこ
と。
【擲擧】 ヤユ。からかふ。
【侍讀】 ジドク。君の側に侍して書を
講ずること。

二二二 二百十日

【二百十日】 立春(二月三四日頃)から
二百十日目に當る日。凡そ九月一日
の頃。
【壯烈】 サウレツ。をしく烈しいこ
と。
【唸つて】 ウナつて。
【體軀】 タイク。からだ。
【すほめて】 ちよめて。

【饅飽腹】 ウドンバラ。うどんで腹を
満たしたること。
【懸念】 ケネン。気がかりなこと。
【漕附けた】 コギツけた。骨を折つて
達した。
【禰宜】 ネギ。官司に次ぐ神職。
【拍手】 カシハデ。神を拜するに兩の
掌をうちならすこと。
【森閑】 シンカン。ひっそりとして靜
かなこと。
【靡いた】 ナビいた。
【毬栗頭】 イガグリアタマ。髪を短か
くかつた頭。
【浴衣】 ユカタ。
【襦子張】 シュスバリ。襦子は織物。
【天佑】 テンイウ。天のたすけ。
【故の態】 モトのサマ。
【痛快】 ツウクワイ。非常に心地のよ
いこと。小氣味よい。
【蠕動】 ゼンドウ。うごめくこと。う
ごくと動くこと。
【裡】 ウチ。
【容赦なく】 ヨウシャなく。遠慮なく。
【悄然】 セウゼン。力なくしよんほり
して居るさま。
【濛々】 モウ々。雨霧などでうす暗

くなること。もや／＼と。
【鎖す】 トザす。
【沸騰る】 ワキアガる。
【踵】 キビス。かゝと。
【糞々】 ケイ々。ひとりほつちのさ
びしいさま。

二二四 リヨンの郊外

【野茨】 ノイバラ。ノバラ。
【丘陵】 キウリョウ。をか。
【小徑】 コミチ。
【蓋】 サカツキ。

二二五 箱根路

【行脚】 アンギヤ。處々方々を遊歴す
ること。
【烟霧模糊】 エンムモコ。烟のやうな
霧がたちこめてほんやりしてゐるこ
と。模糊は模糊ともかく。
【辿り着く】 タドリツク。たづねつく。
【いざ給へ】 さあおいでなさい。
【むさくろしき】 きたならしい。
【落膽】 ラクタン。がっかりすること。
【眞面目】 シンメンモク。ありのま

の姿。

【まだき】 朝まだきの略。夜あけの意。
【沾ひ】 ウルホひ。
【寛】 カケヒ。地上にとひをかけて水
を通はすやうにしたもの。
【鶺鴒】 セキレイ。鳥の名。
【しるべ】 案内。導き。
【鴨】 ヒヨ。ひよどり。
【かしまし】 さわがし。
【巖端】 イハハナ。
【駕籠舁】 カゴカキ。
【物寂びて】 モノサびて。何となく古
びた趣があつて。
【千仞の山峽】 センジンのヤマカヒ。
千仞は非常に高いこと。山峽は山と
山との間をいふ。
【樵夫】 キコリ。
【犬薺】 イヌタデ。
【山姥】 ヤマウバ。
【秋さびたる】 秋のものさびた趣にな
つた。
【仙源】 センゲン。仙人の住む處。仙
郷。
【絶景】 ゼツケイ。すぐれたよき景色。
【恍惚】 クワウコツ。うつとりとする
ま。

【くひぜ】 木の切株。

【兀然】 コツゼン。高いさま。
【幾許】 イクバク。
【午餉したむ】 ヒルダしたむ。ひ
るめしを食べる。
【誇りに】 ホコりに。自慢顔に。
【赤腹】 アカハラ。川魚の名。
【おもふものから】 思ひながらの意。
思ふのだが。
【歌枕】 ウタマクラ。歌の材料。
【尾花】 ヲバナ。すゝきの花。
【金紋さき箱】 金の紋をつけたさき
箱。さき箱は挾箱(ハサミバコ)のこ
とで、棒を以てかつぐ。
【鳥毛】 トリゲ。鳥毛鞘。槍のさやに
鳥の毛をつけたもの。
【片鎌】 カタカマ。片鎌槍。十文字槍
の片方の鎌のないもの。

二二六 子規の絶筆

【絶筆】 ゼツピツ。最後の筆蹟。
【令聞】 レイケイ。他人の妻の敬語。
【噤んで】 ツグんで。黙つてをること。
【聽て】 ヤガて。
【好奇心】 カウキシン。ものずきの心。

【咳】 セキ。

【反故】 ホゴ。ホグ。書きけがしの紙。
【合點】 ガテン。承知の出来ること。
【痕】 アト。

二二七 鳩

【曲線】 キョクセン。まがった線。
【清淨】 シャウジャウ。きよいこと。

二二八 自然の音楽

【翠】 ミドリ。
【巨利】 キョリ。大きな寺。
【揚雲雀】 アゲヒバリ。空に高くあが
るひばり。
【せうらく】 浅い瀬などに水が小さな
音を立てて流れること。
【根芹】 ネゼリ。根を食用とすること
から、芹をかくいふ。
【いさゝ小川】 水の少し流れる小川。
【午下り】 ヒルサガリ。午後一二時の
頃。
【杏】 アンズ。
【軋つて】 キシつて。
【箴】 ラサ。はたをりの道具。

【拍子】 ヒヤウシ。調子。
【旋律】 センリツ。音の規則正しくめぐること。

【沁入る】 シミイ入る。
【嫩草】 ワカクサ。若草。

【蜿蜒】 エンエン。うね／＼と曲りくねつたさま。

【幽玄】 イウゲン。かすかに奥深いこと。

【鞞鞞】 ダウタフ。瀧などの響。

【初拾】 ハツアハセ。

【喘ぎ／＼】 アへぎアへぎ。息をきらしきらし。

【疎密】 ソミツ。まばらなるとこんでゐること。

【白簾】 ハクレン。白いすだれ。瀧をさふ。

【躑躅】 ツ、ジ。ツシホ。楓の一種。

【翠巒】 スキラン。緑の山。

【閑寂】 カンジヤク。物しづかなさま。

【聯想】 レンサウ。想ひおこさせること。

二九 鍵の國と障子の國

【乃至】 ナイシ。また。或は。

【纏めて】 マトめて。

【素人下宿】 シロウトゲシユク。

【危惧】 キグ。あやぶみおそれること。

【抽斗】 ヒキダシ。

【装置】 サウチ。しかけ。

【敲く】 タ、ク。タ、ク。

【蟄居】 チツキ。一室に閉ぢこもつて居ること。

【茫然】 バウゼン。ほんやりしたさま。

【漠然】 バクゼン。ほんやりしたさま。

【誘惑】 イウワク。悪い方にひきいれまどわされること。

【些少】 サセウ。すこし。いさゝか。

【圈套】 ケンタウ。人をわるい道におとし入れるわな。

【毅然】 キゼン。強くたけきさま。

【果を受け】 ルキをうけ。わづらひをうけ。

【地步】 チホ。たちば。

【惑溺】 ワクデキ。迷つて本心を失ふこと。悪いことに溺れること。

三一 ことわざ

【眞似】 マネ。タスキ。

【襷】 タスキ。カナボウ。

【鐵棒】 カナボウ。カナツチ。

【金槌】 カナツチ。サンヨウ。見つもりを立てること。

【蘂苞】 ワラヅト。

【杓子】 シヤクシ。

【耳搔】 ミ、カキ。

三二 三人の時計

【午砲】 ドン。正午を知らせる大砲の音。

【質】 タチ。【あてにならない】 たのみにならぬ。信ぜられぬ。

三三 修養二題

【秘訣】 ヒケツ。奥の手。

【左支右吾】 サシイウゴ。左右をさへとめること。

【濶歩】 クワツボ。おほまたに歩く。自由に動作すること。

【稽古】 ケイコ。

【業務多端】 ゲフムタタン。仕事のこと。

【一廉】 ヒトカド。一きは目だつた。きはだつた。

三四 非凡なる凡人

【技手】 ギシメ。

【非凡人】 ヒボンジン。すぐれた人。

【偏物】 ヘンブツ。かはりもの。

【適評】 テキヒヤウ。適當な評。

【天才】 テンサイ。うまれつきすぐれた人。

【腕白】 ワンバク。いたづら。

【足繼】 アシツギ。ふみだい。

【洋綴】 ヤウトヂ。西洋風の本の綴方。

【眼ざし】 マナざし。目つき。

【代物】 シロモノ。物といふ意。いやしめた心持がある。人をいやしめていふ時にも用ひる。

【座右】 ザイウ。座席のかたはら。

【郷黨】 キヤウタウ。村のなかま。

【卒直】 ソツチョク。かざりけのないこと。

【敢爲の氣象】 カンキのキシヤウ。何事でも決行するたち。

【堅實】 ケンジツ。たしかなこと。

【有爲】 イウキ。役に立つ。

【背】 まなじり。目じり。

【堂々】 ダウ／＼。立派な威嚴のあるさま。

【殖産】 シクサン。産業をふやすこと。

【家政】 カセイ。家事むき。

【養殖事業】 ヤウシヨクジゲフ。飼つてふやす仕事。

【露骨】 ロコツ。むきだし。

【布哇】 ハワイ。シウセン。世話をする。奔走する。ほねををる。

【周旋】 シウセン。世話をする。奔走する。ほねををる。

【トンビ】 トンビ。鷺合羽の略。外套の一種。

【手提鞆】 テサゲカバン。

【破顔一笑】 ハガンイッセウ。につこり笑ふこと。

【頷く】 ウナヅク。ウナヅク。

【筆法】 ヒツパフ。やり方。

【着々】 チャク／＼。順序にだん／＼

【はかどるさま。次第々々に。】

【煤けた】 ス、けた。

【放擲】 ハウテキ。なげやりにすること。

【惡弊】 アクヘイ。わるい弊害。

【皇天】 クワウテン。皇は天を尊びていふ語。

【蹙然】 セイゼン。きちんと。

【暗檐】 アンタン。うすぐらいこと。

【胸臆】 キウオク。胸中。心中。

【虛榮心】 キウエイシン。みえがる心。

【開拓】 カイタク。きりひらくこと。

【糧】 カテ。糧食。

【出鱈目】 デタラメ。

【木賃宿】 キチンヤド。客が食物を持参し、間代と薪炭の代のみで泊ることの出来る宿屋。

【切迫】 セツパク。せまること。

【藪口】 ガマグチ。

【繩暖簾】 ナハノレン。多くの繩を結び垂らしたのれん。

【喫驚】 キツキヤウ。びつくりすること。

【符牒】 フテフ。あひづの隠語。

【卒然】 ソツゼン。にはかに。だしぬけに。

【不味さうに】 マヅさうに。
 【竹馬の友】 チクバのトモ。たけうまに乗つて共に遊んだ友。をさなともだち。
 【覺束ない】 オボツカない。おほろけな。はつきりせぬ。
 【擲つて】 ナゲウつて。なげ出して。
 【錦繪】 ニシキエ。彩色すりの版繪。
 【突飛者】 トッピモノ。意表外の行爲をなす者。
 【莊嚴】 サウゴン。いかめしく立派なこと。

三五 イソップより

【息子】 ムスコ。
 【蟋蟀】 コホロギ。
 【瘦衰へた】 ヤセオトロへた。
 【水神】 スキジン。水の精。
 【斧】 チノ。
 【河縁】 カハベリ。
 【潜つて】 クバつて。
 【褒美】 ハウビ。

三六 短歌抄

【御手洗川】 ミタラシガハ。社前を流れる川。五十鈴川をいふ。
 【笙・篳篥】 シヤウ・ヒチリキ。共に樂器の名。
 【幽寂】 イウジヤク。奥深く静かなこと。
 【雅樂】 ガガク。我が國上古の音樂の一種。
 【をろがむ】 拜む。
 【度會の國】 ワタラヒのクニ。伊勢國度會郡。
 【弓・矢・鞆の音聞かぬ】 戦のない平和なこと。弓矢鞆は共に武器。
 【大御意】 オホミコ、ロ。心の敬語。
 【鎮ります】 シヅマリます。おちつきなまる。
 【可能性】 或る事の出來得る性質。
 【消極的煩累】 セウキ・クテキハンル。進歩をじやまするわづらひ。
 【皇御孫】 スメミマ。大神の御子孫の意で、天皇陛下をさす。
 【積極的光明的發展】 前途の光明をためて進取的に發達すること。
 【見そなはず】 見るの敬語。
 【饒舌】 ゼウゼツ。おしやべり。

【榎屋根】 マサヤネ。榎はまさ目のある板である。
 【毬】 マリ。
 【燐寸】 マツチ。
 【二月堂】 奈良の興福寺の堂。

三七 至情

【至情】 シジャウ。まごころ。
 【天杯】 テンバイ。天子からたまはる杯。
 【御沙汰】 ゴサタ。お上の命令。
 【恩命】 オンメイ。ありがたい命令。
 【九死一生】 キウシイッシャウ。殆ど死にかゝつて危く助かること。
 【大患】 タイカン。大病。
 【昏睡状態】 コンスキジャウタイ。人事不省におちいるありさま。
 【刹那】 セツナ。瞬間。
 【愛撫】 アイブ。恵み。情深い。
 【感涙に咽ぶ】 カンルキにムセぶ。ありがた涙を流す。
 【慙汗】 ザンカン。はげで汗の出ること。
 【藉りて】 カりて。
 【音信】 インシン。オンシン。たより。

【御神酒】 オミキ。

三八 伊勢參宮

【神々しさ】 カウ／＼しさ。尊くおごそかなさま。
 【畏さ】 カシコさ、おそれおほいさま。
 【數を讀みつゝ】 かずをかぞへつゝの意。
 【嗽いで】 クチス、いで。
 【さびて】 古びて趣のある。古色のある。
 【千木】 チギ。古代の家造に、棟のところで交つて、高く空中に出た木材。
 【堅魚木】 カツチギ。棟木の上に並んでをる木材。
 【垂幕】 タレマク。垂れ下げた幕。
 【跪いて】 ヒザマヅいて。
 【溜息】 タメイキ。
 【現】 ウツ、心のはつきりしない境にあること。
 【額づく】 ヌカづく。ひたひを地につけて禮をする。
 【敬虔】 ケイケン。うやまひつゝしむこと。
 【太廟】 タイベウ。伊勢神宮をいふ。

三九 一月の日記

【頭燈】 Head light. 電車の先頭についてをる燈火。
 【巴】 トモエ。
 【今宵】 コヨヒ。
 【紙薦】 タコ。
 【御稜威の韻】 ミイヅのヒヤキ。天皇陛下の御威光のお蔭。
 【筒袖】 ツ、ソデ。
 【栓】 セン。
 【數入】 ヤブイリ。一月十六日と七月十六日。こゝは一月のである。
 【閻魔堂】 エンマダウ。
 【須臾】 シユ。しばらくの間。
 【西廳】 セイサウ。西のまど。

四〇 兎狩

【貼札】 ハリフダ。
 【炊事番】 スキジバン。飯たき番。
 【結束】 ケツク。身仕度をすること。
 【勢揃】 セイゾロヒ。同勢を描へること。
 【冴えて】 サえて。すみ渡つて。

四一 三太郎風

【雪解道】 ユキドケミチ。
 【氷柱】 ツラ、。
 【叩き落す】 タ、きおトす。
 【奴風】 ヤッコダコ。
 【群風】 ムラダコ。
 【卑劣】 ヒレツ。いやしく劣れること。

【冠たり】クワンたり。第一である。
 【雄たり】ユウたり。すぐれてゐる。
 【天心】テンシン。中空。
 【挑戦】テウセン。戦をしかける。
 【癩に障る】シヤクにサハる。
 【嘯し立てた】ハヤシタてた。
 【切齒】セッシ。はがみしてくやしがること。
 【宙に浮く】チウにウク。空中に浮かぶ。つるし上る。
 【洗禮】センレイ。キリスト教で、罪けがれを洗ふ儀式。こゝでは泥によごされることをいつた。
 【素敵】ステキ。最もすぐれたこと。仰山なこと。
 【群小】グンセウ。つまらぬもの。
 【物色】ブツシヨク。あれかこれかさがし求めること。
 【旋曲り】ツムジマガリ。意地わる。
 【交叉】カウサ。まじへること。すぢかひにすること。
 【平然】ヘイゼン。平氣。
 【活躍】クワツヤク。はたらかせること。
 【示威運動】シキウンドウ。威勢を見せる仕方。

【長者】チャウジヤ。色々の意があるが、こゝでは、富豪とか、金持などの意。
 【翠緑】スキリョク。みどり。
 【漫々】マンマン。水の果てしのなきさま。
 【碧】ミドリ。
 【えならぬ】何ともいへぬすぐれた。
 【蘆荻】ロテキ。あしとをぎ。
 【閑眠】カンミン。ひまのあるねむり。
 【細鱗】サイリン。小魚。
 【綾錦】アヤニシキ。
 【トして】ボクして。えらんで。
 【凭れて】モタれて。
 【早苗】サナヘ。稲の苗。
 【めき／＼】目に見えて。
 【心驕り】コ、ロオゴリ。ほこり。
 【天道様】テンタウサマ。太陽。
 【左右する】思ふまゝにする。
 【撈取つて】ハカドつて。
 【犒ひ】ネギらひ。ほねをりを慰める。
 【寢覺】ネザメ。ねむりからさめること。

四二 湖山長者

四三 國引

【渚】ナギサ。浪打ちぎは。
 【千古】センコ。とこしへ。長い時をシヤ。
 【修理】シウリ。つくらふこと。修繕。修復。
 【新羅】シラギ。
 【神通力】ジンツウリキ。不思議な何事でも自在になし得る力。
 【衝放す】ツキハナす。
 【三撚】ミヨリ。三本の綱をより合せたもの。
 【椀】クヒ。
 【三瓶山】サンベヤマ。
 【菌の長濱】ソノのナガハマ。
 【接合はす】ツギアはす。
 【鴉】カラス。
 【鴛】サギ。
 【鴛鴦】チシドリ。
 【欠】アクビ。
 【渴ゑて】カツゑて。

四四 日の出る前

【お饒舌】おシヤベリ。
 【途方もない】調子はづれの。
 【一ぱい食はされる】だまされる。

四五 世界一の大豪傑

【著しよびれた弱蟲】アヲしよびれたヨワムシ。顔色が青くて元氣のない弱い奴。
 【減法】メッポフ。並はづれて。非常に。
 【案の定】アンのヂヤウ。豫想の通り。考へてゐた通り。
 【肝を潰す】キモをツブす。非常に驚くことをいふ。
 【一策を案す】イツサクをアンす。一つの方法を考へる。
 【狙つて】ネラつて。
 【肝腎】カンジン。
 【雷管】ライクワン。彈藥を發火させる小さい管。
 【拳骨】ゲンコツ。こぶし。
 【頸輪】クビワ。
 【數珠繫ぎ】ジュズツナギ。
 【生憎】アヤニク。アイニク。
 【引導渡す】インダウワタす。殺すこと。

四六 海底

【油タンク】油函。潜水艇を發動せしめる燃料の油を入れておくもの。
 【メインタンク】主水函。艇の浮ぶ力をなくする爲に海水の大量を注ぎ入れる函である。
 【バルブ】Valve。開閉する仕掛。瓣である。
 【部署】ブシ。役わり。手くばり。うけもち。
 【措置を執る】ソチをとる。取りはからひをする。
 【作業】サゲフ。仕事。
 【素直に】スナホに。柔順に。
 【瀕死】ヒンシ。死にかゝる。
 【吐息】トイキ。ためいき。
 【天命】自然の運。

四七 御詞

【巽ニ】サキニ。
 【允許】インキョウ。ゆるし。
 【恙ナク】ツ、ガナク。無事で。
 【喜悅】キエツ。よろこび。
 【朝野】テウヤ。朝廷と民間と。役人と人民と。
 【欣感】キンカン。喜ばしく感ずること。
 【歴訪】レキハウ。順次にたづねること。方々を訪問すること。
 【元首】ゲンシ。國民の主長。君主。
 【眞摯】シンシ。まじめなこと。
 【敦篤】トントク。人情にあつこと。
 【披瀝】ヒレキ。かくすことなくうちあけること。
 【歡待】カンタイ。喜んでもてなすこと。
 【發露】ハツロ。あらはれ。
 【考究】カウキウ。考へて研究すること。
 【接見】セツケン。會見すること。對面。面謁。
 【慘澹】サンタン。なげかはしくいたましいこと。
 【歴々】レキ／＼。はつきり。
 【目撃】モクゲキ。直接目に觸れること。

と。正しく目に見ること。
 【汝々】 シ、つとめて倦まないこと。
 【裨益】 ヒエキ。おぎなひ益すること。
 【國粹の精華】 コクスキのセイクラ。
 國民特有のすぐれたところ。
 【宏謨】 カウボ。大なるはかりごと。
 【則リテ】 ノットリテ。手本とする。
 【聖意】 セイイ。天子の御心。大御心。
 【副ハム】 ソハム。つき従ふ。
 【行啓】 ギヤウケイ。太皇太后・皇太后・皇后又は皇太子のおでましになること。
 【殷盛】 インセイ 甚だ盛んなること。

大正十五年十月十三日印
 大正十五年十月十六日發行
 昭和二年二月六日訂正印刷
 昭和二年二月九日訂正發行



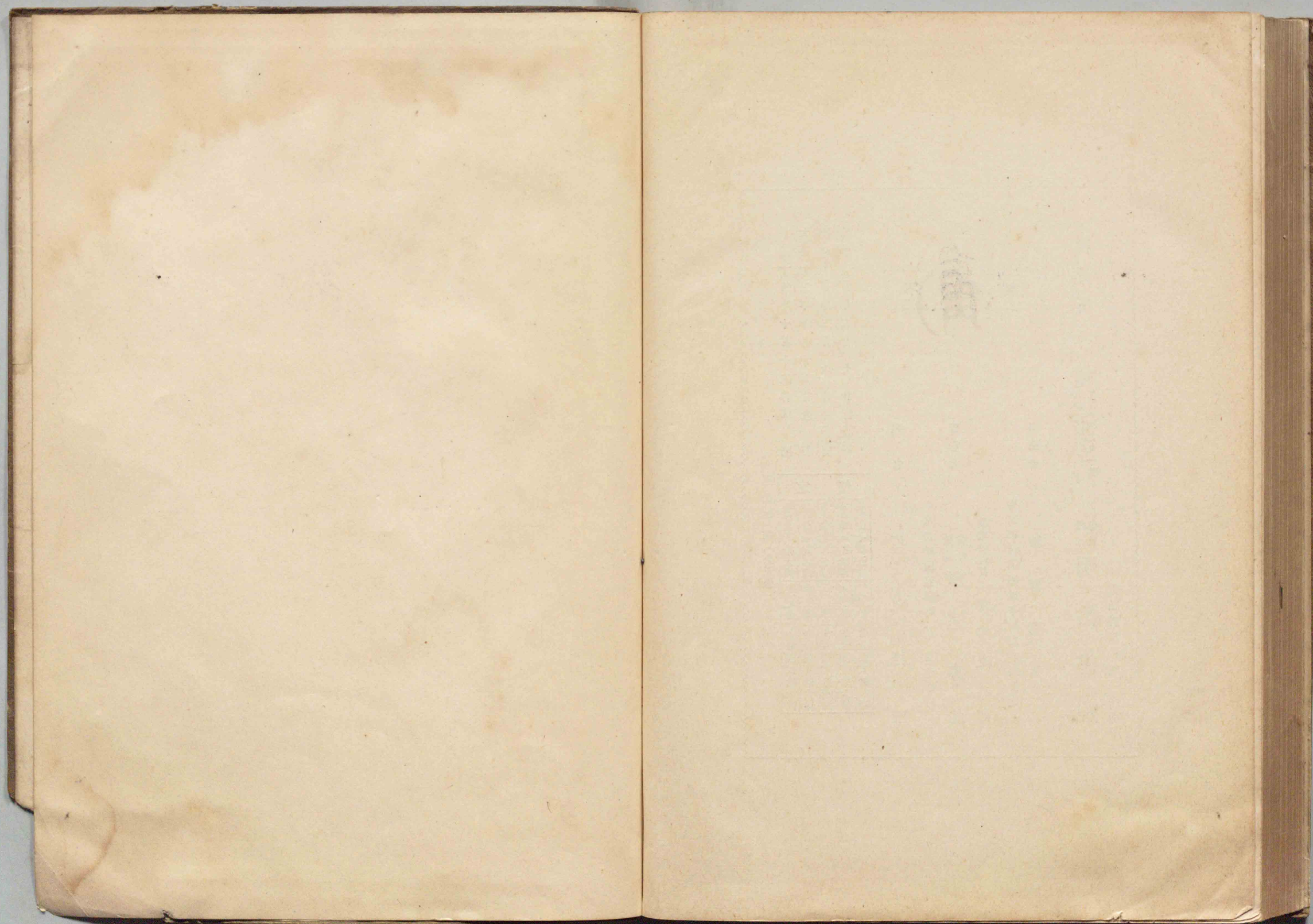
國文新編(全五冊)

價	定
卷一金七拾六錢	昭臨 卷一金壹圓貳拾六錢
卷二金七拾六錢	和時 卷三金壹圓貳拾六錢
卷三金七拾五錢	三定 卷三金壹圓貳拾四錢
卷四金七拾六錢	年度 卷四金壹圓貳拾六錢
卷五金七拾五錢	度價 卷五金壹圓貳拾四錢

編者 垣内松三
 東京市神田區錦町一丁目十番地
 發行者 株式會社 明治書院
 取締役社長 鈴木友三郎
 印刷者 東京市神田區雉子町三十四番地
 綾部喜久二

發行所

東京市神田錦町一丁目
 (振替東京四九九一番)
 株式會社 明治書院
 電話神田一四一四番



七四
1519

号勿敏男

広島大学図書

2000039909

